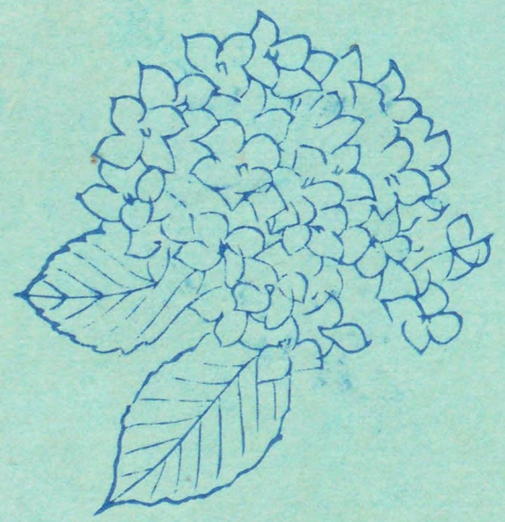
918.6
1989k
00252011



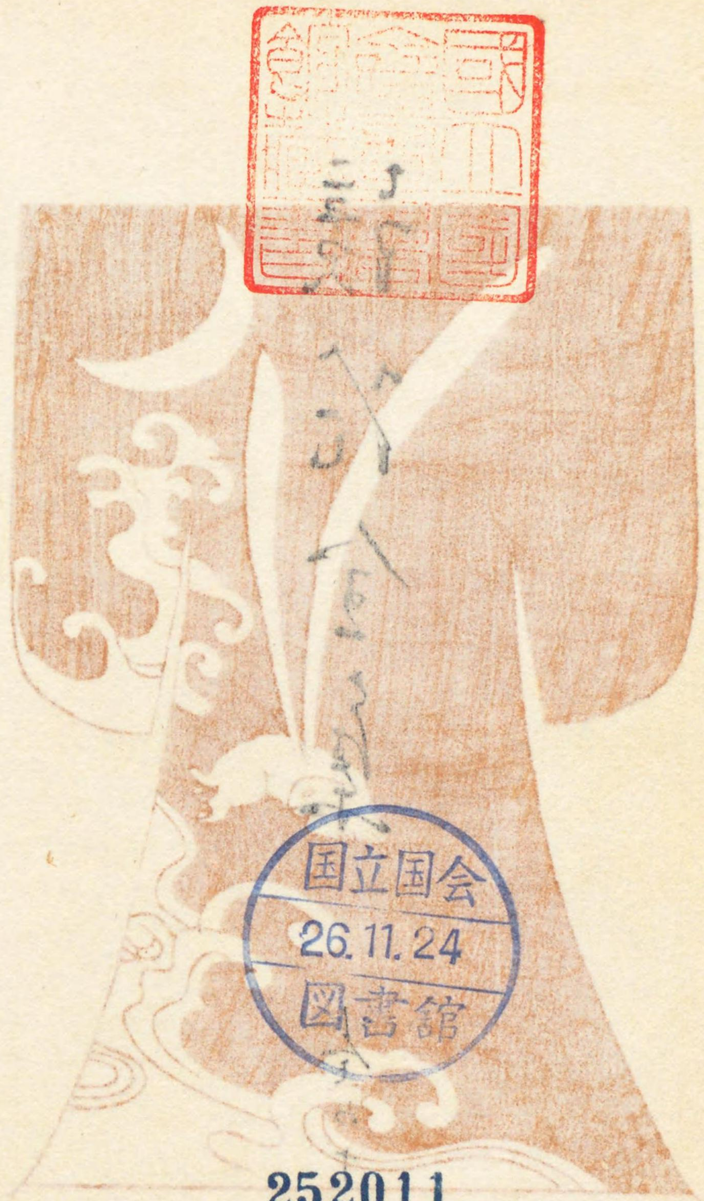
續花會集

卷之十八

110638

目次

鴛鴦帳（大正七年六月）……一
芍藥の歌（大正七年七月）……三



国立国会
26.11.24
図書館
252011

鴛鴦帳

序

一杯と云ふと身賣じみますが、然うではありません。年内に書上げて、春の初賣に間に合はせ、澤山儲けさしてあげるよ、と云ふ手練を以て、例の苦しがりが、其の月の算段に前借を申込みますと、早速承知をしたのでございますが、馴染のない書肆さん、とは言ふものの何うだらう、と半分、當にしないでは、居られないのに、居ました處、其の九月二十九日、三十日は御存じの大暴風雨でございました。前日も可恐い大降で、車軸を流す雨の中を、羽織袴で止善堂の眞四角だが憎くない主人がみえて、約束通り耳を揃へて、……羨しがるに及びません、いや、もう聊少な儀で、しかし私に取つては……大金を渡しました。大雨の中と言ひ俥でお運びはお氣の毒だと申しますと、贅澤なやうですが、濡れた膝でお疊を濕らしてはお氣味が惡からうと存じて一臺驕つて駈つけましたと云ふ挨拶。これぢやあ期日が間違へられますまい。處で、腹案は七八年前から、世帶持の懷中にも此ばかりは暖めてあつたのでございますから、早速折りめのつかない處を取かからうといたしますと、私どもには書きだし、皆樣にはよみはじめ、と云ふ處がなか〳〵樂にまるりません。一體は江月園の主婦照吉のお新が、柴又あたりの川魚料理か何かで、三個の色魔が、突羽根の娘を鬮取にする處を、それとなく小耳に挾むのを「第一回」にしようと云ふ考へでございましたけれども、一を上げても三を下げても何うしても隅田川の流に調子があひません。まだ一枚もかけないで十月の九日に成つたのです。此の日は、私の父の命日ですから、何でも一行でもと思ひましたが、目を据ゑたばかりでそれも出來ないで、十二日の夜は丁ど三番町の二七の不動樣の緣日。くるしい時の神だのみ、ふと思ひついて、江月園の寮番が、那謨三滿多を唱へながら、月の夜ふけに綾瀨へ出掛ける處からかきはじめたのでございます。が六七回、次の「小搔卷」へかはつて、法學士板倉光年をはじめて御目に掛けようとする處で、又つかへて、一寸も前へ出ないのでございます。

月日の方が勝手次第に駈足で飛びますから、忽ち月末と成る、此の瀨戸を凌ぐのに、又前借を申込むと、快く持參に及んでくれたのが、大の月ゆゑ勘定前の三十日の夜。今度はお天氣は好うございました。大分御進行で、勿論、と戰場往來の兵なれば、矢玉の中に悠然と、脂下つて答へたが、三百枚は要らうと云ふのを、まだ三十枚に滿ちません。書肆さんが歸つたあとで、(堅いお方ですね、お金子の包を手首に結へておいででしたよ。)と家内のやつが威かします。あゝ扨は先方でも餘り樂な金子ではあるまい、さあ、恁うしては居られないと氣がせくと尙ほ不可い。苛つ

てあせつて、果は弱つて、頭から夜具を被つて寢て居る處は、酒さへ飲まねば病人でございます。
えゝ、前借だにあらずんば、其の病氣と言つても斷つて書かずに濟む、が然ういかないで、義理
に成つて、此の前借に苦む處は、篇中の苦界の姐さんたちと、餘り相違はございません。
漸と筆が運びました。「蠟燭」あたりまで一氣に進んで、此の間に雪岱さんに表と裏の見返しを
誂へました。自分で申すも如何なれど、止善堂も店の看板にと云ふ大奮發、近來の美本に仕立て
ようと云ふ意氣込の處へ、雪岱さんが私と違つて、色ばかり、まだ慾を知らない人ですから、手
間を構はぬ骨折最中、また月末になつたでせう。十一月、卽ち前借、おなじことでお恥かしい、
内金、先借とした處で、借込んだのに違ひない。新年の間に合ひませうか。もう半以上出來て居
ます。あとは徹夜で、十日前は、と今度は其の氣で請け合つた時が、漸く「水神伯」と云ふ處だつ
たのでございます。なか〳〵何うして、あと十日や一週間で遣拔けられよう筈がない。弱つたな、
今度は師走で、千倉ケ沖の大晦日。書肆の顏も三度と聞けば、もはや金も貸すまいし、と云つて
夜遁げも出來ないし、義理は惡いと知りながら、他を稼いで店賃米代勘定せずには置かれません
ので、此の鴛鴦は凍らぬやうに、密と炬燵に寢かして置いて、此方は夜稼ぎ荒稼ぎ、凄じなんと
愚な中へ、無理な催促にも及ばないで、止善堂から、御歲暮に、砂糖到來は苦かつた。漸と新年
おめでたう。さて早や凡夫の淺ましさは少々飲まずに居られません。御免なさい、一月は何も出

來ず。でも内心の苦しさは、二月紀元節の夜でした。日本橋邊の或家で、私一人はやけ酒を飲ん
だ時、實際つらい、と染々言ふと、金子と力のある色男で、割前勘定の大株主芝白金のやんちや
ん息子、目下大阪のぼん〳〵たる水上の瀧太郎が、一座の雪岱に囁いて、泉のために前借を其の
書肆へ返さうよ、明日行つて談判をして下さい、然うしたら催促されずに濟むだらう、と目を光
らして言つたるよし。爾時は醉つてて知らず、後で聞いて泣かされました。尤も私には内證で計
らふ約束だつたさうですが、雪岱さんが中を取つて、繕つて、餘り急がせない方が可からうと、
お庇で此の人まで氣が強かつた。それは成程、いざ、と成れば、金子を返してあやまれば濟む次
第ですが、こゝに濟まぬのは作者へ貸したばかりでない、書肆さんの仕込の方は、表紙、みかへ
し、扉をはじめ、箱張の繪に至るまで、板木代、摺代、紙代と、もう積んで出來上つた此の仕込
が些や少々の格ではないので、私だけ返すから、それで可いでは納まりません、と云つた處であ
せるばかりで、仕事は一向捗取らず。實は正月七草の晩に「第三十回」を半（孰方へ）とまで書
いて、其ッ切、人の情に奮起して、二月の二十日に（夜露にめげず。）とまでで又續かず。二月の
間に唯半枚の十行ばかり。又書けなくなつて居る處。……もう恁うなると附元氣の岡惚の顏なぞ
より、水上さんに逢ひたく成つて、三月の十日から大阪へ行つて二十日まで遊んで來ました。
書店の驚駭一方ならず、繪の刷上りがこればかり、と肩の上まで手で仕切つて嘆息をする始末。

喧嘩ものつぴきも成るのぢやない、花時までには間に合はせる、と柳のやうに受流しても、春風ばかりは吹いて居ず。今度こそは、と稿を繼いで、「岡釣」の一段を漸と通拔けたのですが、何故か彼處の遣憎かつたことと言ふものはありません。遊んでも居ましたけれども、少しの處にやがて三月。人間一人退治るのは煩かしいものだと思ひました。洒落や串戲を言ふやうでも當人は唸るんです。あとは故障なく正月に入つて、月末の二十四日、此の日は母の命日に、「處女の五十四、五十五。」彼處を夜ふけに書きました時は何とも言へないなつかしい氣がしまして、我ながら優い手に抱かれたやうで思はずほろりと落涙をしたのであります。夜ふけ人靜まつて、此の心持は、政治家も、學者も、財産家、惟ふに宗教家も、一寸誰方も御存じあるまい。作者冥利の、果報よ、と嬉しいことに存じます。然も、其の夜は、あとの「船の行方」を書きますのに、濱町を視て、折から緣日の清正公へ參詣をして歸つてからなのでございます。すぐに續けて、とに角、二十七日の正午過ぎまでに出來たのです。扨て此のもの語は、都合あつて、いろ〳〵前後をいたして居りますが、法學士板倉と萩島家小照とのなれそめが、そも〳〵のはじまりで、あひゞきして居た築地の待合が金子につまつて不首尾に成ります。こゝが丁ど、「霜の籌火」の處で、あとの「過ぎし後朝」の場と同じ朝の出來事なのでございます。こゝで、小照が先の客の猪村大八に采女橋の河岸の船で出會ふのです。で、築地の待合が不可いために濱町の(茂)と云ふ内で逢ふ間に、事件が

起つて、小照の方は客につれられて伊豆へ行つて、そこで止むを得ない事情のために、かへり道で、眞鶴の沖で汽船が衝突をしたのを汐に、身を投げたのを救はれます。此の時、水底の其の姿より帶留の金具の光が月に輝いたのが目標に成つて、人に助けられたと云ふ、其の帶留の銀の白鷺の金具に淺葱の紐のついたのは、(小照が締めて居たのは違ひます。)輝方さんがいま形見に祕藏して居なさいます、蕉園お百合さんの大すきな持ものだつたのを借用して使ひました。

序に照吉の爪彈は、實は富本か一中なぞだと、底が知れないので可いのですが、恥かしいが、うまいのは一寸聞かれず、知らないでは情がのりませんので、撫子の小唄にいたしましたが、これは實際篇中關係の一婦人から、いゝ音を直接に聞いたのでございます。一方光年の方は、其の間に、不首尾な葱の歸途を、大川端で小齋田儀一との出會に成つて、それから判事の職に就く。一旦死んで蘇づて小照は新橋へ歸つて、萩島屋照吉と云ふ大姉さんの名を貰つて、仔細あつて、それから繁昌して、江月園のあるじと成ります。其の間三年ばかり逢はずに居たのが、淺草觀世音の參詣に、花川戸で逢ふ處が「邂逅」の一條。年月が過ぎて、江月園のあるじが、其の日も逢ひに來る板倉のために、嫁菜の花を活けようと、薄の土手へ出た處で、水神の裏田圃で、三人の色魔が、鳥料理、筑羽根の娘お縫を闘取にしようと云ふのを立ぎきする、此のお縫は、照吉が名を貰つた其の大恩人のかくし子なのですから、其のために或覺悟をばいたします。其の夜の出來事

が、第一回の「月の綾瀬」で、さて、毘沙門堂で、再び猪村大八に出會ふのでございます。「鷺の帶留」からは、ずつと順の通り。お讀みになれば分るのですが、これは、ほんのお子供衆のために申すのです、――なぞとね、部數を賣りたいものだから。勿論、大骨折の書肆のために――なんのつて、とあたり近所、遠い處は博多あたりでお笑ひでせう。……打あけました處……内々ですよ、これは印税と云ふのですから、作者も分と云ふのが入ります、卽ち酒が、これも内證。

つきましては、雪岱さんが丹精と、止善堂が大勉强にて、これだけの裝幀を、精々勉强仕り、一圓ぐらゐにて、さしあげようと云ふ心組でございましたが、恐るべきかな、作者がなまけて居るうちに、世界いよ〳〵大戰爭にて、米はあがり、薪はあがり、醬油はあがり、紙のあがること、前代未聞、三月中だけにて二割三割暴騰の大椿事、いつ戰爭が止むだらうと、紙價を可恐がる心の中、お推量遊ばして澤山々々御もとめ下さいますやう偏に願上げ奉る。依て謹んでかしは手して、迎福招慶、柏枝大橘、大吉利市、大吉利市、と云爾。

五月雨の雨は三馬が宿醉と青葉の綠は京傳が慾心深き處をかねたる如き
番町の借家の二階に識。

于時

大正七戊午年六月吉日

鏡花小史

月の綾瀬　小掻卷　髪の雫　墨染　蠟燭　霜の篝火　水神
伯　岡釣　過ぎし後朝　操　其月其日　邂逅　驚の帶留
寶玉商　龍女の寢卷　引手茶屋　獅子の小筐　處女　王將
船の行方

月の綾瀬

一

向島水神の森のあたり、庭に池あり、舟もあり、櫻が下は落葉して、萩の枝折戸、芙蓉の袖垣、寂びたる中に艶のある、江月園とて、新橋の藝者萩島屋照吉、本名お新が、貸席を兼ねた寮住居の、門番、風呂番兼役で、名も番藏と云ふ寮番の、月夜に提灯を持つたは堅親仁。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」

明王が慈救呪を誦しながら、獨り綾瀬の方へ、土手を行く。

やがて夜半の一時である。露は草は透通り、風なき蟲の聲冴えて、十六夜ばかりの月の影天心に澄渡れば、隅田川を漕ぐ船は、鵜の浮べる狀して、靜まりかへる川面に、艪の音も聞えねば、水も流るゝものとは思へぬ。筑波や彼處、空遙に、一刷、二刷、すら〳〵と三條四條敷重ねた浮雲の、緩やかに漂へる、宛然筏を流すが如し。時に遙に梟の寂しき聲が、天の河漕ぐ船頭の掛聲

めく。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」草履をすた〳〵運ぶに連れて、櫻の落葉の、夜目にも薄樺色したのが、爪尖にばら〳〵と鳴つて、提灯の灯に搖るゝ風情、乾びた蛾が蘇生つたやうにも見えるし、やがて定に入らうとする蝦蟆の群が、なごりの月を見て踊つて居るらしくもある。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」

なか〳〵梟の怪しい鳴聲や、土手に散敷いた木の葉の異つた形などに驚いて、歸依の呪を念ずるやうな、鳥居數の少い親仁では無いから、一人歩行きの心細さに、念佛を唱へると思ふと違ふ。

實は、行先は知れて居て、もう疾くに歸らねば成らない女主人が、何に手間を取るのか知らず、以ての外歸宅が遲い。それを捜すとまでも無く迎ひに出たので、親仁が篤實な心から、ほつても有るまじい事とは言へ、主人の身に、萬一の恙の無いのを祈るのと思へば可い。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」――が、しかし恁う唱へる口の下から、

「菜を蒔く算段だ、婆様だ。」と、去年の初午、寮内の稲荷祭に、裏田圃の垣根に點した地口行燈の、餘り喝乎とも參らないのを、うつかり舌へ滑らかいて、月夜の苦笑は何う云ふ氣だらう。

いや其の筈、其の筈。女一人だと云つて、夜中だと云つて、如何に歸りが遲からうが、決して案じるほどの事はない。行先も知れて居る……で、其の行先は、やがて鐘ケ淵を過ぎた綾瀬の毘

沙門堂で、女主人は其處へ詣でたのである。のみならず、寮の露地を土手へ出口に、小店を構へて、菓子、果物の商ひする茶店の亭主が、車帳場を兼ねて居て、其が供をして居るのである。

唯、聊か心懸りと言ふは、時刻が時刻なり、女主人の參詣は、内から心構へをして出たのでない。今夜は豫て懇意な客の、四五人藝者を連れたのが、晝過ぎから、人數の割にしめやかに遊んで居て、萩に雪洞の灯が入ると、其處で何とか云ふ、評判の盲人の、（お園六三。）の新内が一段。續いて（膝栗毛の巫女。）が濟むと、一時どつと陽氣に成つた。酒のあとを、露青し、綾瀬の蘆に遊ばうと、一組が袖を連ねて、簪の珠も星の如く、月に輝いて出たのに交つて、土手まで主人ぶりの道しるべ、籠行燈を汐入の小川添ひに、小褄を取りつつ庭下駄で送つたまゝ、さて歸らぬのであつた。

客と藝者の其の一行は、綾瀬の岸の、蘆の小屋の寢た戸を敲いて、其處で船を誂へて、隅田川を漕がせて來て、寮の裏から、水門を開けて歸つた――それが、もう先刻であるのに――皆も案ずる……其處で、番藏が迎ひに出掛けた。

二

土手に、板戸を半ば鎖して、土間に引入れた緣臺の上に、手提の籠行燈の灯の消えたのが載つ

て居た。

此の出口の茶店の女房が云ふのを聞くと、御新造は、此處まで客を送つて來て、庭下駄で引返さうとしたのを、客と藝者とが、一所に、と云つて綾瀬へ誘つた。私は後片附がありますから、と御新造が云ふと、成程お世帶持だ、既に早や十時半と、客は月影に時計を透す。——若い藝者が、姉さんには最う夜露がお身體に障りますもの。——行つて入らつしやい、と其の「姉さん」の御新造は、櫻並樹の中を行く姿の綾の薄霧に、袖の色香を見送りながら、褄を挾んで、路傍へ腰を下した、袂が土に着きさうに、しなやかに肩を落して、片手で密と胸を抱く、……籠行燈も、草の影に。成程「夜露が障りさうな。」華奢な姿で、少時は何にも言はず、熟として遠ざかる跫音を聞入つて、俯向いて、拾ふとも無しに手すさみに、大な櫻の葉の散つたのを掌に掬つて、恁うを輕く投上げては受けて取るのが、お手玉か、手鞠か何ぞ弄ぶやうだ、と思ふと、袖もすつと長く、あの黑髮も、忽ち島田に變つたやうに、年紀も二十の內外に見えたが、と茶屋の女房が語る……はてね、成程、と寮番が、三十路に近い御新造の年を知りつつも、容色、風采然も然うずと聞くと、また女房が、……それからね、爺やさん。

今年は此の鹽梅ぢや洪水は大丈夫、と、もう消えかゝつて、月夜鴉の羽に掛けて飛びさうな細い銀河を見ながら挨拶を仕掛けて、然うした御新造の御容子に、あとを默りで土間に立つて居ま

した夫に、——（と云ふのが車夫である。）——一臺大急ぎで、と急にツイと立つて、緣臺にトンとお置きなすつた、籠行燈が消えました。

女房さん、其の南京豆の袋を七個ばかり。何になさいます。可いから下さい、と御新造が御自分で、ばさ〳〵と兩方の袂へお入れなすつた、それにも秋の聲がする。月は皎々と風さへ白し、お寒くはございませんか、お羽織も召さいで。——何の此の元氣だもの、しかし母衣を掛けて、あの人たちに見えないやうに、向うの土手下を追越して出拔いて下さい。一寸、お茶番、と恁うおつしやる。

や、心得ました、合點、と夫が又おさきばしりに、爲ずともの事を、向顱卷。それ母衣だ前母衣だ、と隣が帳場の車夫たちが手傳ひますのに、お供を羨しがられながら威勢よく駈出して參りましたつけ。——

「へい、藝者衆や、お客樣方は綾瀨から船でお歸り遊ばして、お家の御新造樣はお一人、毘沙門樣へ。……そして、まだお歸りがございません？　尤も夫でもまだ歸りません。然うしてお供をして居りますからには、決して間違ひはございません。しかし、それにしても遲うございますよ。此の道筋ぢや今時何の洒落に、南京豆をお肴でも、一口めしあがらうつて處は無し、——爺やさん、念のために、帳場の車夫衆を、隣から二三人。」

「何、お前様、道中はちよつくら有つても、あの御堂までは寮から庭續きも同じだでの。つい、これんばかしも案じられるやうなら、こゝで立話はしましねえだ。己もね、こんな用でも無うては、場所に居ながら何年にも土手の月は見ねえだもの。風流だあ、これ、些とばかし寒いがよ。」

と鼻の下を横に擦つて、

「ほう、夜が冴えたで、狸囃子が聞える。久しぶりで鎭守様の祭禮の歸路だよ。鼻唄で遣らかすべい。ちよつくら行つて參りやすで。」

「御苦勞様でございますね。」

「何の、お前様。」

其からである。——

「那謨三滿多、波曰羅赧。」

三

扨て、何にしても歸りのほどが些と遲い。

「はてな。」

土手下を歸るにしても、車の音は響きさうなものを、と口癖の「三滿多。」を自分の耳に聞澄ま

すやうに、打傾いて親仁は行く。風もなし、音もせず。提灯の灯で書き散すやうな月夜の草紙はさら〳〵さら〳〵と木の葉で樂書をする後から消えて、蒼白い。

斯くて、地の底から汽車が湧いてでも出た體に、むく〳〵と立昇る大な煙突の煙と、夜業の機關のごと〳〵と響く、鐘ケ淵を通る、と一棟新建の長屋の、其癖垣根も木戸も無い、見透しの草の庭に、洗濯した襯衣が一枚、兩袖を突張つて、宙にぬいと立つたのを、

「畜生め。」

提灯の灯で屹と見た。狐、狸も場所がらで。

「那謨三滿多、波曰羅赧。」

片側の草の中に、水のすら〳〵と青いのは、最う綾瀨の一條。是から毘沙門堂へ行く土手越の坂がある、それは右で。左手の川口に、小さな瓦屋根の、それも大川の流の岸で蘆が茂つて居るから、茅葺に紛ふのが、月下に寢靜つて、宛然家とは見えず、露を打つた蟲籠めく。——客人等の一行は、此家を起して船を漕がせ、蘆を分けて漕出させた、と思ふにつけて、蟲の鳴く音が一時。いま漕戻すか、流に遠く、ぎいと艪の聲。

蟲は更に鳴しきる。筑波の下まで、一續きの廣野に紛ふ。

親仁は四邊を眴して、空を仰いで、玉や、玉や！と云ひさうな、ちぎれ雲を鼻へ吸つて嚔をし

た。處で腰の手拭を抜いて、すぽり、と顎へ頰被。ぬしは三千歳ならねども、寮番の喜平に化けた古案山子が、葛西の物置へ歸る形で、もさ〳〵と坂を下りて、蘆の穂に月の散る、水田の路へ一曲り。俗に此處を、火の見田圃と言ふのである。

野末の霧は濃しと雖も、雲は白く空に動けど、毘沙門堂は何處へも行かぬ。

親仁は直ぐに屋根を見た。

其の御堂へ行く前に、すつくりと天に立つ、田圃の名に呼ぶ火の見の階子。……根を黍殼が取卷く中に、薄綿を黄に染めた灯の影は、見紛ふべくも無い帳場車の提灯であつた。

「親方、これ、兼さんや。」

「や、」と蹲つた蹴込から、黍の中へ階子立に、ぬい、と立つたは茶店の親方。車宿の兼四郎。

突然三寶に叩頭をして、

「お歸りッ。」と頓興聲。

親仁は提灯の手を代へて、持直し、

「お迎ひに出掛けただよ。遲いからね。」と何故か、頰被を取つて、もそくさと懷中する。

「爺やさん。」

と、虚頓として、

「御新造さんは。」

水洟を一つ摺りながら、

「あれ、お迎ひに來ただよ、御新造さんの。や、兼さん、お前さんがお供をしたでねえかね。太く、お歸りが遲いだがな。」

「は、いや、串戲ぢやねえ。」

と兼四郎は印半纏の襟を敲いて、

「一杯機嫌でお供をして、花見の時の夢を視た。……田圃道でね、土手の草ッ原へ、悪戯に燐寸を摺つて火を附けて、ぱつと燃立つて、脚が暖いと思ふと、(誰だあ。)ッてんだ。(放火をする奴あ。)放火は酷いや、吃驚して、へゝゝ。」

と丼を探しながら、提灯を取つて草を透して、

「一服飲んでト拂いたまでは覺えて居るがね。」

「兼さん、何を搜すだ、えゝ。」

「分つてまさね、御新造さんさ。」

四

「露ッ玉ぢやあるまいし、御新造さんが草の中に光つて居て堪りごとあるものか。馬鹿なことを言つて、寐惚目に何が見えべえ。これだらう、お前さんの探すのは。」
と親爺が目敏く、煙管を拾つて、目先に突出す。
「いや、此奴だぜ。ぽッと遣つた。」
と拂く眞似して、
「誰だあてんだ、放火をする奴あ、——うつかり、とろ〳〵と遣つちまつた、あゝ。」と掌で、すぺりと撫でて延びた顔。
「厄介な男だの。」
「やくかいな男ですよ。——いや、御苦勞樣。」
「御苦勞も何も無いがね、お前等がお供をした、とお客人が言はしつけえ。御新造樣は、太く手間が取れるでねえかな。こんな夜さりだし、田圃さ、人ッ子一人、蛙だつて歩行かねえ。ころころ蟋蟀の聲ばかりだあ。お堂まで、はい一所に附着いて行つてくれさうなものではねえかよ。」
「皮肉を言つちや不可え、爺やさん、其處は兼だ。今見た花見の夢にかつて、矢張り御新造さんのお供をしたくらゐだがね。參詣をするのに俥を乘りつけるのは可厭だつてね、いつも晝間供をする時でも然う言ひなさるんだ。……ぢや夜だから、身體だけ御一所にと言つたけれど、それで

は拜むのに氣が散るからつて、成程、御無理、御尤で。……」
「其處で一寐入り、ぐつすりと遣らかしただ。」
「あれ、また可厭な事を言ひッこなしだぜ。寐惚けた處で兼さんだ。お前さんの提灯を一目見りやあ、お歸りが遲いのを案じて、お迎ひだ事は、柱曆で早分解だ。毘沙門堂へ韋駄天さね。すぐに駈着けるのも承知だけれど、お拜みなさるに氣が散るッて一件だ、野暮にお騷がせ申しても。」
と膝掛を肩に捲いた形も、醉覺らしく眞面目に言ふ。
爺やも、提灯の角度を下げて、
「大きに其處も有るだからな、已も樣子を聞かねえでは、のつけに突走る氣もしねえだが、はてな、それにしても餘り遲いだ。」
「睡つた處を見られた奴が、恁う言つちや濟まないが、成程ね。」
と仰いで月を見るにつけても、此の火の見を倒して、其の丈を向うへ五つ繋いだほどの畦道を、森が薄りと霧で劃つた堂の前に、まだ、それらしい人影も映さぬから。……
「何うも些と緩り過ぎるね。」
「心配だ、今更胸が半鐘を打つて來ただ。」
と案山子に風の身動きで、

「堂守の坊さまが知己つて事も聞かずの、今時、寺に話込んでも居なさるまいしよの。」
「まさか、毘沙門様と情事つて次第でも無からう。……尤も御容色なり、姿なり、些と人間離れをして居なさるから、ト鬼を踏んで槍を突いた、あの形には似合ふがね。」
「串戯を言はねえもんだ。己はの、また鹽梅でも悪いでねえか、と案じられて來ただあがよ。」
早や何方から誘ふと無しに、影を合せて歩行出す。
「旅の女が辻堂で持病の癪、雲助が取卷く奴だ。演戯にやあるがね、まさか。……だがね、爺やさん、演戯と言へば、先刻は途中で千兩なことが有つたんだぜ。大薩摩さね、凄い處、——今夜ばかしや、お庇で兼四も役者に成つた。」——
「何がや、お前。」
と話しかけると、膝掛の下の腕を突張り、大に氣競つて、
「ト堤下を曳出した處が、直ぐにもう花道さね、檜舞臺だ、爺やさん。
向うへ、對手に廻したのが、今夜の殿様、御前のお客で。新橋の粒選が前後に五人と言ふんだ。いづれも、若手さ、御存じの。……あれ、可厭に犬が吠えやあがる。」

五

「いや、遠くだ〳〵。」
兼四は犬の聲を聞定めて、所謂、其の檜舞臺に氣を替へて、
「千鳥でも鳴くかと思ふ、微醉の藝者衆の聲を聞きながら、土手下を小半町、俥で徐と通拔けると、可し、下して、てんで御新造さんが、庭下駄で辷るもんだから、危ッかしさうに薄につかまつたり何かして、土手へ上つて、櫻の樹の背後へ、ひつそり隱れて待伏せさね。こゝで威かさうと言ふ茶目なんだ、早い話が。——あ、あ、と思ふが、まさかね、背後から腰を押さうかとも言はれねえから、恁う我ながら變さね。蝶がをがむやうな手つきをして、後について上つた私に、袂から南京豆の袋を渡して、誰でも可い、其處へ來た連中に構はず打着けな、と言ふ號令なんだ。手ぐすねを引きましたよ、敵討より一大事だ。
餘り意氣込んで遣損なつたがね……掴出して、ばら〳〵と遣らうつて處を、それ、帶が光る、顏が白いわ、ぬかるまい、と慌てて袋ごと打着けた。が、過失の功名さ。皆が此奴あ、やつかんで礫を打着けたとは思はねえ、年代記にも驗のない三角の大な雪がトン〳〵と飛着くから、はつと思つたらしく、袖も脚も留まつた處へ、背中から月を浴びて、櫻の幹に片手を縋つて、御新造さんがすつと立つた。顏が眞蒼なほど白い處へ、樹の影が暗くさして、あの容色だから堪らねえや、美しいの、凄いのつて……

關の戸の墨染を正のものと言ふんだけれど、それよりか、私あ今でも忘れない、まだ新橋に出て居なすつて、此地の寮と行つたり來たりしなすつた時分……」

と言ふ、御新造と彼等が稱する、江月園の女主人は、さき頃まで、板新道の御神燈に籍を置いた、萩島屋照吉と云ふのであつた。

「ね、歌舞伎座に踊の溫習のあつた時、何とかつて名題で以て、光氏と黄昏が一つ簾に、白い跣足と緋の蹴出で、時雨の中を古寺へ忍んだ處へ、颯と葛かづらの繪の、襖を破つて、(三つの車にのりの道、火宅の門を出づると云ふ佛の教引替へて。)と美しい鬼が出る。

あの鬼を、御新造さんが踊んなすつたのを、私あ仕切場の横手から見て、ぞつとした事を覺えて居るが、今夜の其が肖如さ。

意氣な御前の光氏が、おゝ、と胸を張つて身構をなすつたくらゐだ。や、黄昏連中怯えまいか。きやあ、あれえ、と路傍へ手を支いたのや、駈け出して遁げたのは、まだしも息の續いた方で、姐さんたち三人と云ふものは、まるで櫻の樹の立すくんだやうに成つて、唯、芬と其處等、良い薫がするばかり。月も小さいやうで、見て居るものも氣が遠く成つた。

あとの騒ぎと言つたら。口惜い、食殺す、としがみつかれて、御新造さんは、裾をすら〳〵、遁げるわ、追ふわ、土手は花見の鬼ごつこさ。私あ、つひぞ此の三四年、御新造さんの、あんな

お轉婆を見た事がねえ。些とお弱いかと思ふほど、しつとりして居なさるからね、だが、其の元氣だ、大丈夫。」

「やあ。」

「……」

と默つて顔を見合せたのは、田圃をはづれ、茅屋まじりを三四軒、最う通越して、生垣を道から織込んだ、蒼ずんだ水かと思ふ月明の廣場の奥に、玉を削つたと言ふべきか、板圍ひで假普請の堂が白々とあるばかり。明く鰐口の影は映したが、御新造の姿は弗に見えぬ。

堂の前に、人の丈より、すつと高い、一本の紫苑の、星の如く輝いて、はつと月影に咲いたのが、毘沙門天のつかせ給ふ紫の槍かと見える。

唯、其の紫に射られた目には、鼠もひら〳〵と黄に映る、法衣下の尻を端折つて、本堂修覆の寄附金を掛並べた建札の下に、用心棒を脇挾んで、坊さんが一人立つて居た。

小搔卷

六

「君が誘へる路なれば、
夢も浪間を辿るなり。
月を遮る雲視れば、
草に置く露たよりなき。」

床の間を見れば、優しく染めた玉章を茶掛物の女文字も、何うやら、ふと口吟んだ此の文句を、認めたらしく認めらるゝ。……むかし、世に聞えた遊女が戀のかよはせぶみと豫て聞いたが、もの、ずきでも無ければ、韻事に遠し、柔かなのと硬いだけは分つても、書體も筆法も心得がないから、聞流したばかりで、其の一向さへ、よくは知らぬ。

恁うして、薄暗い床の間を今凝視めても、表具した、黄金の雲、織込みの櫻の花は、天地にほんのりと浮出すけれども、玉章のぬしが名をしるした、吉野か、薄雲か、朧である。

從つて文字の形は、柳にも擬へらるれば、流るゝ水にも紛ふ。が、玉章の心は胸に浮んだ此の一聯の句に讀みなさるゝ。

「君が誘へる路なれば、
夢も浪間を辿るなり。」——

誦みつつ、視つつ、江月園の主婦、照吉の居間に、意氣な掻卷をぞろりと肩に掛けて、主婦が

數寄な小机に肱を凭たせた、年紀ごろ三十六七の、額の廣い、眉の秀でた男がある。

此の部屋は、母屋から深く一劃り板戸を隔てた奥二階で、殆ど隱座敷と言つても可い。一所帶別に成つた趣で、不斷、御新造——と言ふのも此の男あるがためだが、——照吉が客あつかひ、内のきりもりを采配する帳場には、緣起棚、式の如く、白鷹の樽を積んで、塗緣の爐にきちんと構へる。が、帳合を閉ぢて、戸棚に算盤を立掛けたあとは、では、賴みますよ、で、女中頭のお勢と云ふのに、心持俯向いて、後をまかすと、廊下を風が通ふやうに、花にはもとより、月の影、こぼるゝ卯の花、ちら〳〵と白い足どりで、開放した夏の夜も、人目を忍ぶばかり、いつも袖を引合せて、衣の音ずれ、すら〳〵と、壇には跫音も立てないで、引籠る内證の閨。

こゝに誂の長火鉢に、壁へ切組の重ね簞笥。今夜は籠に、いとしらしい嫁菜を活けたが、雨の刈萱たゞすら〳〵と淺翠なる時も、鏡臺の珊瑚は色に出て、黑髪を偲ぶかもじは、香水の香よりも時めく。

絹夜具が、戸棚の中。

男がこゝに羽織つたのは、模樣も、繪も色々な袱紗を、色紙形にはぎ交ぜて、裏の水色、薄綿の胡蝶の袖。

宵の寐覺の薄寒さうに、一寐入りした跡と見えて、枕が砧に髣髴する。

南部の鐵瓶に湯が沸つて、剩へ、撫子をごすで染めた磁器の手烘に、切炭がもみぢを焚いて、お銚子はお手のものなのを、雁が合方の唄を聞け、（あゝでもないと四疊半。）此が身上と言ひさうに、手つきの錫のちろりが松蟲、チリ〳〵と音を立てる。

此の寸法にして、人柄は、四條わたりの光氏か、田圃の直さんでなければ成らない。

いや、何ういたして、第一鐵緣の眼鏡に困る。ふらんねるの襯衣の無いのがまだ目つけもの、川柳に曰く、（色男襦袢で咽喉をしめるやう。）を、豈知らんや、黑八の襟がはだかつて、銅貨ぐるみ、蝦蟆口の拔けたあとらしい、琉球絣の衣紋が伸びた、羽織のまゝのごろ寢らしい、同じ毛一枚錣の巖乘な紐の解けた書生羽織の裄を長く、澁色の腕をぬつと出して、諸に支いたが膝だけは、きちんとしつつも、何處か綽々として餘裕がある、成程居心は可いわけで。

七

肖像畫を誂へると、此處で工夫の要りさうな、赤毛の交つた八の字の濃い髭あり。面長で、凛と鼻の隆いのは可いとして、しまつた口をへの字に、其の鼻柱に皺を寄せて、キラリと眼鏡越に、讀むともなく、軸ものの玉章を睨んだ處は、床の間の遊女が氣が疾いと、猪と一夜添寢や、と詠め兼ねまい。

此の容子なれば、友染の搔卷も、錦木に巢をくつた梟にたとへらるゝ。蓑に落葉した姿に似て居て、紅の閨に驕るとは見えず。月漏る軒に落人の、草摺寒き風情がある。雨戸をさゝぬ硝子戸越に、大川の水は空よりも蒼く澄んで、部屋の灯を濡らす時……

「君が誘へる路なれば、
夢も浪間を辿るなり。」——

——また口吟む唄は、いかにも拙い。渠は詩人でも歌人でもないから、敢て拙いのに恥づる事はないのである。が、自分のだか、他人のだか、唄だか、文句だか、些とも分らぬ。此の時か、今日か、昨日か、何時とも知らずに、ふと唯胸に泛んだのである。……尤も今しがた轉寐をしたから、其の夢の中で覺えたのかも分らない。が、恁う云ふ調子は、鞠唄か、童謠か、何か知ら何處かにある。早い話が、

「故き都に來て見れば、
淺茅が原とぞなりにける。」

人も知つた朗詠がある。されば、夜嵐が戸を打つのも、木の葉がさら〳〵と鳴るのも、おのづから人の胸に響いて、歌にも詩にも成るのであらう。

渠は詩人でも、歌人でもない。

「……月を遮る雲見れば、
草に置く露たよりなき。」

拙なさを蔽ふために、斷るのでは決してない、とばかりで、此の客の、其の如何なる身分であるかを、急に明かにしないのは、思はせぶりの爲ではなく、實は言ふのを憚るのである。

が、出來た事なら仕方がなし、探偵の話でないから、あとまで祕して置く次第には行かない。

重ねて言ふ。恁うした處で名を言ふのは、全く憚らねば成らないのである。が、何を祕さう。

これは、先の××裁判所の檢事正、今また××院の判事なる、法學士板倉光年其の人である。

人も知つた、閣下の審判は嚴密に、宣告は明快に、其の裁斷は峻嚴である。渠が獄を決するや、有罪ならざれば、無罪のみ。一點の假借も容赦もない。が、法廷に臨監して幾百の事件を審判したのに、無罪は論ずるまでもない、罪を宣して、法曹界の見て罰の苛きに過ぎ、刑の重きに失せずやと思惟する場合と雖も、其宣告をうけたるものの、未だ嘗て一度も控訴上告をした例がない。

――宣告す――板倉光年。――言下に被告は恐入つて立所に服罪するのが殆ど其の規を一にするのを、或は怪み、或は疑ひ、いづれも奇蹟と稱ふるのである。

職に就いた前後より、渠に親しき友は、板倉が下谷徒士町に居た其の素人下宿から、嚴寒の霜にも水を浴びつつ、深更に家を出て、淺草の觀世音に日參して一夜も缺かさず、殆ど二年餘りを

行ひ續けた事を知つて居る。が、此が何も、其の裁決の奇蹟をひらく鍵には成るまい。

もう些と立入つた極く其の少數なのが、水神、江月園の消息を解して居る。故に、渠が後に麴町永田町の三部谷に婆やを使つて、自炊同然に獨身で暮して居る事を怪まない。――彼處に音信るゝものは、今に於て、光年が時々、何もない、がらんとした床の間に一碗の水を湛へて、これに對して、跪坐して瞑目して寂然として居るのを見受ける。其の意味は解しない。雖然、板倉が元來川越の或大寺院の出生で、僧侶の子であることを知つて怪まない。が、それも此も、奇蹟をひらく鍵ではない。

八

其處まで立入つて心得たものも、しかし、こゝに今夜のやうな恁うした閨で、御新造――稼業柄誰も夫人とは言はない――照吉姉さんが、肩を落して膝を投げた、わざとうしろ向の櫛卷なんかの爪彈で、

「田舍づくりの籠花活に、ぐつすり濡れし水の色、龍田を活けた樂みは、心の憂さも何處へやら、たつた一聲、時鳥。」

此の本調子を御存じあるまい。

成程、水神に、氣まゝに人選みをする貸席を兼ねた寮住居は、「田舍づくりの籠花活。」で、「ぐつすり濡れた。」などは穩でない文句だけれども、其男でなければ成らない人を、かくれ二階の、長火鉢の向うに据ゑた隅田川の水調子は、心の憂さも何處へやらに相違ない。

が、此の端唄につけて、照吉の身には、一通の事ではない、悲しいやら、つらいやら、死にたいほどの思出があつたのである。

尤も、それは過去つた事である。

が、こゝには今、其の爪彈の姿なしに、板倉が一人居て、

「君が誘へる路なれば、
夢も波間を辿るなり。
月を遮る雲見れば、
草に置く露たよりなき。」

此處へ、お勢さんと言ふ、永年の女中頭が、襟附きの意氣な服裝で、歩行皺の些とも見えない、清らかな足袋ですつと入つて、鮭のラカンに越前の雲丹と云ふ、小皿ものを、盆ごと猫板の上に置いて、

「先生、お寒くはありませんか。」

「いや、何も。」

と云ふ癖に、床の間から目を離して居直つた肩に、一搖りをくれて、

「こりや、お出でなさい。」と、眼鏡越しに眩しさうな顏して莞爾と成る。

「大分、お久しぶりのやうでございますね。ほゝゝゝ、あれ、お銚子がつき過ぎはいたしませんか。」

と膝で極つて、ちろりを取つて、

「御一盞。」

「これは通つた。」と、盆に伏せて來た猪口でうける。

「お重ねなさいまし、――」

お勢は今更らしく部屋の内を眴した、搔卷だの、枕だの、撫子の繪の手烘だの……

「何ですか、今時分、私のお酌ぢや勝手が違ふやうでございませう。」と此の圓髷の面長なのが又莞爾笑ふ。

不思議な形のお奉行は、件の蓑に落葉と云ふ縮緬を、薄塞さうに搖直して、些と裄の短い、不器用な腕を眞直ぐに一口飲つた猪口を置いて、恁う、鼻がしかんで、目が笑つて、

「改つた御挨拶だね。はゝゝ、――まだ客が居るやうだ。忙しからう。構はんで置いて貰はう。」

「否、もう宜いのでございます。幾干お内の方だと言つて、お猪口も持つて來ませんで、御酒を掛放しにして置いて濟みません。丁どお帳場から此方へ伺はうとしました途端に。」

お勢は輕く一つ膝を撫でて、

「自動車が入りまして、お立ちに成つたものですから……」

「歸つたのかい。」

「はあ、藝者衆が三人殘りましてね、それは泊つて行くのでございます。」

「其の連中だな、自動車が鳥の飛ぶやうに、土手へ掛つたと思ふと、廣間で大變な騒ぎだつけ。キヤア、すたん、ばた〳〵と云ふ強い音だつた。何事がはじまつたんだ。」と胸を眞直ぐに、確とした靜なものの尋ねやう。

「えゝ。」

と其の威に打たれたやうに、お勢はうつかり圓髷を下げて、低く薄化粧の襟を見せる。

髪の雫

九

「何でございますよ、先生、唯今の、その騒ぎは、池へ獺が入つたんでございますわ。」

「獺が、此處等に居るか。」と髭の尖を撫でる時、眼鏡が光つた。硝子戸越の大川の水が射返すばかり電燈よりも明かである。

「はあ、時々、貴方ね、水門を潛つて大川から。……池に飼つてございます鯉だの、緋鯉だのを捕りに來るんでございますが、追掛け、追廻すもんですから、其音ッたらありやしません。大な鯉が居るんですから、どぶん〳〵水を刎返しますので、知つて居ても、不意だと私たち吃驚するんでございますもの。……唯今も男氣が無く成つて、急に寂寞しました處へ、突如廣間の雨戸の外で、大な石か、人間でも飛込んで波を立つて狂ひ廻りますやうな可恐い音がしたもんですから、藝者衆が、あつと顔を見合せた處へ、一人ね、(そら姉さんの清姫が。)水を泳いで、蛇に成つて歸つて來た。」……

「何だい、(姉さんの清姫。)とは?」

「御新造さんなんですよ——何、出たらめに見立てたんでございます。先刻、皆が綾瀬へ行掛けに、櫻の下で怯かされたものですから。」

「あゝ、其の事か。」

板倉は聞いて知つて居た。

「道成寺でも、清姫でも、何でも手近な怪談にして、また怯かしたもんですからね。あの、騒動。駈出すやら、突伏すやら、私が飛んで行つて見ましたら、廣い座敷に、錦繪の姉様をたゝきつけたやうに成つて、三人とも窘んでましたわ。思ひ出しても可恐いつてね。獺と分りましてからも。——もう、一度怯えて居るんですから。あの姿が目前にちらつく、(言問を曲る處あたりで、蒼白い、美麗な顏が、自動車の窓を、ばあ引)だなんて、其が可恐さに泊るつて人たちですから。……また土手で、すつと出られた時は、姉さんが、そりや凄うございましたとさ。」

「何だつて詰らない、そんな眞似をしたんだらう。」

と舌打をしたのは手酌の酒だつたが、些と窘めるが如くに言つた。

「御新造さんでございますか。」

お勢は一寸顏を見て、

「結構ぢやありませんか。其のくらゐな惡戯でもなさいます方が、もう此頃ぢや頻りにお優しく、お情深く、しつとりとなさいまして、お身體でも弱つたんぢやないか、病身にでもお成りなさらなければ可いと、爺やまで申しますもの。あの貴方、新橋においでなすつて、お客が無理な事を言つたとか、亂暴をしたとか云つて、大酒の擧句が、跣足でお茶屋を飛出して、雨の颯と降出す中を、傘どころですか、濡露地に裾模樣。お酒の足が危いもんだから、横町を出合頭の箱屋の肩

に凭れかゝつて、内へ歸つて來なさいました。島田が横へがつくりと成つて、白襟が辷つて、肩から胸へ片褄かけて、流れるやうな緋縮緬。艶つぽいの婀娜なのつて、私は吃驚するよりか見惚れました。御自分の内を、何うでせう。(お勢さん今晩は。)なんて、其のなりで御挨拶。(内膳樣は御在宅でござんすか、お取次ぎ下さいまし。)ツて、——ねえ、先生、内膳樣。」と、密とたゝく眞似。

「内膳は此處に居るがね。」

と苦笑、眼鏡がないと照れる處。で、ぐツと飲む。

お勢は、然うした手を口に當てて、古風に笑つて、

「ほゝゝ、ねえ、まあ、先生、其のお元氣だつたのが、もう近頃ぢや、袖にだつて、お襦袢が、私たちの目にも見えませんほど、しつとり内端で在らつしやる。蟲でもお起んなさらなけりや可いがと心配なんでございますもの。そんな串戲をなさいますやうぢや、矢張りお元氣でよろしいぢやありませんか。」

「元氣は可いが、洒落が些と陰氣だ。」と瓦燈口の襖を見たが、ふと寂しさうな人待顏。

忽ち向直つて、陽氣な聲して、

「で、獺は何うしたよ。」

十

「え、獺。」と些と唐突な問を訊返す、お勢は問はれて返事をするまでに、池の物音を、確めては居なかつたのである。

「勿論、水の中の騒ぎだから、其の形は見えまいが。」

と然してもない事を、聊か仰山ではないかと思ふほど、考へ込んだ手に、卷莨を持ちながら、火を點けるのも忘れた體で、

「確に獺だらうかなあ。」

お勢は板倉の其の様子に、酌をしようと、ちろりに掛けた手を止めて、

「へい。」と言つて顔を見た。

「私は何うも水へ飛込んだ、其の音が。」

指を上げると卷莨を熟と視て、

「卷莨の吸口ぢやなからうかと思ふ。」

と深く、もの思ふらしく目を瞑つた。板倉の此の體は、嘗て見たものでなければ知るまい。例の三部谷に獨居て、床の間に据ゑた一杯の水に對して、兀坐瞑目して寂然とする時と同じであつ

た。

あゝ夢を見たのだらう、とお勢は板倉の其の顔を見つつ、先刻轉寐した狀を思つて、夢にして、夢には隨分簪に花が咲くし、蜆が蓑を着るし、半襟が口を聞くし、(と俯向いて襟を視ながら、)卷莨の吸口が池へ飛込む、と年よりは氣の少いお勢が、思はずクスリと遣る時、板倉も笑出して

「いや、馬鹿々々しい話だ。」

と何故か釋然とした顔色で、

「實際、晩方此處へ來てから、をかしな事があつたんだ。」——

——と云ふのは、……木の葉、木の葉に、美しい夕日の濃く淡く、薄雲のゆきかひに彩られて染るのを、やがて色づく錦葉のやうに視めながら、骨も爽かな夕風に、池の汀を築山の根笹を分けつつ、人たけよりも高く成つて、葉も散際の萩の株に出つ入りつ、で、四阿へ行つて、尾花がくれの垣根越に、水田の上の黄昏の月の姿、うら枯の草に蒲公英の花の白く返咲したのを視めて、秋の暮の身に浸めば、獨りで燻らす卷莨の火が、あの野末に立騰る工場の大煙突の、濛々とした黒煙を打消して、山路の孤家の灯かと思ふまで、氣が澄んで、心の靜だつた折から、汀々に夕暮の色が沈んで、よし蘆がたよりなげに、ふつと水を離れて浮くやうな、其の池を越した向うの、むら尾花、むら萩が波打つばかり靡いたのは、裏木戸から自動車が乘込んだので、其が一組の今

夜の客であつた。――廣間へ通ると此方が見える、と世を忍ぶ身ではないが、世間體。で、引返して、山笹の根を踏越す時、ふと其の卷莨の吸口を棄てると、其處が汐入の細樋で、潛つて流る、池から水の差引口で、折から、さら〳〵と夕暮の引汐時。

池から落ちて來る水は細いが、颯と流るゝ勢で、白い吸口を一卷き卷くと、くる〳〵と淺く引込んで、くるりと又卷上げる。……浮くかとすると、また沈む汐先の勢で、其の落口が、宛然箱庭に仕掛けで拵へた、大瀧の瀧壺と云ふ形で、渦卷きに成つて居る。それ、きり〳〵と吸込んで、むく〳〵と吹上げる。

「七顚八倒と云ふ形だ、其の吸口が。」と板倉が言ふのである。

が、こゝでもう一度、彼が三部谷の住居に獨住んで、人なき時、ともすれば床の間に据ゑた一杯の水に對して、兀坐瞑目して寂然とする、爾き「お奉行。」であることを言つて置きたい。

唯、其の紙の吸口が、逆とんぼを打つやら、突立つやら、のめる、のけぞる、引つくり轉る……むせぶ、うめく、泣く、……小さな口が、助けよ、救へ、と喚くやうで――と見る〳〵、酷いもので、突落す水の勢で、一息に突込んだと思ふ時は、はずみで何と、瀧の中ほどへ宙に吸上げられ、引釣さる。

十一

きう〳〵ひい〳〵と泣く聲、呻吟く聲が、ざツ〳〵と鳴る引汐の音の中に聞えるやうで。

「いや、實に見て居られない。」と、片袖は媚めかしい搔卷の懷手、片手をぎごちなく長火鉢の緣に、しかと掛けて歎息した。

池は、と見れば漫々と湛へた澄切つた水に、蒼空を倒に映して、富士も筑波も一呑みにしさうに深い。……藻に暗く、落葉に白く、空の往來の雲が映る。……

其の雲、其の水の嵩が、尺を減じ、量を削つて、此の細樋の口を落ちる間、浮ぶ瀨は無からう。蟬子の一時と云ふ、微々たる其の紙卷煙草の吸口に取つては、人間五十年の壽命より一層長い、一生の間を、渦の中にきり〳〵舞をして苦んで居るのだと思ふと……

「見て居られんぢやないか。」

板倉は思はず輕く其の火鉢の緣を打つた。

「其の吸口の奴が、出たい、遁れたいと、藻搔きに藻搔く心持は、早い話が、水に溺れた人間が、

生命が欲しい、生きたいと思ふのも同じなれば、牢獄に鐵の鎖の囚人が、日を見たい、娑婆に出たい、と足ずりして頭髪を掻毟るのも同然だらう。」

板倉は惱ましげに、掌で前額の脈を壓へて、

「煙草を一服吸つたあとを一寸摘んで指さきで投込んだのは私なんだ。……其の吸口の苦痛は何うだ。……お勢さん、優しく言へば憧憬るゝ戀、忍ぶ戀、逢ひたい見たい、と思ふ胸の苦みも同一ぢやないか。」

「御尤。」

お勢が不意に、掌を、膝の上でトンと敲いて、

「ぶちまけました處は、でございますね。」

開き直つた身構へで、

「御新造さんと苦勞をなすつた時分の事を、お思ひなすつたんでございませう。其處でたとへになさいますのが、卷莨の、口は些と手嚴うございますね。」と眉を顰めつつ且つ莞爾した。

今の板倉の態度と云ふのが、法學士より、色男より、判事より、寧ろ哲人であつたのに、此は又餘りと言へば、お勢の相の手は、簫の笛へ合せた三下りと言はうか、龍の棲む淵へ胡瓜を投込んだと云つても可い。が、心得た世馴れた女中の、恁うして談者の氣を散らしたのは、實際、板

倉の其の面が、何故か、色の變るまで、切つて、迫つて、「頭髪を掻拐る。」と話しながら、頭髪を掻拐りさうに見えたからである。

果せる哉、河童か、龍か、談話は水に緣の深い、板倉は、通力を失つたやうな氣の脫けた顏をして、

「馬鹿な事を！」と苦笑すると、行儀も崩れて、其處で、冷えた猪口をぐい、と引く。

處へ透さず、手で加減を試て待つて居た酌をして、

「まだ〳〵早い話は、御新造さんのお歸りが遲いものですから、途中で又どんな事でもお有んなさりはしないかと、それで、そんな事を思出したり、氣になすつたりでございませう。」

板倉は熱い處を引受けて、

「むゝ、其も有るがね。」

「がねぢやありませんよ、御覽なさいよ、何うでせう。失禮ながら、此方樣ぢやあ、他は獨身ものばかりでございますから。」

「いや、然う云ふ意味ぢやない。……知つた女の身の上の案じられるのは、……持つた覺えはないけれども、親が小兒を憂慮ふのは、こんなものかと思ふ。鎭守の祭禮を見に行つても、人込で踏まれやしないか、崖から落ちやしないか、と氣に成つて、——なくなつた父親が然うだつた。

其の氣をうけたかも知れない。……自分の身體はそんなにも思はんけれども、嫌なものは何うでも可い。思ふものは義經でも、謙信でも、本を讀みつつ、無事を知りつつ、矢玉が飛べば案じられる。……分けて、女の身には、いつも危い事が引搦んで居て、一寸出た目の前にも、偶した事が有りさうな氣がして成らない。」

からすみを唇に、浮かぬ顏して、

「性分だ。」

十二

「お待ち！　餘り取越苦勞を爲過ぎる、女らしいと云ふけれど、それぢやお前。」

板倉は眼鏡を搖つて、

「獺だか何だか、ざぶんと凄い音がしたのを、姉さんだの、淸姫だの、泳いで來たのと、氣に成ることを私に話して聞かせたのは誰だい。」

「あゝ、分りました。貴方はいつか御新造さんが、伊豆通ひの汽船で、飛んだ災難に逢つて、一時は海でお亡くなんなすつたと皆が思ひました、あの時の事を夢にでも御覽なすつたんでございませう。」

お勢が獨で頷いて言つた、――（それから多時、二人の中は、世を隔てて生死のほども分らないやうに、中斷えのした事があつた。）――新橋以來の此の女中は、よく其の情實を理解して居るのである。

「無論、其もある。お前さんだから話すのだが、八月の末から九月の上旬へ掛けて、其の時分の抱主に連れられて、病氣保養と云ふ名義で、其實どんな寸法だつたか、其處までは知らないが。」

お勢が少し色を正して、

「まあ、貴方でもない、……そんな事を。」

「いや……話の順序だよ。抱ぬし、主人の前がある。手紙の取り遣りも見合せて、と言はれて見れば、私のやうな、金錢にはかない客は、手紙で樣子も聞かれないし、先方からは音信が絕える。土地は邊鄙だ。伊豆のあれは土肥と言ふんだ。今でも土肥と聞くと、胸を刺されるやうだがね――土用あけから毎日のやうに風立つて、波風の荒い年だつた。――天氣は惡し、蒸暑し、苛々して、じり〳〵して、二階の緣の欄干を爪立つてでも歩行かねば靜として居られない。階子段は踏外す。門へ立てばトボンとする。電車に乘りや自分ばかり世間から垣根をされた板塀を駈けるやうだし……土肥の其の事ばかり思ひ暮して寢れば睡られず、起きて居れば現も同然。

其の年は友だちと發句を行つたよ。」

板倉は、うつかりしたやうに髭を撫でて、
「天狗俳諧ぐらゐな處だ。……古池や……いや又水に飛込む、と云ふ氣障な話に成つた……」
藻を分けるやうに手を振つて、
「初心な參考書に、「題叢。」と云ふ、朱の表紙の本がある。寐られぬ枕に、見ても分らないのを開けたり、閉ぢたり、叩き破りたい頭を抱へて、曉方、熟と目を閉ぢた。——然うだ、よく覺えて居る、それは九月の初旬ごろだ。」
「へい。」と、思はず肩を引く。
「私は思ふが、寐られない夜の明方と云ふものは、夢と心と、自分の身體と、とろ〳〵と一所に成つて、境が無くなるものらしい。……身體から拔出した魂の有象無象が、恁う木の葉だの、海月だのと同じやうな形に成つて、目鼻の附いた金盥や、大口開いた石臼や、角の生えた石燈籠など、一所に、ふは〳〵と宙宇を徜徉ふ。それが東の空の太陽の一條の光明に追はれて、本體にハッと返る。それ、出て行く時は魂が離れるのだが、歸る時は一所に成る。魂と、心と、夢と、自分と一所に成る。正夢などと言ふものは、曉方が多いと云ふよ。——時に、其の曉方だね。」
「へい。」
「蚊帳の目が細い靄か霧のやうに搖れたと思ふと、肩が悚然と寒く成つた。枕頭に、萌葱の蚊帳

より色の蒼褪めた美しい女が、崩れた島田で、恁う俯向く、濡々としたほつれ毛が冷く私の頰にかゝる、と顏を見ると新さんだ。が、濃いすんなりした眉の下に、熟と睜つた瞳から涙が流れる。あゝ、濡れたのは、それかと思へば、亂れる衣紋も崩れた褄も、紅を溶いて流したやうだ、ずッぷり水だ。
がつくり頰が重ると、ハッと目が覺めたが、枕に落ちた其の本の表紙が赤い。疊も、敷布も、其の女の倒れかゝつたと思ふ處は、氷のやうに濡れて居た。本の中でも、汐と云ふ字、海と云ふ字、船と云ふ字。」
板倉は何心なく振返つて、床の間の其の玉章の文字を指しつつ……

十三

「……風と云ふ字、山と云ふ字、嵐と云ふ字、土肥の其の土と云ふ字、せめて肥えたと云ふ字でもと思ふに、其の影は見えないで、痩せた、消える、と云ふ字まで、題叢の中にあるのが、じとじとと濡れ浸んで、一つ一つが一杯に涙を持つた大な眞黑な瞳に見えた。——」
板倉の目は今も、其の東雲の幻影の、照吉の瞳を凝視る如く、床の間なる、玉章離れず……
「また、夏だと云ふのに、不思議なのは、其の濡透つた雪の身の緋縮緬が、いまお前の言つた、

いつか私も行合せて見た、覺えのある、……村雨の板新道を、切られて血を浴びたやうに成つて島田をがつくりと成つて歸つて來た、其の姿に肖如なんだよ。——今話を聞いたので、尙ほ目に見えるやうに思ふぢやないか。」

と言ふ……掛物の文字は、かしくも〳〵も、はら〳〵と仄白い頰に掛つたおくれ毛に其のまゝである。

「此處等も濡れてはしないか。」

呼吸を引いて、目も眉も暗く成るまで引入れられて聞いて居たお勢が、今は堪らず、横崩れに手を支くと、骨に透つて疊が冷い、あつと一膝斜に退つた。

「威したんぢやないよ。」

すつくと立つて、障子を閉める、大川の銀の面を、墨繪の雁の渡るトタン、木の葉の散るか、と其の障子に消える。と搔卷を刎ねた板倉の風采は、高く天井を壓して躍如としつつ、肩を辷つた水色の羽二重の裏は、月影か、あらず、影を留めた水のやうに疊に流れた。

居直る時、力强く、火箸を諸に灰にさして、

「馬鹿な、濡れたのは水の雫ぢやない、私の涎だと思つて笑へ。」

お勢は起直りざま、吻と息して、

「あゝ、悚然としました、私。」

「御免なさいよ。」

「あら、可厭ですね、御免なさいよ、御新造さんの、假聲なんか、似てますよ、聲までが、其處どころぢや無いぢやありませんか、憎らしいよ、貴方は。」

お勢は漸と笑顏して、

「串戲ぢやありません、……否、威かされましたのがお怨みなんではないのですよ。最う恁う成つたお二方ぢや、色戀をお離れなすつて、親が子を思ふ、あの嬰兒を案じるやうだ、とおつしやつたのが、悚然とするほど、身に染みましたのでございますわ。眞個でございますよ。——其の思召一つでも、何、貴方、御新造さんが鍵裂一つなさいます憂慮はございません。毘沙門樣もついて在らつしやいます。もう其處まで、お歸んなすつたらうと思ひます。……一寸行つて見て參りませう、と申しますのが、お出迎ひに成るに違ひありません。ですが、」

と一寸打傾き、

「此のまゝ、私がお銚子のおかはりと云つて立ちましたんでは、何ですか、恁うした場合で、お心寂しうございませう。それに、機掛も附きませんから、あの……恁うなさいまし。お話しかけの、其の貴方が氣になさいました、紙卷莨の吸口の、あとが何う成つたんでございますか。其を

一寸おつしやいまし。……其をはずみに私が立つて參ります。其處へ御新造さんがお歸り、と恁う極めませう、よ、貴方。」

「面白い。」

今度は甘さうに、ぐいと飲んで、手を懐中に、猫板へ。

「何、愚にも着かん話だがね、汐に揉込まれ卷上げられる、吸口の七顚八倒を何とかして上げて遣りたい、と思ふが、其處らに棒切も何も見つからん。萩の枝を折つて掬つて見たが、くね〳〵する處へ、先方が其だから手掛りが無くつて何うしても引掛らない。——あれは一寸深いね、——突伏しても手は屆かず、尻端折で中へ入るのは狂人染る、と云ふものはもう、其の時、緣の總硝子戸を明擴げて（まあ、好い景色だ。）（せい〳〵するわ。）何かで、後の雛と云ふ形で、ずらりと綺麗どころが並んだらうぢやないか。……新さんの早く歸る禁厭だ、……簡單に話すがね。」

十四

「鴨越が向うに見える。いや熊合直實弱つたよ。平山武者所は居やしまいが、判官殿は何うだらう。九郎などは居たかも知れない、藝者に有りさうな名前だよ。」

「五郎ちやんが居たんですよ。泊りに成つて、唯今も新座敷に。」

「雛妓だな、然うかい、い、妓だね。」と頷きながら、

「萩を盾に、薄がくれの仕事でね。起居に見着つちや可厭だから人目を兼ねるので、思ふやうには助けられない。……然うだからつて唯見て居りや、呼吸一つ吐く間もない、其の卷莨の吸口が、仰つ、反つ、黑血の如き泡を噴く。——思案に餘つた。……餘程水の中に入つて、と思つたけれど、些と人間業であるまいか。——

人間も、恁う、何かに氣を拔かれると壓が利かなくなると見えて、人を馬鹿にした、晩方の五位鷺が、ずぼりと一羽。——肩で嘲笑つたと言ふ風に首をすくめて、横目で冷く睨みながら、面色の凄い、人の惡い屑屋が龜覗きの下から探すやうな嘴を突出して池の底を狙つて居るんだ、つい鼻の前にさ。踏んだやうに萩に乘つて、

其の嘴が欲かつた。彼奴がありや仔細なく吸口が挾んで取れる、と熟と視て思込んだ手が伸びる、と其の五位鷺の嘴を掴むと、皺嗄れた聲で、くしやん、と首を振つて嚏をする。はつと思ふと其の途端に、すぽんと嘴が拔けたんだ。拔けた後で、馬鹿！と喚いて、飜然と一飛びに月の上まで刎上つたと思つて吃驚すると、轉寐の夢が覺めたんだがね。」

お勢が胸を引きながら、トンと火鉢の緣を壓して、

「貴方、確りして下さいましよ、一寸。」

「馬鹿は依然として爰に居るが、鷺は綾瀬へ飛んだんです。」

「え、」

「否、嘴の拔けたのは夢なんだが――まるで夢中で手を伸して、嘴を掴まっとしたのは事實なんだよ。默つて飛んだ。奴め、鳴くのも馬鹿々々しさうに。羽が青く、鯉の鰭より腹が夕日に光つてね。（鶴が飛ぶわ。）と調子の高聲。……蒼空の暮方を、雛妓の目には鶴だらう。（驚だ。）（鴉が待乳へ歸る。）と緣側で、皆が空へ氣を取られる。此の隙だと、むら萩を拔出して、苺畑の冬構、牡丹の藁に陽の赤い、畦を切つて、裏田圃の水田に向いた、あの茶室の潛入から、――實は此處に歸つて來たんだ。――

丁ど着換へて居た處さ、――新さんが、――急に寒い、湯上りの風邪を引くなと、私に言つて、客うけに新座敷に行かうとして、瓦燈口に一寸戻つて、（あゝ、散らかしました、其の鏡臺の抽斗を。）……しめてくれろでね、階子をトン〳〵と下りたつけが。

やがて酒さ。此方も御膳だ。手酌で先刻の淨瑠璃の（おその六三。）を遠音で此處で聞きながら、（涙は落ちて紅猪口の。）と云ふ處ぢやあ、其鏡臺の抽斗の紅が溶けて、綺麗に微醉の目に映つて、周圍一寸の紅玉に見えた。で、眞白な細い手が酌をしてくれる、と思つて、手酌で私は熱いのを……と云つた次第だよ。」

と、虛氣したらしく猪口を上げる。

「あゝ、お積りです。もう澤山、先生、眞面目に御心配だと思つて聞いて居れば、お惚氣なんですもの、遣切れないわ。」

「恐入つた、私は今夜は何うかして居る。」

「まあ、それぢや何うかなさらないやうに、此を切つ掛に起ちますよ。――可うござんすか、一つ二つ三つ――さあ、貴方も仰有いよ。」

「何を？」

「あら、何をぢやありません。お心殘りの吸口のお話が片附いたら、それを發機に私が立ちます。すぐに御新造さんがお歸りなさる事に、緣起を祝つたんぢやありませんか。――一二三。」

「可し！」

決然として拳を握つて膝を打つた。……月下の祠に、水神の夢や驚かむ。

「一つ二つ三つ。」

裙を切つたやうに、ちろりを片手に、お勢は白足袋ですつと立つた。其の圓髷が階子に消えると、恰も言合せたものの如く、夜あらし颯と音信れて、土手から俥を引込む氣勢。……蘆の葉摺れの轍の響が、尾花に月夜の母衣と成り、萩の末を渡りつつ、寮の主婦は歸つたのである。照吉

は歸つて來た、歸つては來たが。

墨染

十五

照吉は籠雪洞を、白い手に、黑縮緬の紋着の羽織で、底下駄のまゝ寮を出た。其の備つた品と、婀娜と、媚しい姿には、月夜忽ち黑雲の、水神の森も暗夜に成つたかと思ふ變りやう。……今、墨染の法衣に、紫の輪袈裟を掛けて、帶も無く、小袖も無しに、膚に可哀や寒からう、露の花野の長襦袢。

爲に、艶やかな綠の髪も、夫渡の身代りに、遠藤武者に首ながら提げさすべく洗つた如くに露けく成つて、顏も覺悟をした色があつた。

人々の驚駭、如何。——

——迎ひに出た寮番の番藏親仁は、兼四とともに毘沙門堂の廣場に入らうとして、寄進札の蔭に立つた用心棒を突立てた月影の黑坊主に、のつけに驚かされたものである。——

唯、睨合つた處が、坊主が顱卷で、空脛端折の草履穿と云ふのだから、爺やは變な聲を出して、

「今晩は、」と言つて見た。

「はい、今晩は。」と其の時、納所もぼやけた聲。

「御坊さん、何うなすつたんでございます。」と兼四も口を出さずには居られなかつた。

「はあ。」と二人をじろ〳〵視ながら、

「お前さん方は？……何かね、當方へ何か用でも有つて來たでやすかな。それとも御堂へ御參詣かね、今、……いやさ、今時分。」と詰るやうに、をかしく、そはつく。

「へい、別に用と云ふでもごぜえませず、故と參詣でもありましねえが、己どもの主人が、先刻がた、此方へお參りをしたでごぜえますに、些と歸宅が遲過ぎやすで、そんで、はい、一寸、はい、樣子を見い旁々迎ひに來たでごぜえますよ。——見えねえだね、若衆さん。」

「む、居なさらねえね。」

納所は仰向いて、又打傾き、

で、納所を餘所に、二人は氣の沈んだ顏を見合す。

「はあ、それでは其の御仁かな、お二人連で。」

兼四が、提灯と共に、がた〳〵音のするまで頭を掉つて、

「飛んでもねえ、私あ其の火の見の處まで供をしたんで、御新造さん一人切でさ。」
「はてな、御婦人でやすかい。」
と解せぬ顏して、頻に傾き、一人で頷き、
「いや、何にしろ恁うでやすて、……私はな、早や一寐入したあとでやすが、豪う鼠が騷ぐ、今夜はな。で、目が覺めると其の、あれ、寺からは些と間のある假堂のあたりに、何やら人の跫音がする。參詣かと思うたが、やゝあつても歸つて行かぬ、と思ふとでやす。何やら、ひそ〳〵と話聲が、恁う頻に聞える……」
二人が一所に、
「へゝい。」と言つた。
「つい、此の中もな、朝見ると……隨分火の元用心をするでやすに、鼠が銜へたか知らんまで、異な處に蠟燭の燃えさしが落ちて居た事がある。物騷千萬でやす。金銀の品ものこそは無けれども、什具に錫、眞鍮、銅類の量目は少うない。捨て置かれんで。」
――其處で、顱卷、用心棒。――
「出て見ると早や影も見えん。少時聞澄まいたなれど、爾時は最う話聲もせんのでやす。口を利きながら盜賊をする曲漢も。」

とんと棒を突いて、手を擧げて、胸を押へて合點ませるやうにして、
「な、それ、無いでやすで。念のために御堂の中を、とそれ……しかし不氣味でない事はない。此方衆二人の前だがな。」
「そりや、もう、ねえ、爺やさん。」
「御尤でごぜえますとも。」
「其處で大聲で怒鳴つたでやす。誰だ、誰だとな。返事をせんわい。寂寞として答が無いのぢや。が、私が考ふるに、こりや至極な次第ぢや。呼ばれて返事をする盜賊もあるまいし、見着けて誰何めた處で、お籠をするなどと云ふまいものでもない。默つて樣子を見ねば成らん、と恁う思うて……用心をしい〳〵堂の方へ參るとな、……密と其の寄つて行くとな。こゝに其の希有と言はうか、何とも解せぬ事がある、あれに紫苑の大きなのが見えるでやせう。」
實に、其の月に燦爛たる。

十六

「あの紫苑がな、御覽の如く堂の直ぐ前に眞正面に有るのでやす。あれまで參ると、お廟の出張りで暗う成ります、狐格子の外あたりで、びしや〳〵、びしや〳〵と恁う。」

納所は泥鮒の喘ぐ如く、口許をもぐ〳〵、もぐ〳〵、
「何か水でも流れて居さうな音がします。過般の出水に懲りまして、假堂は寺内でも一番に其の乾きの良い處へお移し申したわけで、其處らあたりに小溝一つありはせずな、池も水溜も嘗て無い。はあ……はて、希有な事と思ふに就けて心を落着けて聞けば、何か、小犬が汁掛飯舐るやうでもありや、泥鼈が這廻るやうでもありな、段々氣が着くと何うも、ものが其の五つや十でない、何十何百と云ふ多い數が、つぶ〳〵と顎を煽り、口を蠢めかいて喘ぐでやす。形はふつに見えぬ。たゞ氣だけでやす、が、さ、形が見えぬだけに不氣味で成らぬ。此の通り寂寞閑として居はするし、聞くうちに、右のびちや〳〵が、潮のさすやうに次第に高う成ると、御堂がな、其の音に連れて段々地の下へ潛りさうに思はれる。何か又、不思議な事の前表で、田圃の中の蟲蠕、蛇、蚯蚓の類が、あれへ一固りに成つたでは無からうかやうにな。」
と一足退ると、番親仁と兼四も釣込まれて、あとに退る。
「益々音が擴がつて、恁う、地も濡々と黒く成るやうで、實はな、づッと此へ引取つた次第ぢやが、何でやせうな。それ、此處からも聞えるで。あれ、舐めるやうな。」と、舌で聞かせる。
小工面らしく親仁は腰を曲げて提灯と耳を突向けたが、此には聞えぬ。
「些とも私にや聞えない。」と兼四も俯向いて居た頭を掉る。

納所は、時に顱卷を解いて、襟へ卷いて、
「變ぢやわい。……はゝあ、在俗の此方衆に聞えゝで、出家の耳にのみ、あれ、あり〳〵と響くと言ふは、……はてな、或は御堂に籠つたぢやらう、此方衆の尋ねさつしやる御仁が、殺生の罪の應報……はあ、水音は網打か、釣道樂——何、御婦人か、なりや、邪淫の業報。……幻の蛇が責寄せたか、おろされた赤子の胞衣が月夜の影を這廻るか。」
——や、途方も無い事を串戲ではない。泡沫の喘ぐが如き濕々した音は、扨は板倉が水門に落したと言ふ紙卷莨の吸口の怨念か、と洒落に考へる讀者もあらう。が、飛んだ事で。實は七合ばかり打撒けた鰌であつた。此の納所が、草履で踏んで、ぬめりを食つて、やつと言つて尻餅を搗くには間もない。
兼四は罪の報だ、幻影の音だ、と聞いて、
「串、串戲ぢやねえ、水神の江月園の御新造さんなんだよ。」
自分が名告るやうに猛然として、
「御新造さん。」
「爺でがすよ……御新造様あ——」
と番親仁も、紫苑の雲を乘起すやうに、此處ではじめて假堂へ聲を掛けた。——何が、初端か

ら呼べばだものを、寺へ響く、夜陰のけたゝましさを憚つて、納所と話込んで後れたのである。

唯、返事が無い。眞似をするか、遠くの田圃で、谺のやうな月夜鴉。

納所は二つばかり、棒を突いて、突鳴らいて、頂くやうに額を壓へた。

「はあ、あの御婦人か、これは怪しからん。」と言ふ、……それよりも怪しからんのは返事の無いこと。

「御新造様あ——」

諸聲に、二人が些と慌しく成つて、假堂へ二つの影を漫に進むと、何としたか老年でもないのに、坊さんは、其の用心棒を杖の如く、前屈で、とぼ〳〵と後に續く。

十七

「御新造さん。」

——内から狐格子をトーン、輕くトン〳〵と敲いて、堂の裡で、聲はしないで應じた時、呼ぶ者の目に映つたのは、其の、格子を仄かに、外を差覗いた凄いまで髪黒く、色の白い月の面影であつた。が、扉を拊つて應じた音は、恰も毘沙門天が槍の石突を床にトンと取直し給へる如くに響いて、思はず階の前を飛退つた。

其の飛退つた二人の形は、ぼうふらの泳ぐに肖て居る。

唯、吃驚して齊しく目をきよろつかせた彼等の瞳に、御新造の顔が映ると同時に、不思議に扉の裏透いて御堂の眞暗な中に描かれたのは、一團の雪、撫肩から頸を掛けて柳の腰、細り緊つた爪尖まで、唯眞白な玉の如き姿であつた。

が、其を幻のやうに見て取る間もなく、月に咲いた紫苑の影が、颯と薄紫の影を投げて、色ある霧の如く人の目に其の御新造の姿を包んだ。ちらりと紅の一片が透通るやうな雪の襟裏に飜るのが、提灯の灯に見えると、白い手が扉に掛つて、お新——照吉の本名——は、爾時、伊達巻ただ一つ、消入りさうな衝丈の長襦袢。

唯見ると、眉の稍顰んだ瞼に、ほんのりと影を帶つて、板縁の上から俯向いて恁う彼等を見た。

「提灯を消して下さい。」

「ひやツ、」と親仁が、返事と吃驚を一所にして、灯を消したのと魂消たのと亦一所である。兼四は早う一足退つて、此は慌てて提灯を背後に隱した。

お新は乳のあたりを熟と抱身に、鰐口の緒の縮緬の紅白よりも細りと、

「可厭だ、こんな形をして、極りが悪いぢやないか、爺や。」

「こ、こ、こりや、お前様。」

「兼さん。」
「御、御新造さん、ど、ど、何う。」と舌を縮める。
「……追剝に逢つたんだよ。——堂の中で。」
「わッ！」と擲着けたやうに喚くと、紫苑の影を横倒しに、足を空へ投げて坊さんが尻餅ついた。此なのである。辷つたのは——其處等一面ぬめり返つて、びちや〳〵刎ねる。
「やあ何と……淺ましい、蛞蝓ぢやが……蚯蚓ぢやが、いや、鰌ぢやが、鰌ぢやが、鰌ぢやが。」
「御新造さま。」と爺やが、また呼ぶ。鰌の騷ぎ處ではない。お新が坊さんを見るとともに、再び扉に隱れたから。
で、お新が堂に隱れつつ言ふには——思掛けない追剝が、帶も衣類も一抱へにして奪つて遁去つたのが、丁ど坊さんの庫裏の戸を出た時である。追剝は墓を拔けて裏田圃の畦を切つた。自分も一走り、火の見に待たせた、其の俥までと思つたけれども、取亂した膚は、しどけないもの唯一重で、境内を歩行き廻る坊さんの目が恥かしくて出られなかつたものだ——と言ふ。
爺やを呼んで、扉に耳をつけさせて又言ふには——寒さは厭はぬが、母衣を掛けても、土手の月夜を俥に乘つて此の態では歸られぬ。何ぞ一枚腰だけも隱すものを——と言ふのであるが、爺やの布子と、兼四郎の印半纏。……

此處は一つ、住職が心得ねば成らなくなつた。さて住職も此處へ出向いた。が、對手が見知越の江月園の御新造だけに、妙に寺妻を遠慮して、其處で、墨染を貸したのである。
「これは清らかなものでござるて。」
お新が袖を通すと、唇の苦むまで、花やかに莞爾して、
「似合ひました。」
大和尙は、並に紫地金襴の袈裟を恭しく、紫苑の花の影に捧げて、
「且ウは途中の魔除でござる……いや、苦しうありませぬ、すぐに此からお乘出しなさるゝやうに。毘沙門天は雲にめします……われら式の俥なんぞ、氣になさる事ではござらぬ。」

十八

「お新……」
板倉光年は更めて、生命の御新造の名を呼んで、
「眞個の事を聞かせてくれないか。」
草木も寢つらむ、犬も鳴かず、白髭橋は霜なるべし。唯月影を水の流るゝ、隅田川に臨んだ其の奥二階の小座敷に、障子にひつそりと影二つ。……此の影は、水神のあたり、水田、水田の、

處々に生茂つた蘆の間をさゝやいて渡る風に連れて、ふと亂れては隈を宿す大空の雲が姿を形象つて、濃く淡く蘆の穗に描くであらうし、また蘆の穗は、浮名を散らすやうに、ちら〳〵と舞つて居よう。——座の定まつた時であつた。——板倉は猪口を持つ手も、衣紋着も更まつて、然う言つて訊いたのである。

緣起は祝ふもので、お勢が「一二三。」を機かけに、小座敷を出たと思ふと、颯と音した俥の氣勢を聞澄まして駈下りた、直ぐ階子の下で、

「お歸りでございますよ。」

「歸つたか。」

雁の聲さへ待兼ねた、何故か、長旅からでも戻つたやうに、板倉が其の時は些と慌しいまで續いて出て、通廊下の壁の影をつか〳〵と帳場の入口。

「や！」

塗緣の爐の前に、緣起棚を後に、夢に彩色した姿を見よ。炭の尉のやゝ白き霜の松風そよげる釜に、女郎花咲きはせずや、金欄の袈裟も墨繪の姿。

前の小窓の肱掛越に、江月園の提灯黄なる爺やの顏、鼻の赤いも夜更にして、呆氣に取られた

女中たちは、二人ならず三人ならず、目口の附いた澪であつた。

疊廊下を、はら〳〵と、爪尖で踏む裳より長く、朱鷺色の扱帶の解掛けた端を曳いたのやら、緋縮緬の曳摺る裙に、白脛の搦むのやら、姉さんの歸宅を覗きに來たのが、柱から出合頭に、其處に立つた板倉に、はつと氣を兼ね、ぱつと香水の薫を散して、忽ち新座敷の襖の繪の、黄菊も白い影に姿を隱す。

「何うしたい。」

と言ひさして、……其のまゝ板倉は二階へ歸つた。

お勢をはじめ、あとで口々に主婦に聲々。

「御新造さん。」

「まあ。」

「貴方、まあ。」

「あなた。」

お新は膝について居た、片手をぐい、と懷手。右手に茶棚の湯呑を取つて、

「呑口から注いどくれ。」

滅相な、此の二三年つひぞ無い！

お勢が、つッと摺寄つて、
「貴方、お身體に障りますよ、まあ、何うなすつたんでございます。」
「濕氣を拂ふんだよ、恁う言ふ時の。……お勢さん、可いから一杯。」
「可うございますか。」と。危なつかしさうに中腰で菰冠、銘の白鷹の呑口を捻る音は、霧に羽搏くが如くに響いて、芬と薫ると、窓なる面の赤い鼻は、恁る折から、天狗が覗くやうで物凄かつた。
「片口にも注いでおくれ、寢酒に二階へ持つて行く。」
ほつと呼吸した爐緣の立膝、血も醉つたか、と媚いたは、法衣をこぼるゝ紅入友染。
「追剝に逢つたんだよ、お勢さん。」
「えゝ。」
「私は酒をゆするのさ。話は明日——否、私が持つて行く。」
と、片口盆に立つた處は、大和繪の普賢菩薩に、藝者の憑物したやうで。
「皆、もうお寢。追剝やら、ゆすりやら、寺島村は物騷だ。……ほゝゝ、火の用心を賴みましたよ。」

蠟燭

十九

「嘘ですとも。」
——お新は、俯目に、靜にもの言ふ女である。……微醉ながら、ひつそりと情の籠つたしめやかな聲で、板倉に恁う言つた。——
「追剝なんて。」
細面に、やゝふつくりと笑を含み、
「はじめね、毘沙門樣の御堂の前に、魚屋の荷らしい、笊に天秤を渡したのが、晃々とした月明に見えました。盤臺は有りませんでした。あゝ、蜆屋の荷だらうと思ひましたよ。……貴方が、今日、内へ入らしつて、……一寸。」
「何、」
「今日内へお歸んなすつて、と言ひませうね、誰も聞いてはしないから。次手に七八年若く成つて、構ひませんわね。」

「結構、」と板倉は棒に言ふ。

「あゝ、たゞ（結構。）ですか、お互に所帶染みたこと。」

身體の弱さに、煙草は斷つて居るのだから、此處で鐵瓶の蓋の撮子に一寸觸ると、チリンと幽に音がする。墨染で、紫の輪袈裟のまゝの此のすさみ。

「田舍じたての籠花活に、

龍田を活けたたのしみ、」

の、……其とは世を隔てたやうである。

「此の座敷に、貴方がお好きなのを活けて上げませうと思つて、私が、裏庭へ出て嫁菜のおくれ咲を花鋏でチョキ〳〵でしたつけ。」

爾時の黑縮緬の羽織の好さ、薄に頸が白かつた。

「あなたは、臺所口へ出て、荷の前に蹲み込んで、蜆賣の小僧と談話をして居たでせう。秋晴で薄も眩いやうで、私は嬉しかつたんですよ。內の旦那樣のやうに見えたから。……あすの朝はお汁にして、あなたに食べさせようと思つて買はせたんですがね……小僧が粒選の淺蜊を剝いて居ると、あなたは、靑だの、藍だの、茶色だの、淺蜊の條目で、何年經つたか、貝の年が解るつて、小僧に講釋を聞いておいददでしたね。

——まだ、お風呂へお入んなさらない前でしたつけ——

あの小僧は、曉方、千住で買出しをして、突掛け起き拔の淺草の十二階下あたりを廻つて、それから吉原を賣つて、こゝへ寄つて家へ歸る、と極めて居ますが、親の家は、あの……毘沙門樣のお寺の近所ださうなんです。

それだもんですからね、其處に荷の有つたのを、何うしてだか、あの小僧のだとばかり思ひました。變なんですけれどもさ、あとで考へると。

蜆だと思つても、何ですかね、月夜のあんな處では、いくらか腥いやうな臭がしますんです。……どうせ、お線香や蠟燭の香とは違ひますもの。……をかしく其が鼻について、手を合せて俯向いても、氣が散つて不可いものですから、忘れるやうに〳〵、幾度もをがみ直して、やつと氣も心も澄みましてね、少し疲れたやうに成つて、ほつと呼吸をして顏を上げますとね。……出水のあとの假の御堂で、緣と云ふほどのものは無し、床に立掛けたやうに成つて居ます狐格子へ、直きに、あの私の顏がついたんですよ。

然うしますとね、御堂の裡に、恁うね、ぼんやりと、何か、ものの蔭に成つたらしい灯が點れて、それが、ちろ〳〵と幽に動いて、床に附着きさうに下がほッつりと紅いんでせう。

人の頭が見えました、恁うね、突伏したやうに成つて——」

お新はほつれ毛を搔上げた。此の一筋も、不思議に取亂したと言はねば成るまい。身だしなみよく愼ましい不斷である。

「すぐに、蜆屋の小僧だと思つたんです。……いつも、起ぬけに公園で賣るのは、夜中に千住へ行かなければ成らない。それで丁ど次の吉原では、二時頃に、極つて、桐佐と云ふ引手茶屋の臺所で、お辨當を使ふんだつて、聞いて居ましたものですから。

宵惑ひに、時刻を取違へて、御堂へ入つて、うたゝねでもして居るのぢやないか知ら。」……

二十

「風邪でもひきはしないか知ら。あんなに髮を押附けて、焦げたら何うするのだ。――貴方、本で讀んでも、蜆賣の小僧は親孝行に極つて居ますから、あはれな、可懷い氣がしました。

(伊三公ぢやないの)……えゝ、小僧の名ですよ……(伊三さん、伊三さん。)

然う言つて呼びますとね、何うでせう。

鞠のやうだつた黑い頭が、忽ち榮螺に化つてむく〳〵と持上がるとき、灯が映つて醉つたやうな眞赤な瞼、間の狹い、眉毛が一文字を引いて仰向いたんです。私、吃驚する間も何もありはしない、ぬつくり立つた印半纏の背が天井に支へさうでしてね。

(やあ、聞いたやうな聲だ、照ちやんぢやねえか。)ツて、私の前の名を呼んだかと思ふと、すばやいッたら、退くも引くもありはしません。狐格子の合目から……何でしたつけね、恁う云ふ時は、猿臂とか云ふんでしたね、張飛のやうな力の强い手を出して。」

と火鉢の蔓に掛けた手首は、蔦よりもしなやかで、

「私の手首をぐいと取つて、それから納札を嚙るやうに、頤から先へ顏を出したの。十七八ならば聲も立てませう、口惜いから熟と其の顏を視て遣ると、

(矢張り照ちやんだ、あはゝゝ。)と笑つて、猪村大八。」

猪村大八、灰に書かうとして火箸を控へた。

「えゝ、(猪村だよ、忘れたかい。)ツて云ふんです。

……先生。」

「猪村大八――むゝ。」と、おくれて應答をした。

袖の音して膝が寄る、法衣の下の友染は、寂しい中に媚かしく、

「一度、話しましたつけか知ら、其の人の事を……」

「さあ、聞いたかも知れないが、覺えては居らないなあ――いや、まだ話すまいよ、聞かないやうだ。」

「小照で、前の萩島家に、私が出て居ました頃、雛妓から一本に成りたて時分、可恐しく贔屓にして下すつた客なんですがね、――半年ばかりの全盛で、直ぐに遊びが途絶えました。影も音信も分らなくなつたんです。尤も、貴方にお目に懸らない前なんですよ。」

「分つた、可し。」と、板倉は何故か深重に頷いて言つたのである。

「其の人に、――其の人なんですが。」

言ひかけて、お新は一寸左右を見ながら、

「思ひも掛けない、不思議な處で、不意に然うして逢つたのは、今夜で、此で二度めなんです。よく話さないと分りませんが、此の前は八年あと――忘れもしません、はじめて、あの、貴方に逢つた、あくる年の正月四日……」

摟ふる指もちら〳〵と、色ある目許に男を視た。

「いつも苦いと云ふ中にも、貴方は未だ書生さんだし、私は抱妓のつらい事。――春七草の眞中だと云ふのに、十二時過ぎから待合の暗い座敷で密と逢つて、……お帳場へお年玉、女中の心づけもかなじむから、大びらに突袖しては松飾さへ潛れない。二人で顔を見合せて、小さな聲で、――おめでたう。」

「……」

「お互にねえ、……心意氣は、蒼穹へ飛ぶ突羽根でも、世間には、緣から落ちた手鞠でした。」

しみ〴〵と言つてほろりとして、……

「二人の影が障子へ映る、藝妓島田の色の濃いのを氣兼ねしては、密と屏風を引きましたわ……果敢なかつたわねえ、光さん。」

ふと目を拭つた袖口の友染の影を見よ、鳥の翼の墨繪にして、其の墨の香が芬と薫つた――戸外は露が霜と成る。

男は思はず俯向いた、が、惟ふに其の時と同じであらう。

「恐縮だつけね。」

「否、それも嬉しい夢ですが、……あの晩の、あくる日は髮の結日でせう。……分けて貴方に逢ふんだもの、結はないで置けますかつて、ほゝゝ。」

ト探して、猪口を衝と出して、

「恁う成ると、また冷酒は毒だ。しつかりなさいよ。……ついで頂戴。」

お奉行も、ぐいと氣輕に、

「心得た。」

霜の篝火

二十一

「婦人は誰しも然うですけれど、分けて私は、髪を氣にするもんですから、其の時分も生意氣に、何某てッてね、土地で一番の髪結さんに結つて貰つて居たんですがね、歴々の姉さんたちのやうに、附屆けが出來ないし、御祝儀で、順のあげさげしようの、番をくりかへるのつて譯には行きますまい。

梳手が七人腕ッこきのが居て、それでも目の廻るほど忙がしい人なんですから、時間が遲く成らうものなら、一日かゝつたつて番は取れません。

果敢ない首尾して逢ふものを、……私は辛かつたけれど、御存じでせう。あの待合の女房さんに、寢しなに賴んで、四時半に起して下さいッて言つときました。

漸と胸の處がほッと暖く成つたと思ふと、照ちやん〳〵ッて女房さんが起しましたわね。未練で默つてると、屏風を密と開けましたつけが……貴方は寐た振をして居てさ。」

「可いよ、まあ、可い。」と、板倉が肩で遮る。

「も一つ注いで下さいな、――偶にはお說教を聞くものです。――(お代はあつて、)と云ふと、貴方が不恰好な墓口を出したわね、一圓のお紙幣一枚、あとは醉つぱらつた、ばら錢ばかり。」

板倉が、苦笑せまい事か。

「新橋のお客には些と大膽過ぎたわね。」

自棄らしく、お奉行が、

「いや、大膽にも、……百姓一揆だ。」

「唯今は？……」

「寺島村にて本領安堵さ。」

「些と又新橋へ御通行の砌は、お立寄り下さいましな。」

「まだ、勘定が殘つて居たかね。」

「何を言ふのさ、くだらない。」

踊にさへ、めつたに見せぬ手を擧げた。

「ト先づ一圓を頂いて。」

額に一寸お禁厭をして、打微笑み、

「夜が明けてもお寐つて在らつしやいよ、屹とよ、と貴方の耳に囁いたは、お腰元の小照の氣は

……髪を結つて引返して、も一度――何と言ひませうね。」
打傾いて、何故か、恍惚と顔を見ると、見られて反らす板倉の顔を、婀娜に曲げた口許で引向けるやうにして、
「ほゝゝ、もう一度お奉行様にお添ぶしを致す心中。
――自分で駒下駄を出して、格子をから〳〵とあけて出た、と此處までは可ござんした、まだ針のやうなお星様が晃々と光るでせう、劍とも鑢とも、其の風の寒いこと。
膚身を氷で縛られるやうで、霜が骨に浸込むんです。――人參で孝行や、お局へ忠義のためぢや、勿體ないが、一町と歩行かないうちに、凍死をしたでせう。
男を待たして、おめかしに行くんだから、胸に暖りがありますわ。――采女橋にかゝつた時、しら〳〵と成りました。雲も、地も、皆霜です。大な煉瓦の建物も、八寒地獄の玄關を見るやうで、此の世だか、あの世だか、烏も鳴かなけりや、人ッ子一人通らない。」
一人采橋の霜を踏む。
「握拳に袖口を掴んで、向風に、恁う、まともに俯向いて行く。」
……白き頸の冷たさよ、殘月恰も劍の如く、橋は首切る俎であつた。
「酷いもので、のばした襟が縮められない。寒い風の剃刀が、ヒタリと刃さきを當ててるやうで、

動かすと切れさうで。ころりとね、首が落ちて、仰向いて私を見て、あゝ寒いつて、そのトタンに口を利きさうな氣がしたんですよ。」
「あゝ、」
板倉は身震ひして、
「寒くはないかい。」
「否、お酒がまはつていゝ氣持。何だか法衣がぬぎたく成つた。……悟れませんね。障子をあけて、一寸月でも見ませうか。」
「のんきな事を。」
板倉は、もう一つ身震ひして、
「俺が寒いぞ。」

二十二

「漸と、まあ、橋を渡りますとね、霜柱の波を打つやうに、地の凍つた上を畝を打つて、一風ヒユウと來たんでせう。ヒイと我知らず呼吸を引くと、カタ〳〵と駒下駄が宙に浮く。……銀座は見えても、眞すぐに突切れません。

一息でも、建物が覆に成りさうですから、横に切れて河岸端を行くんですがね、身投げのやうです、唯一人。

滿潮でしたよ。

苫を葺いた船が一艘。艫の處に、橙を載つけて輪飾を掛けたんですがね、船脚を輕く浮かしながら、水晶を削つたやうな霜の石垣際について居ると、渡つた橋も玉の虹、此の上ばかり幽に蒼空が覗いて居ます。其の空のやうな色をした、落葉を焚くか、榾の火が、苫の透間から、一條すッと煙の立つのが見えたんでせう。

此方は活きながら雪女郎にでも成るかと思ふ、餘りの寒さに、自棄が出て、(些と暖まらしておくんなさいな、船頭さん。)と其の氣も無しに、聲を掛けたものですわ。

猪が口を開けたやうに、苦を刎ねると、見た顏は、——矢張り先刻の毘沙門樣の御堂と同一、——うつむいた瞼の赤い、一文字の眉でした。船の中に唯一人、はらん這に成つて、頭の處の竈に薪をくべて、火を焚いてるのが、額に映つて、くわッと開けた目で、じろりと見ました。」……

「其の猪村か、大八だな、ふむ。」と肩に氣の入つた腕のはずみに、板倉が片膝を輕く拊つた。

「唐棧柄に三尺帶で、前に、采ころが三ッ、化ものの目に象嵌をしたつて風に轉がつてるぢやありませんか。——私よ、あ、と唯云つた切……寒さは寒し、齒の根も合はない。

(やあ、照ちやんか、さあ當んねえ、)と、ぐい、と火のついた薪を引出して、燃えた松明のやうなのを其のまゝ舷から突出すから、引摑みさうに、手を固くして岸へ屈んで、恁うかざすと、船端をざぶんと水が打つて居る。

霜に火の粉の綺麗さつたら。

また朝嵐が颯として、袖も火も靡くのを、片手頰杖で船から見ながら、(佃の辨天樣へ朝參か、俺は又采女橋の橋の精が夢枕に立つたと思つた。一寸消えねえで居てくんな、久しぶりで顏を見たぜ。)と言ふでせう。

逢はなくなつて二年ぶり。——(まあ、猪村さん。……)(汝ゆゑだぜ。嫌はれた其の自棄で、人間一疋灰に成つた。吹けば飛ぶとは此の事よ。おゝ、袖の火の粉を拂はねえか。)と莞爾々々しながら、(長襦袢は何うしたい。)と振を覗いて言つたんですがね、鋭い瞳が乳を射ました……

薪の火より、緋縮緬の色が冴えないで極りの惡さ、出の紋着だけ尙ほ見すぼらしい。……」

お新は冷たさうに膝を撫でて、

「長襦袢は、と聞きましたのは、此が話なんです、貴方、……今夜の事も……聞いて下さい。——其の人がね、はじめ贔屓にて、三日に揚げず私を呼んでくれました時分は、何とか會社の重役と云ふのでしてね、三十一二、何處か鐵枴な男の癖に、いつでも紋着に袴がけで來たものです。

旦那様よりか御前の風采。其の自動車が、船に成つて、紋着が三尺帶、采ころと一所に轉がつて居るんですから、先方ぢや、采女の名の橋の精かなんてひやかしたけれど、私はまた、彼處の堀に有名な河童が化けたのかと思ひましたよ。

まあ、其ですがね。

御前様時代のこと、——或日、築地の待合から、向島へ枯野見と云ふので、百花園を一まはりして、あの（お成の間。）でお茶きこしめしなんかして、それから、此の水神へ來て晩御飯を食べて、と云ふんだけれども、私は何にも食べないんです。實を言ふと、其の時分、私は悶惚をして居たんですから。……何うして好な人の前で、肴なんか搖られますかッて、十六や七の年紀は——可愛い人の流連に三日の間酢ばかりのんで、しまひに目をまはした妓がありますよ。……私かつて、鹽燒について來た生姜を銜へちや、お盃に少しづゝ。

と幽に見せた齒の眞珠、酸漿よりも愛らしかるべし。

「御馳走様だ。」

「何ういたしまして、……」とお新が丁寧に會釋した。

二十三

「汐入の池で釣をする藝者の絲に月が掛つて、水が薄暗く成つた時分に、其の水神を、右の御前と合乘で自動車で出ましてね、築地の待合へ歸ると、丁ど亥の子の朔日だつて、炬燵開きだから祝つてくれろ、と女房さんが案内で、離れの六疊へ通されますと……置炬燵をして、山茶花で、そして、綺麗な床が取つてあつたんです。」

お新は恁う言ひかけて、輪袈裟の胸に手を置いた。

「佛様の氣で、貴方、衆生の事だと御覽なさいよ。……御前——さ、其の采ころの今の船頭——が、ぞろりと脫いで、派手な縮緬の長襦袢になつたんです。……男の長襦袢は不可ませんね、……ですから貴方にも羽二重だつて着せませんが、其時は何も其が可厭だつたと云ふのぢやありません。筋骨とかがしつかりして、厭味氣は微塵も無かつた。……私も氣のない人ぢやない。ぱちんを離して枕許で胸の封じめを切つたんですが、魂が、解ける帶の重みにかゝつて、すつと背筋を拔けると思ふと、はつと氣が着いたのは、自分の膚の長襦袢です。抱妓の身の悲しさには、上には相當の裾なり、帶なり、引摺つては居ましたけれども、膚へ着けた緋縮緬には、背筋の處に敷當の繼が當つて居たんでせう。

御前の立派な服裝に較べて、恥かしくつて〳〵、岡惚をして居る人だけに、消入りさうに腋がすくむと、つひぞない、冷い汗がたら〳〵流れて、居ても立つても堪らなくつて、其の服裝で、

ついと立つと、

（何處へ行く。）と壓へられた裳を拂つて、其の面目も無い姿で、裏口へ駈出すと、女中たちが驚いて立掛るのを、泣きながら突拂つて、いきなり露地へ遁げました。

其の女中たちの前へつけても、御前の身に成つたら何うでせう、……まるで言ふ事を肯かないのを、手籠にでもしたやうで、これぢや、當分、寄りつけやしませんもの。

私は主人の前でも、二三日は唯泣いて居て、後に漸と築地の待合の女房にまで其の次第を言ひましてね、詫を賴んで置いたんですが、通じた事やら、通じないやら、其の御前は其切。……貴方を待して髮を結ひに、霜の朝、――采女河岸の然うした時まで、弗り風説も聞かずに居ました。

（長襦袢は、）と火の燃える下で、……訊ねたのは、其の事を言つたんです。

……ぢやあ聞いて居ましたわね。

問はれて顏も白けます、霜の薪に恥かしい、と當つて居ました緋の袖口を引込めると、（まだそんなかい。）と顏を見て、（此の燃えるやうな奴を一枚被せたい、と言ふも沙汰過ぎだらう、……お賽錢でも投げたいが、そら、此の通りよ。）と掌で采を伏せて、（目が出ねえ。）

然う言つたんですが、船頭ぢやないんです。……其の船を場所にして、大勢で狐だか獺だかッて事をして、夜一夜すつかり取られたらしい。工面の良いのは船頭ぐるみ、皆陸へあつたまりに

出たあとを、土瓶で煮燗をして居たらしいの。

何だか、場合が場合だし、……我身で分らない氣に成つて、（猪村さん、御飯を焚いて上げませうか。）と浮いた舷へ裳を下して、地獄へ一足飛ばうとすると、薪の火で、石垣をぐいと突いて、水へ落す、と船が潮へ開いたんです。――（法學士は何うしたよ。）……」

「……」

「板倉さん。」と、ふと小な聲。

「……」

「まだ、貴方は學校へ通つて居なすつたんですね。……」

「知つてたのか。」と、唸るやうに云つて屹と成つた。

「えゝ、知つて居ました。（……繁昌しねえよ。）と苦を伏せると、石のやうに河岸に立つた、私の胸に、カラリと土瓶に打つけたらしい、采の音が響きましたよ！」

二十四

「峠を一人旅でもするらしい、心細いんです、其の船の苦を、一軒家の茅葺の屋根のやうに見て、離れますとね、うつむいた目に、白足袋のぽッつりと、今の火の粉で焦げたのを見て、漸と我足

だと氣がついたんです。其までは霜かとばかり思ひました。

歩行くのに、しばらくは、薪の火が、目の前に、大な松明を點しましたよ。紅のやうな太陽も出ました。……今の人の一言で、貴方と晴れて夫婦になれさうな氣がしましてね。薪は果敢ない門火でなしに、左義長の火に成つたんですが、いまでも思出しますとね、夢を見たやうなんですわ、——銀座は朝から初春でした……

猪村大八、其の人です。先刻、毘沙門樣で、いきなり格子から手を出して、私の手首を取つたのは。……」

板倉が無言で衝とさす杯をうけて、一息して、

「……蜆ぢやありません、腥さかつたのも道理こそ、籠の中は鰌だつたんですよ。資本いらずに、彼處等の溝で摑へちや賣るのですとさ……まあ、それは後で聞いたんですが。……

突如、然うして手を摑へて、(一別以來、いつかは采女橋の精だつけ、今夜は隅田の辨天樣だな、まあ、此方へ入んねえ、毘沙門天がお待兼ねだ。)ッて、あは〳〵笑ひながら、罰の當つた勝手な事を言ふのでせう。……餘りと言へば思掛けなし、其の人だし、私は何だか茫として、言ひなり次第に御堂へ連られて入りますとね、板敷に敷いた薄緣の上へ、竹の皮を丸げて、先を島田湯婆のやうに結へたのを立ててさ、其の中で、忍び蠟燭、龕燈と云つた工合に、ちろ〳〵灯して、紙

ごしらへの目引盤に、小豆粒ぐらゐな小さな棋馬を並べたんです、——分りました——腹這ひに成つて、一人で將棊を樂んで居たんです。……でね。」

「待ちな。」

お奉行は、偶と遮つて、

「鰌屋で……將棊をさす。……」と打案ずる如くに、やゝ、目を閉づると、閉ぢつつ顏色が颯と變つた。

「何うか、まあ、なすつたんですか。」

「いや、思出したんだ。」と沈んで言ふ。

お新は、斜に胸を引いて、

「え、何を、貴方は。」

「何、何でもない。が、いつかも話した、——お前が伊豆へ湯治に行つた、と言ふ手紙の來たのが、丁ど淺草の素人下宿で、友達と、へたな將棊をさして居た時だつた。——其前から一二度逢ひに行つて——逢へなくつて、それ以來、三年の間と云ふもの、まるで逢へなく成つたらう。……お前も、眞鶴の沖へ落ちて、一時は生命を亡なしたんだ。其奴を思出したんだ。が、何、風のやうに吹いたあとだ。——其處で、其の堂の中で？……」

お新がまだ、言はない前に、
「しかし、祟る。將棊は何うもつけが悪い。些と此處は氣に成る處だな。……海の中へも落ちないで、無事に歸つては來てくれたが。」
と串戲らしく、笑つたが、何故か、其の笑は寂しかつた。
お新は眞顏に、
「まあ、然う言へば祟りますね。今夜だつて、長襦袢一つにされて、出るには出られず……蠟燭も消えました、御堂の中で、幽な月に照されながら。」
言ひつつ、くの字に姿を崩して、弱々と裳を投げつつ、お新は天井を凝と視た。
「びちゃ〳〵氣味の悪い鰌の刎ねる音を聞いて居ましたうちは、あゝ……まるで海の底に身を沈めて、むら〳〵解ける髪の上の浪を聞いて居るやうで。」
と何思つたか、其の蒼海の底かとばかり瞳が澄んで、凝視る頰が蒼白い。と、おくれ毛もはらりと成つて、ぶる〳〵と身を震はす。
唯思ふと、すツと疊を辷つて、褄の流るゝ如く肩を入身に、衝と板倉に身を寄せて、
「おゝ、寒い。」
板倉は屹と視た。

「其の搔卷で包んで頂戴。……貴方の手で、よう、」
板倉は俯向いた。
「そして、しつかり胸を抱きしめて下さいな、急に何だか心細い、……大川の水が聞えます。……」
板倉は面を背けた。

二十五

お新は岸破と、板倉の膝に肩を投げた。何事ぞ、嬌名新橋の妓流を壓して、寺島村に閑居の今も、水神に因める龍なりとて、たとへば此處を音信るゝを、隱語に三顧と云ふまで、雪に、月花の趣を兼ねて、歌、俳諧も成るよし聞えた照吉が、華奢な膚の筋もなく、金襴の袈裟法衣も、ただ消えよ、と縋着く。
「お互に恁う成るまでには、隨分苦勞をしたんぢやありませんか。……」
「お新、」
と云ふと、板倉が、今は我慢がしきれなさうに、犇と横抱きに抱くか、と見れば、頰を重ねた瞼から、眼鏡の緣の鐵が溶けるやうな、熱い涙をほろ〳〵と落す。……

萎えたやうに、お新は呼吸を忍んで居た。
「偶には甘えなくつては……」
と密と睜いた目許で莞爾して、
「被せて下さいよ、嬰兒のやうに、くる〳〵卷にさ……寒いんですよ。」
と板倉の其の涙を嚙むやうに、美しい頰にかゝる後れ毛の端とともに、幽にキリ〳〵と皓齒を合す。
板倉は切なる聲して、
「何だか大川の潮が一時に、蘆間々々の月を流して、二人にざつと滿して來るやうな心持だ、お新。」と云ふと……
「えゝ、」……驚いたやうに、且つ頷いたやうに見えたのは、半ば目を瞑る、柳の如き、其の睫毛が戰いだのである。
「お前の話に身が入つて、先刻から、聞かう〳〵と思ひながら、機會が無くつて居たんだが、袈裟法衣の其の姿で、私に眞實の事を——聞かしてくれ。むゝ、暴露けた、虚欺の無い處を……」
「眞實の……虚欺のない處をッて？」とお新は漸く身を起す。
「寒からうがね、暫時、……暫時、其のまゝで、」

と板倉は、身もまかせ姿もまかせた投遣りのお新の襟を合せると、半襟を引くはしに、紅入の紅がちらりと成るのを、慌てて法衣の衣紋で伏せて、抱くばかりに据直して、
「其のかはり私も脱ぐ。」と、ずばッと緋の羽織を脱いだ。が、
「勿論、何も。寒いおもひをするには當らん。炭を繼がう。赫と……采女橋の霜の松明、何か、其の薪の火だ。」
然も〳〵不器用に、ぐわさ〳〵と炭を繼いだ、其の音も、鼠が鳴くやうに夜更けたり。
「唯、何だ、其の服裝で、言つて貰ひたいんだ。」
「懺悔のやうに、祕さずにと言ふんでせうねえ、……幾歳にお成んなすつたの、貴方も隨分。」
靜に其の時、火鉢の向前に居直ると、寢酒のたしの片口の酒に蓋した、二つに開いた懷紙を、一つ疊んで、炭火を煽いで、
「懺悔する尼さんよりか、これぢやあ、間夫はひけ過ぎと云ふ形ですが、可ござんすか、先生。」
と膝で嬌態をした媚かしさ。踊の手練と豫て聞く、其の墨染の精のやうに、もの凄いほど美しい。
問答に負けた裸坊主で、默つて被せうと板倉が搔卷摑んで立つ處を、唯手を支いて、撓かに肩で留めて、
「否、否、大川の水音が、唯身に染みるばッかりで、身體はほか〳〵して居ますよ、寒い事はな

いんです……實は、」

とお新が、火鉢に手を掛け、衝と直つて、

「偶とした事で、袈裟法衣を被るやうな、こんなはめに成りました。私も實は此の姿で、……更めて、あなたに是非聞いて頂きたい事があるんです、が、まあ、あなたのお聞きなさりたい事から申しませうか。」

二十六

「先生、貴方のお心は、私には、よく分ります。お問ひなさりたい事も存じて居ります。――先に學生で居なすつた時分から、私が、こんな身體ですから、(浮氣もよし、心變りもよし、ふとした行爲も止むを得ないが、屹と隱さずに貰ひたい。でなければ、何うにでもして自分に知れないやうにして欲い。)――と……早い話が綺麗ずきで、私がだわね、外に男を持つと、其なりきれて了はうと言ふお約束だつたんでせう……」

「いや、約束ではない、賴みだ、願ひだつた、それを肯入れてくれたんだ。……」

「串戲ではありませんわ。……今夜の事だつて然うですよ、何が、氣懸りなんですえ。」

屹と言つた、が、急に優しく、

「えゝ、貴方。」

と板倉の手に、其の火鉢越に手をかさねて、

「堂の中で帶を解いて、こんな姿に成つたつて、第一場所が場所ぢやありませんか。尤も昔話には、然る都の上臈が、鳥部野の阿彌陀堂へ女童一人連れて參詣すると、草の中から鬼が出て、緋の袴など剝いだ上に、佛の背後へ銜へ込んだつて話がありますさうですけれど、もしか其なら、私にだつて覺悟があります。

恁う云ふわけです、猪村さんがね。――

――對向ひに御堂に坐ると、何にも言はないで、(近頃は照公、長襦袢は何うだ。)と言ふのよ。

――隱すことはありません、七年あとの、采女河岸で、貴方の事を知つて居て、(繁昌しなよ。)と采を投げてくれた心意氣が嬉しくつて居たんですから、(背中に繼はありません、お庇樣で、)と手を支いて言ひますとね。

(無疵の玉だな、難有え、が、又とは逢へめえ、大八一生の思出だ、其無疵な處を見せてくれ。)

然う言ふから、私は膚を脫いだんです――が、今思ふと悚然とする。魔が魅したやうですわ。何故か、采女河岸の事と言ひ、其の人には、何處か一つ仕劃までは言ふ通りにしなけりや成らないやうな氣がしてさ、魅入られた形に、うつかり帶を解いたんです。……と云ふのはね、(袖ばかり

ぢや怪い、帶の下は鱗だらう。)と肩を敲いて笑ふぢやありませんか。
蠟燭の灯をさしつけられて、背中がぼッとした時は、私は、手足が氷のやうで、格子から月影の紫苑の花を見て居ました。」
面影も、氣勢も、こゝに見るやうで。
「其の蠟燭をフッと消す、私が屹と成つた時、(可し、よくお前虚飾を張つた。築地の炬燵に、あの虚飾がなかつたら、お前の身體はくされたんだ。俺は盜賊なんだ。……)ッて。」
「其の猪村が。」
「お聞きなさいよ、先生。」
お新はエヽと幽な咳して、
「帶をたぐつて一抱へ、(羽織ぐるみ、そッくりと貰つて行く。お奉行樣の奥方の身ぐるみ剝ぎや盜賊冥利だ、鰌が天上すら。)と狐格子を出るが疾いか、笊を取つて打撒けて、(毘沙門樣へ御冥加に奉る。……や、腥は不可えかな、待てよ、何處かの多聞寺には、渾名に成るまで、黑鯛の好きな坊主があつた、うふゝ)と笑つて、(奥方、殿樣によろしく。)と、片擔ひの天秤棒で。笊へ、上のを一枚脫いでくるんで半纏の中へ、ぞッくり上下。——
墓原を拔けますとね、竹垣を蹴破つて、小流をトンと飛んで、そして畦道を横へ切れるのが、

羽目板の破目から、鐘ケ淵まで、月明で、小さく成るまで見えたんですもの。」
——其の後は前に言つた。袈裟法衣は、住持の和尙が當意卽妙だつた事は言ふまでもないのである。
「……ですが、今思ふと恐怖いやうね、盜賊ですつて……」
「お新、其の位な事が恐怖いかい。」
と板倉は安からぬ顏をして、更めてお新を見た。
娘のやうに羞含んで、頤を襟に當て、
「こんな、うまい裝をして、貴方に疑られただけも恐怖いぢやありませんか。ですが、もう疑は晴れたでせう、先方は盜賊なんですよ。」
板倉は身悶するやうに胸を煽ち、膝を刻んで、
「待て、待て、お待ち、私は、はじめから、其の猪村の事は何とも思はん。が、雖然、お新、盜賊が可恐いか。俺は人殺兇狀持だぞ——それについて、誓つて、眞實の懺悔を聞きたい事がある。」と一時に、兩の肩に溜息して、ほつと仰向けに天井を見た、彼の影は、壓敷に滿ちて黑かつた。
家の棟を雁が渡る……

水神伯

二十七

時に、此の物語を聞かるゝ各位は、電車が兩國橋の袂から、河岸を錦水と云ふ料亭の角へ彎曲する、あの角から、先の、新大橋へ行く侯爵細川家の長い黑塀の前あたり、川端の道が狹く、岸が淺く、さし潮の時は、水面との距離が、もののニ尺とは隔らない。のみならず、棄石一つ柵らしい形もないので、冬は寒いために自然岸を除けるから仔細ない。が、夏場は、其處等の醉拂が、ふら〳〵川風に吹かれて通つて、唯もう、緣から足をぶら下げるくらゐな處で、一歩踏外すとずぶりと沈んで、新聞に業平とも記されず、鷗一羽、鯉が釣れたほどの評判もなしに、たあいなく溺れて死ぬのが、一夏の間に九人や七人に留まらないと云ふ事を、豫め御承知おきを願ひたい。

こんな後生の可いのは、地獄でも、極樂でも、帳面の數には入れないから、從つて娑婆に於ても、うつむいてぽかんと浮く、西瓜のやうな、頭數だけ叩いて置く。……七八月の旬に成ると、番太郎のやうな氣味の惡い小父さんが、長鍵を逆について、彼の邊川端をぶら〳〵と廻つて居て、

そりや浮いたり、と襟首を引掛けてずる〳〵と水を切るのが、一晩、多い時は三個ばかり。其の筋では、此の大な塵芥の容器に、早桶と云ふものが用意してある事と……

最う一つは、近頃、――吉原仲の町の引手茶屋の女房が、お縫と云ふ娘を連れて町へ出て、此の濱町に「突羽根」と云ふ小意氣な鳥料理を營んで居る事……

それから清正公界隈の其の濱町何町かに、「荵」と名づけて一字銘の待合があつた事――今でもあらうと思ふ――をお含みおきを願ひたい。

此の待合は些とをかしな仕組で、柳橋、芳町など土地筋の客や藝者とは何等の交渉――大袈裟だが、其のそれがない、然うかと云つて、其のそれでもない。――主婦が、女中だか、梳手だか、もと新橋に居た事がある、其のちなみから思ひついた家業で、蝶でも、花でも、乃至木の葉でも。客は蟬なり、蜻蛉なり、新橋の風筋で、飜々飛んで來るのを、引銜へる內證の巢で。蜜の有るのは蕊に潛む、六疊四疊のかくれ場所――土地では殆ど誰も知らない、其の「荵」と云ふ待合の事を、も一度念のための御存じ知りの程を願ふのである。――

一夏、八月の下旬、曇つて堪らなく蒸暑い、火山のやうな蟠つた雲の口から、星は噴出された火の粉に似た、夜中一時頃であつた。

怪げな紺の縞數寄屋、羽織なしの着流し、兵兒帶と云ふ形。藁稈の帽子だけは眞新しいが、の

めりに、じと〳〵と濡れたのは、扨は此の客は、十時頃一降どつと來て、あとを蒸返した、あの雨を食つたと見える。浴衣も、貸浴衣を、借りた方がびしよ濡れの我が單衣より、柄の判然としたのに縮まりながら、衣紋竹で電燈の曝しもの、それが生乾に成つたのを、疊みつけもせず着たに相違ない。酒だけは相應にまるつたが、不首尾と見える。……聊か理に積んだと云ふ、肩の重いふらつき方、黄金の延棒ではあるまいし、つかずとも可い、杖をついて、其のふら〳〵が、とぼとぼする、悄然とした風采で、濱町の件の(葱)の露地を出た、其の……一客がある。

今の殿様内膳正、卒業試驗を濟した年で、まだ就職に迷つて、淺草の下宿で安い賃譯などで辛うじて、お新(其の頃は萩島家の抱妓で小照。――照吉は仔細あつて後に名を更めた。――)お新に逢つて居た、乃ち板倉光年であつた。……

實は寺院の息子で、(くわうねん)と音讀すべきであるが、第一お新が、光さんでなければ納まらなかつた。

次手に、恁う云ふ事がある。……やがて小照が、一度伊豆の海に溺れて、蘇生つて、中途光年とあひゞきの絶えた頃に――仔細あつて、照吉、と御神燈を更めてから、土地のうれつ妓の第一人と成つて、板新道の龍也矣と稱へられた頃なりし。縉紳、公子、廟堂の歷々一座、天下を會し

た淸宴の席に、座に侍つた名妓たちに、おの〳〵元和天正の頃の、傑士、豪將に於ける、婦人の私淑と渴仰と崇拜を語らしめた事があつた。家康は一人もなかつた。が、青竹の采配取、川中島の小豆長光をはじめとして、諏訪法性の兜が出た。遠慮をしたのか、藤吉郎時代の太閤と云ふのがある。深く慮つたのが、蒲生宰相。髮の薄い肥つた老妓が塙團右衞門直之。痩せて、そして工面の可いのは、恐しく捻つて懷刀の佐渡守。さて云ふまでもなく、一座の藝者過半まで、きいさん兄さん長門守重成に、小袖振袖を擧げて、いづれも志を言つた中に、……お新――其の時の照吉が唯一人、襟をつゝましやかに、もの言はず。座中の花形、口を開かせでは霞が晴れぬと、上席の某侯爵が迫つて訊くと、艶麗な顏をあげて、忍返しの竹の月、すつきりと答へたのが、曰く明智左馬之助光俊である。

龍なる哉、湖水の波の、墨繪の法眼元信と、其から渾名になるまでに、其の人柄を忍んだか、知らずや、誰か、一つ背中を撲つて遣れ。板倉の名は光年であつた。

緣は不思議や、其の夜一座に居合はせた、風流一代の俠才子、白鬚に別莊のありしがために、名を水神伯と云つた貴公子が、其の時以來お新を寵して、龍に鳳凰の翼の添へた。伯はわか死して、江月園は、其の別莊のあとと聞く。……

岡釣

二十八

却説、光年の姿が待合葱の露地を出て、一度濱町何丁目か、清正公様の裏あたりの、薄暗がりへ、雨上りの星にさへも見離された體に、とぼんと麥稈の帽子ぐるみ、吸込まれた……と云ふが、何うやら大な穴へ落込んだと言ひたい體裁で。

やがて、下水から吐出されたか、と件の怪しげな縞數寄屋、力なささうに杖を引摺つて、あの、細川家の塀の處へ、夜露に浸んでしよんぼりと出ると、……首尾は不首尾でも酒だけは飲んで居た。——醉を吹かせて川端を悄々行く。日本一、水はたつぷりだ、面を洗つて、はツきりしないか、と言つて遣りたい處だけれども、あゝ此の容子では、俯向くと、滔々たる大川の水の勢に、腑效ない魂を拔かれて溺れて死なう。

處へ兩國橋の方から、電車が濱町へ曲角を、此方へ拔けて一人來る、鼠地に紺の縱縞の帷子、茶獻上の博多の帶、ぎゆうと腰を緊めて、櫂の口斜違ひに結目を切立てて、羽織を疊んで突出した反身の懷中へ、トちやんと入れた。顱の廣い賴朝型と言ふセルの藍鼠の鳥打帽を、被らないで

手に提げて、上背の瘦せた男、爪皮の掛つた日和下駄で、一倍と背高く見えるのが、白麻の襦袢ぐるみ、片手を捲り手に名古屋扇ではた〳〵と、蝙蝠の翼打つが如く、些と寛かつた胸に風を入れつつ、ストン〳〵と日和下駄で、土を蹴ながら、おなじく川端を傳つたのが、道を開いて避けさうにした光年を、行逢ひざまに星あかりに透かして視ると、

「よう。」

と反つて、一歩引くなり、

「こりや先生、」と云ふ時、鳥打をちよん、と被つて、博多〆の腰を捻つて、下から覗くやうにして、頤を突出した顏が、餘程きこしめして眞赤である。

醉つて眞赤なのに不都合は更にない。が、帽子は挨拶の時、脫いで取るのが普通の禮儀と成つて居るのに、此の男のは反對の、會釋をする時被ると言ふのは、……曰くまだ三十の若さで居ながら、總體に毛の薄い處へ、頭の顱がすぺりと兀げた、一筋ならべを、願はくは女に見せまい心掛け、習慣は爭はれず、癖に成つて……暑さに脫いで居たつけが、生醉の本性は違はぬのである。

小齋田儀一と言ふ、故鄕で中學校時代に光年と朋友だつたのが、十年ばかりか中絕えて、ふと此の春頃から知己に成つた。體裁を見ても知れる……第一白足袋に日和下駄でも分る……世の中の酸味も甘味も嚙分けて、都下何某新聞の外交記者と言ふのである。年紀は光年より若いが、坊

さんの兒が坊さん育ちで、下宿から學校へ通つたやうな、ぼうとしたものではない。鑛山にもかつて見りや、貿易も遣つて見る、骨董もひねくれば、書畫も手懸ける、劇通の、食通の、寄席通で、剩へ、色の道の本阿彌で、件の甘酸に、山葵を利かして酒で煮詰めた、と言ふ兄さん、苦勞人だけに五つぐらゐ老けて見える。

一見の藝者酌人、茶屋小屋の女中は申すまでもない事、馴染に成れば、蕎麥屋でも、酒場でも、名刺を出す。其の名刺には所番地と小齋田儀一とあるばかりで、肩書は何も無い、いつも屹と鉛筆で何某新聞記者と、書入れて、「遣らう。」と突出すのが例である。

光年は良い朋友を持つて居た。……戀に味方の欲いのは、其が鬼でも、惡魔でも、況や通に於てをや。

「意氣相投じやしたな。えツへゝゝ、」

と扇子をパツチリ。

「大奇遇、娑婆以來、えツへゝゝ。」とまた腰を曲げて、覗込んで可厭に笑つた。

二十九

「しばらく。」

光年は、隅田の流れに對しても我ながら今めかしや、氣の滅入つた返事をして、

「孰方へ？」

「どちらへ？孰方へ……孰方へは些と何うも、此は早や、聊か御挨拶でおいで遊ばされるものですな。」

と肩を搖ると、惡く切口上で首を掉つて、

「蓋し手前の方から伺ひたいお言葉ですな、えへゝ、參りませう、え、參りませう。爆發して猛進しやせう。如何、大兄、串戲ぢやない。先生、貴方、隊長、大將、閣下、此方へおいでなすつちや聊か方角が違やしませんかね。……えゝ、もし、伺ひますが、一體、火事は何處ですえ。」と夜露にめげず、燥いだり。

此方は洋杖の尖へ水の寄るほど、打沈んで地を視ながら、

「僕は、歸る處なんですよ。」

儀一は眞赤に成つて居る小耳の上へ、其の扇子を翳し、胸を反して、

「故郷遙に下宿をさしてかね、かね、と言はあ、かね。おつしやるもんだ、おつしやるもんだッ。」

と俯向いた光年の頤を、しやくひ上げるやうに、扇子を返して、はた〳〵と煽いで、

「旦那、もし、何うも然う、里心がお着きなすつたやうぢや、お首尾が好くはがあせんな。それ

252011

とも以て、口説ですかい、こりや聞どころとおいでなすつた、いよ、色男！」と、も一つ反る奴。
「形なしさ、今夜は居ないんだよ。」と逢へなかつた宵からの本意なさを、思はずハッと歎息する。
「や、や、や、道理こそ、尤も哉。お氣の揉筋、疝氣筋、遠出の絲のこんがらかりで、凧は火の見の見物ですかね、かね、と何うだ、色男。」
「何だか知れないがね、約束があつて、まだ後口を二つとか受けてるッて、一寸ぢや貰へさうも無かつたから。」
「よ、よ、御全盛、はッはッはッ、姐さんなか〳〵稼ぎますね。目と出たよ。ぱつちりだ。あの容色で、何うもね、私あ發展をしないのは嘘だと思つて居たんでさ。それ豫てより、より豫て、うい奴、これから達引くんだ……これも誰ゆゑ、光ちやんゆゑ、いや、堪らねえな、色男。」
光年の左の肩が、屹と聳えた。
「失敬しよう。」
儀一は、きよろん、と生眞面目に、片手で押戻して、慌しく、
「串、串、串戯ぢやありません、貴方のために稼ぐんです、……私の的なんぞも御同樣に、えへへゝゝ、其處を四錢ぢやねえけれど買つて遣るのが人情ですよ。情婦の來やうが遲いと言つて、口説も食はず、痴話も舐めず、ずる〳〵犬川で歸るなんざ、大學に曰く、則つて以て通のせざる

處なり、逢はずに去んでは此の胸が。」
ポンと敲いて、
「すウまぬ、トテチンと昔からけつかる奴でさ。參りませう、え、お伴をしませう、爆發して猛進しやせう。いざうれ新手が加はつた。敵は川向うとまでもない地續きの平場の砦だ。いで馳向ふ兩人は、佐々木高綱、梶原源太、宇治川の先陣々々。
と扇子を口に横銜へで、自慢の帶腰、獨鈷の刎ねもの。
「やゝ如何に源太殿、御邊と高綱と外に人なければかく申す、殿の馬の腹帶は、以ての外にゆるまつて見ゆるもの哉。此の川は大事の渡なり、河中にて鞍踏返して、敵に笑はれ給ふなよ。――確乎なさいよ、さの、よう、さかほい、どッこいしよ、お腰を抱きましよ、板倉殿、いやさ光年氏。」
「だがね、しかし、……僕は失敬する。」
天下に恐く、此の際、かほどまで、齒切れのしない臺辭はない。男がこれぢや煮つころばしの芋にも劣る。が、可憐、光年は、惹にもまた借が出來た。……小照の來るのを、いつまでも、待合の一間を塞いで、悠然と待たるゝ身なら、何をすねて、何を狼狽へて一人で歸らう。
祝儀萬端行屆いて居た處で、世辭は其の通りに聞けぬもの、いひ通り、「御緩り、」と言はれる

のさへ、婦人の來ないは、ひけめであるのに、杯を壓へようともせず、袖を留めようともせず、……「間に合ふまいね、」と裏問へば、「さあ、何うも、」と女中が先へ斷念めて掛る仕儀、待たうと云つて、待たるゝものか。

光年は悄然として歸つたのである。……

過ぎし後朝

三十

既に過般の築地の待合の時も然うである。當時の小照が采女橋の霜を踏んで、もつれ髪を取上げに、まだ薄暗い朝の門を出たあとで、光年は寐もやらず、寐られもせず、閨に薄れ行く移香を惜むにつけ、後朝の袖を番へた女心の嬉しいにつけ、一人寢の寂しいにつけ、懷中の果敢いにつけ、途中を思ふ塞さにつけ、朝月の影や氷らむ、襟脚の細りと白いにつけ、小枕の切の紅いにつけ、板倉は唯足を縮めて、堅く成つて、頭から搔卷の襟を深々と引被つた。恁うした獸を射伏せるためには、矢よりも鋭い旭である。

然らぬだに、潮の如く日光の流込む、小座敷の肱掛窓の四枚の雨戸をがら〳〵と繰開いて、客

の頭の潛つたらしい見當の袋戸口を、びし〳〵ぐわたんと音をさしたは、衾を取つて引剝いで、起きよ、と言ふに齊しい仕向けで——誰か枕頭の雨戸を開けた。

堪り兼ねた板倉が、睫毛のしよぼ〳〵した、陽に恐れある顏を出すと、頸窪の毛の惡く黑い、つむりのぺろりと兀げた鼻の尖つた、五十餘りで、絲織の寢々子を引掛けた、赭ら顏の澤滋艶のある、でつぷりした——勘定のいゝ客にはつひぞ顏を見せた事のない其の待合の亭主が、寢々子の片袖を、しや、肩を張つた懷手。片手に酒樽の呑口ほどな小さな如露を一つ持つて、肱掛窓に張出しの欄干づきの竹簀子に並べた盆栽に、シヤツと丹念に水を打つ。

しゆつ〳〵續けて打つ、打つては視めて、時々頰を膨まして、ふつ〳〵と口で其の露を吹く。露を吹いては、またしても、しゆつ〳〵と如露を捻くる。

窓を射て、かん〳〵と當る日を、然も肩はづれに斜に避けて、まともに板倉の枕に浴びせる。閨の調度の恥かしや、かくれた色の數々は、湯屋で脫いだよりは露顯で、小枕の房の萌葱さへ、松葉のやうに瞳を突く。

小照の枕を搔込んで、小夜着の袖へ、かくしざまに、板倉は衝と起きた。

起きると、其方を向いたまゝ、亭主は見返りもしないで、「お早うがす、旦那、結構なお天氣で、くわん〳〵破れるやうなお日和だ。」とニタリ笑ふのを聞棄てに、板倉はフイと出た。が、隣も向

うも、別な座敷は、ひつそりと鎭まり返つて、目も口も鼻も無い、海鼠のやうな夜半なのを、うろうろ見ながら、氷の崖を辷るばかりに、足に痛い階子段を厠へ下りた。

手桶の水の機械口は、捻つても凍つて出ない。手水鉢の氷をば柄杓の柄を返して碎いた時、二人が閨の花の雲、霞のやうに舞ふ塵が、一幅段へかゝるのに、無慙やな、まだ後朝の夢のさまよふ、蝴蝶を殺す、はたきの音。

板倉は湯殿の前に立窘んだ。

見通しの廊下を、突當りの格子の開く音、聞覺えた駒下駄は、小照が丁ど歸つた處。——門を閉めると、障子を開けると、急いだ姿は袖が開いて、柳が風に撓ふやう、朝風誘ふ輪飾は、新藁を掛けたやうな、結ひたての藝妓島田。褄前に雪を誘つて、足袋も散りさうに、すつと入つて、入ると心して框の障子を靜に閉めつつ、情の瞳で內の樣子を伺ふのと、階子の下で目を合せた。

目と目がものを言合へば、魂がたゞ歩行くやうに、廊下の中途で跫音もさせず、兩方で一所に成つた。が、男が指す、二階の拂に、唯顏を見合せる、と女の眉がキリ、と成る時、熟としめた男の手を、其のまゝ袖で卷きながら、はや、おくれ毛が二筋三筋。小照がつれて跫音立てて、階子段を上るのさへ、何となく落人めいた。

欞子窓の盆栽を、二人で見たのは、一面の青苔に、蘆の葉の茂を見せて、水盤につくりものの

石燈籠、白鷺を一羽立たせたが、涸々の水に悄れた影して、かゝる旭の眩さにも、いま打つた水は、早や蘆の葉に霜を結んだ。

袖と袖とで〆合ひながら、二人はわな〳〵と顫へたのである。——

こんな思ひをしてまでも、逢はねば成らぬ因緣か、迷はいかに深かりけむ、——河岸をかへた濱町の葱の宿、それさへも此の首尾であつた。

操

三十一

「……餘り、あれだよ、我儘の利く家ぢやないんだから。」と光年は手に麥稈の露の庇を押へて言つた。

此を聞くと、小齋田儀一は、酒臭い靄を鼻で噴いて、

「ですから、ですからさ、ですからさ。其處がでさあね、貴方、其處が融通ぢやありませんか、お互に——融通、……」と言葉も訛る。……肝心な處へ持出した。卽ち融通の所因を說くには、些と手數が掛るかして、息の發奮むほど穴入りを急いでる癖に、扇子で、一つ自分の肩を、ぐいと

押へて、しやつきりと川端へ踞むと、江戸兒自慢の六尺褌に、水を覗かせ、股倉を冷しながら、

「早い話が、さ、私だつて惹には借金がありまさあ、ね、此奴がソレお序で結構なぞと言ふ後生の可いんぢやありません。座敷がぢらりと明いてても、一度お帳場へ通して、通してさね、出がらしの茶で、客の血のめぐりを催促に及んで、暫時無言で、件の女將が帳面を繰つて算盤を彈いて居て、而して、稍あつて、然る後に、辛うじて、女中に頤で指揮をして澁々二階を教へながら、眉毛で電光をさせようと云ふ、三國傳來の低氣壓を、眞暗に目を瞑つて、此方が逆に黑雲の如く、ぐる〳〵舞上らうと云ふ曲尺なんでせう、お互に――可うがすか。」

泥いぢりの指を水に彈き、

「いくら、如何に私だつて、此の頃ぢや、草臥れた按摩ぢやないが素手で揉込むのは、氣が重いんでさ。處でですな、貴下だつて、今夜なんざ、最後の勝利は五分間、……もう一息で情夫はひけ過ぎと云ふ……堪らねえ、や、此の陽氣ぢや、骨も皮も、溶蕩けさうな寸法に成らうと云ふのを、ですな、むざ〳〵歸るのが苦の娑婆、と云ひ條金子ゆゑだ、早い話が。否さ、遲くつても、未來までも、此奴はね。……處を此處でハタとそれ、打撞つた、と云ふのが、勿怪の僥倖。……川端まで歸る、と、小齋田と出會した。此奴が醉つて胸倉を取つて放さねえもんだから。女將、簾に梅はさゝないで、今夜は二度の驅だ、さあ、勘定の木戸を押開け、平家の赤旗、緋縮緬とか

何とか言つて、可笑くなつても空笑ひをして御覽じろと……何んなもんです。極りの惡いことも何もないやね。……そりや、考へて見りや、まあね、貴方は强ひられて止むを得ず、私は止むことを得るのだから先方へ向ける面の皮ぢや、私の方が分が惡いや、厚いだけ。ね、厚いだけ、分は惡いが、其處は、貴方ほど初心ぢやない。――鳥居數より待合の門は餘計に潛つてるから驚きません。……繼信矢面に立つんです、ねえ、大將。」

光年は早口の句ぎりめごとに、突いて劃つた杖の尖を、大きく刻んで、

「何も、君、そんな思をしてまでも。」

皆まで言はせず、

「否さ、否さ。」

扇子の要で壓へて、

「其處が融通ですッてば！……早い話が、お互に極りの惡くないやうにして、繰込まうてんぢやありませんか。」

「だが、もう遲いから……」

ちよッと云つた舌打を、儀一はえへん、と紛らかして、

「あれ、」

中腰に少し伸上る。……

「……遅い、へい、遅いから待合へ行くんでさ。宵の口なら、御會席。待合へ遅いのに些とも不思議はありませんやね、ねえ、先生。」

「それに、何だ、最う此の時間ぢやあ、」

と黒塀を、新大橋のあたりまで、遠き電柱の廣告燈にも、靄暗くして、人影なき、水のたゝずまひを眄して、

「彼これ、一時過ぎたんぢや、……何も、掛けたつて來ないから、」と思餘つてうつかりと、つい、うんのろなことを言ふ。……

「何、來ますよ、大丈夫、そりや何てたつて外ならない。……」

「そりや外ならない、君だもの、君の女は來ようがね。」と、今のはんまの、まじくなひに、光年は拙いこと言つて且つ笑つた。

あせつた相談の乾ぬもどかしさに堪へない處へ、此が耳に觸つたか、儀一は酒の息を冷くするまで、調子をかへて、

「へゝゝ、御自分の照の字だつて、十二時過ぎが御全盛だ。」

「勿論、」と、きつぱり云つたが、魂はどき〳〵と、胸に分銅を搖つたのである。

三十二

「勿論、勿論か、フゝン、勿論は聊か御挨拶だ。」

儀一は殆ど鸚鵡返しに、口を歪めて苦笑で、

「ねえ、自分の首つ丈と云ふ藝妓が、稼は十二時過ぎだと言ふのを、勿論は些と他人過ぎますな、いや……御尤。」と又調子を浮せて、

「其處が貴方だ、卽ち先生、色男である所以でせう。貴方は照の字が、斷じて時間過ぎは稼がないと信じ切つて居る、其が證據さ。……いえ、一寸々々今までにも御惚氣の端に承りましたが、全く照の字はお堅いや、ね、貴方と云ふものに操を立て切つて居るんだから——時間過ぎにや、掛けたつて、とほ出もしない。……勿論、……私も、勿論と此處でいきやせう、爰は一番、ね、勿論、泊は別ですがな。」と妙に、粘々とした唾を吐いた。

「泊は別さ、然うさ、對手が僕の時はね。」

光年も小兒でなかつた。然も儀一よりは年紀が上である。剩へ、事實然う信じて疑はないで居たのであるから。

「へん、おめでてえや、世間に、僕が、うむ、と居ら。」

「居たら、世話をして、もう些と流行らせて遣つてくれないかい。――實際、時間過ぎを稼ぎたくつても對手が無くつて弱つてるんだ。酷く工面が惡いつてね、――旦那が出來りや、……そのおめでたいのが達引かせるから、待合に遠慮をするやうな事はない。一晩のうちに二度でも三度でも、君と一所に引返すよ。」

「お引返しなさいともさ、だから、お引返しなさいッてんでさ。……私なんぞがお世話を申上げるまでもないんだ。――旦那だか、何だか知りませんがね、照の字が惹で逢ふ人は貴方の他にあるんですから。」

「だが、女ぢや駄目だよ。」

「え」と、さすがに吃驚したやうに、光年の顏を視た。

「吉勇と云ふ全盛な女がある。其の旦那の目を忍ぶ、會社員の情人があつて、內證で彼處へ銜へ込むのに、ばれた時の言譯に、小照の客の取卷だ、とぬける分に、……豫て懇意だもんだから、時々、賴まれて呼ばれるんだッて言つてるんだ、……それぢや、ものに成らないぢやあないか。……」

「へッ。」と儀一は、おくびと吃逆を一所にした。

「第一、それだと泊りはしない。」と何故か、言を淀まして裏問ふやうに顏を見る。いまの吃逆が

鉛の如く口を割つて咽喉を塞ぐやうに覺えたのである。

儀一は頤を水に向けて、水馬の如く、くるりと廻つて、

「成程お泊りはなさいますまい。まいが、蚊帳の中にですね、誰かと居たのは事實ですぜ。……二人切で。――否さ、つい此の五日ばかり前の晩です。例に依つて私がしけ込んだと思召せ、上首尾でね。……へゝゝ、暑いとか何とか言つて、電燈を消しの、岐阜提灯の明で顏と顏てッた寸法ね、折からでこそございまさ。下座敷から天井へ羅上つて、恁うね、水を出て咲くつてな工合に、聊か寂いが、ふつくりと露を含んだ蓮の蕾が、ぱつ〳〵と開くやうな笑聲は照の字なんだ。おや、板新道の白拍子、眞ねこで來て居るな、對手は御同役御貴殿に相違ない。時間過ぎだもの、貴方の外に、あの人が巢に籠つてる方はない。……」

じろ〳〵と光年を、額で撓めつつ、

「……沙汰なし拔驅けはお怨みだが、戀にはなまじ同伴は邪魔だ、お互に――とまあ思つて、……私の妓とも領き合つて、(だらう。)(でさあね。)で居たもんです。

處が何うです、些とあちらへ、と成つて、私がはゞかりへ立つた。立つてね、階子段をトントンと下りた、下りると、處で、ハッと思つた。美しさにも竦んだが、堪らなく成つて震へたね。鍵の手に厠と三折の、あれは存じの角座敷さ。あの襖が一枚開いてて向うが突拔けの植込でせう、

貴方が馴染のお座敷だ。――彼處へ蚊帳を釣つた中に、萌葱で掠めて凄いやうな小照夫人の顔が見えます。……旦那の前だ、夫人と言ひまさ、若奥様の姿が見える。醉つたと言ふね、些と着崩れた衣紋附、膝つきでね、可うがすか。」と、そよ吹く川風に逆らひながら、唇を尖らして、汐の如く卷莨の煙を吹いた。

三十三

「色つぽいの候の、男殺しだ、虐殺だ、惱殺、艶殺、慘殺だ。一目見ると生命も要らねえ。」と素首をぽんと叩いて、

「照の字、少々恁う俯向き加減の髻の工合の佳さつたら。――おや、珍しい、深草團扇を模様に染めたのかと思つたね、薄藍色のが片膝にすらりと辷つて、一寸しどけない風采でね、淺葱の麻の葉絞の背負揚の端を細りした頤で手繰つて、解掛けを前歯で銜へた斷末間、此奴あ容易ならねえ所へ出撞した、ハツと立すくんだと思召せ。ぱちん、と肝尖へ響いた音は、青い色の、あの情愛のある紐のついた白鷺の銀金具、見覺えのある滯留で、月で水の輪を描くやうに、裳を卷いて柳が流れる、螢が光つて消えさうでせう。日本一だ、板倉さんは果報ものだ、と私あ息の詰るほど羨しかつたんだ。するとね、へい。スツ、」

と云つて息を吸ふと、片頬をぴしやり我が手で撲はして、

「どしん、づつん、と厠から廊下へ出掛けに、毛だらけな手の、手水を拂つて拭きもしねえで、突如、其の蚊帳へ蔽覆さつた、毬栗頭の大入道、身の丈拔群なればさね、紐のたるんだ電燈の上へ天井まで眞黑な影法師、宛然の海坊主、(長雪隱の間、何して居さるや。)――白鷺の帶留も、照子夫人も、ふツと消えた。」

儀一はそよ〳〵と、胸を煽いで、

「いまの手水の一件でせう、私あ其の跡の廊下を歩行くのに爪立足、えゝ、同じ鷺でも五位鷺だが、小首を傾げて二の足踏んでさ、厠へ掛ると大變。……熟柿の臭氣とも生肥料とも、むん〳〵と蒸れる件の坊主の身體を流れた脂肪の祟だ。

處でですな、豫て聞いた吉勇の情人の連の奴に違ひない、が、其にしろさね、あの、華奢な、纖弱な、照の字が、いきれに蒸れても、生命はあるまいと、ぎよつとしたのに、……何うでせう……植込を向合つて離の小座敷から、笑聲が漏れて(罪だわよ。)とか何とか云ふ、舌つたるいのが、吉勇の正しく聲さね。

――板倉さん、何うです、先生、此奴は默つちや居られますまい。でせう、一昨々日の事なんだ。とりたての、ほや〳〵で、便所なんざ、まだ臭つて居ませうよ、串戲ぢやない……離座敷は

極樂、蚊帳は地獄、私あ廊下で宙宇に迷つた……宙宇にね。」

と、ひよろりと立つて、手と足を川端で、ふら〳〵と振りながら、

「……然も、丁ど今時分。……それ、あの、ぎう〻と唸る濱町を曲る電車のうなりを、機掛に、私が二階を下りたんでね、蚊帳だ、それ、透通る、白い頸だ、白い顔だ、鬢だ、髻だ、おくれ毛だ、膝だ、團扇だ、長襦袢だ、白鷺の帶留だ、腰だ、柳だ、螢だ、消える、坊主だ、手水だ、長雪隱だ、何して居くさる。やあ……おや！」

素頓狂な聲を揚げて、三足ばかり追掛狀に、板倉の肩をつかまへたが、小突くやう——光年が聞くに堪へず、衝と袂を拂つたのに慌てた儀一が、

「不可い、不可い、去つ了つちや不可ませんよ。去つ了つちや、實も蓋もありやしねえ。蚊帳も裙も何にも無いや。嘘ですよ、皆嘘ですよ。……今言つたのは……ねえ、貴方がさ、貴方が不斷から、照の字が、そんな目にでも逢やしないかッて心配をして居るんだから、こゝへ持込んで、それ、ね、それ恁うも言つたら駈込むだらう、と思つたからです。——皆嘘でさ、嘘ですが、ね、先生、ざつくばらんに打撒けた處が、私あ何でも行きたいんだ。葱で飲みたいんですよ、お察しなすつたつて可いぢやありませんか。——私だけぢや、何の面さげても乘込めない羽目ですからさ。おつき合下さりや、こゝに人一人、おまけに妓が、ね、女一人、人間二人助かるんでさ、貴

方も苦勞人だ、ね、おい、大將。」と扇子で背をポン、と叩く。

三十四

此の時ばかりは光年が小兒の拗ねたやうに肩を振つた。

「今夜は御免だ！」

言ひも終らず、

「ちえッ、妬いてやがら。」

儀一が、ぴよいと唾を吐いた。

「何。」

肩を突掛け、すつくと留つて、

「何と言つた、何と言つた、今、蚊帳へ海坊主の蔽覆さつたは、皆、あれは嘘を吐いたんだと言ふぢやあないか。——それが嘘なら、考へて見給へ、僕が妬く筈は無いだらう、——解つたか、……失敬する……」

「ま、ま、ま、お待ちなさい、待つて下さいよ、ねえ、貴方。」

と舌つたるい聲を故として、對手を急がせまいために、又しても、べたりと蹲んで、

「成程、大入道の海坊主は嘘でした、其奴は嘘ですがね、先生、何しろ照の字が附合や、雑魚でなしに葱へ泊つたのは事實ですぜ。……然も對手は、へん、弱つたな。此奴を饒舌つて、氣を揉ませまいと思つたけれど、恁うなりや友達がひだ、打顯けませう。舊派俳優の濡事師、若手の、ね、それ、お心當りがあるでせう、此のために若夫人、あの白鷺の帶留をパチンさ、何うです、旦那、色男。」

「結構だね、俳優を買つて遊ぶ腕がありや大したもんだ。心配する事はない、結構さ。」

「あれ、あれだ。俳優を玩弄にする姐さんとは、體が違はあ、貫祿がよ。不斷、玩弄に成る俳優の方が一本買つて、解かせたり、鷺の羽搔を拷つたり、細長い首を掴んだり、舶來の玩弄にするんだ、飛だ板倉夫人ぢやねえか。」

板倉は杖を犇と取つた。

「小齋田、僕に何の怨恨がある。」

「怨恨はねえ。」

と頭とともに耳を搖つた、取卷損ねた棄鉢で。

「だが、友達效に忠告するのさ、餘りのろまで見ちやあ居られん、お附合申すものの外聞にもかかはりまさ。」

「難有いがね、まあ、禮は言ふまいよ。……御心配には及ばないから。」

「御前、伺ひまするが、」

と頤で見上げた、額でハツと叩頭をしながら、

「御配慮無用と仰せられますると、御臺樣は御前のほかに、男をお持ち遊ばさぬと思召さるゝ儀でござりませうや。」

「然うだ。」

「一寸、先方あ藝者だぜ、大將。」

「藝者だつて、一婦人だ、婦人には操がある。」

「はてね。」

「僕は信ずるんだ。……確に信ずる。小照は決して操を汚さん。」

「おや〳〵おや、」

「君は、濫に、婦人の操を蹂躙して構はんか。侮辱して可いのかい。口の前で、扱帶を解いたり、帶を解いたり、膝を崩さして差支へないと思ふのか。」

「構ひませんとも。處女だつて、細君だつて、未亡人だつて、夕顔棚で戸まどひをしやしまいし、今時操呼はりをする奴があるもんか。ふん、恁うなりやお聞かせ申さうか。海坊主も舊俳優も兩

方とも、皆事實だ。」
「お默り！　君はいま、串戲にも、小照を俺の、僕の、板倉の、夫人と言つたな。」
「言つたが、何うした、のろまめ、手前が其の氣で居るんぢやねえかよ。」
「默れ！　少くとも俺の妻は、操を賣らん。」
「賣らねえたつて、買つた方が確だらう。」
「無禮を言ふな、天に代つて、貴樣たちに蹂躙させない、婦人の操を保證するんだ。」
「アーメン、」
とあはれに唸つて、
「唯、お念佛を唱えてえや。――天に代つて、えッへゝゝ、お星樣が笑つて居ますぜ。人間で間に合ひまさ、早い話が、これを裁判に掛けたら何うです、裁判所でね。」
「勿論、君は誹毀罪だ。」
「アーメン。」
「俺は、法學士だ。職に就いて、立處に、天に代つて、秋霜烈日の裁判が出來る。たとひ口だけなりとも、婦人の節操を汚す奴を棄置かん。」
「吐したな。」と腰を切つて、

「さあ、江戸中、京中、大阪中、……皆聞け、新橋の小照は俺が買つた、小齋田が抱いた。……さあ、恁う言つたら何うしやがる。」
「蹴殺すんだ。」
途端に、立つ腰が、醉に碎けて、蹌踉めいた、と同時であつた。板倉は足を擧げた。が、たゞ德利をつけるばかりに、どぶり、と儀一は水に落ちた。影も殘さず、扇子も浮かせず、丁ど吸掛けて居た卷煙草が轉瞬間、キリ〳〵と赤く舞つた。が、消えると、吸口の白いのの滿潮に漾ふのが、水筋を深く星明に引いて、靑くなつて、戰いて立つた板倉の目には、あはれ其の玉の緒に異るなき、白鷺の帶留の流るゝ如く見えたのであつた。

……

其月其日

三十五

時に更めて板倉が言つた――
「――彼奴が自分で落ちたのかとも思ふ、……大川端の彼處の滿潮と來た日には、岸から水面は

敷居を一足で越すまでの事もない、踵を半分で大川だ。莫に吸着けるより脆いんだから……」

これは勿論、水神の江月園のかくれ座敷に、月更けて、お新と對坐に、雁金の聲の途絶ゆる時、草の葉に露結ぶ間の談話である。

「私は、幻のやうに、あの、鷺の帶留を視ながら、其のまゝ川端に突立つて、夢と言ふより、現で坐睡でもして居る心持で、多時身動きもしないで居たつけ。澄まして大跨に歩行き出した。が、先刻から、全然人通がない。——彼處の交番の前を通る時は、それでも不思議に歩が停つた。一ツ一ツ心あるやうに、瞬く天の星が、人殺しが通る、と其の青い唇を動かして警官を呼んだやうだから。あゝ、星が、其の釦に宿る警官の胸に、私の罪が晃々と映る、と見たが、立つて、身動きもしないから默つて通抜けた。抜けしなに交番の時計を見ると二時だつた。

淺草までずん〳〵歩行いた——觀世音へ參詣をしたんだね。——其夜、決心をして、今の此の勤をしてから、三年、五年、七年の間、何事も無い。……日本は日本で東京は東京で、お前はお前で、板倉は板倉だから、大方、私が蹴込んだんぢやあるまい。

が、責を免れようとは斷じてせんのだ。彼奴が、自分で落ちなければ私が投込んだに疑ひないのだから。尤も、心が凝れば氣に打たるゝと云ふのは、事實だ。氣合に壓されて落ちたんだらう。——勿論、私は其の自己の所爲を、日月の前に憚らず潔矣とする。

暴力、暴威を以て、婦人を犯すものは言ふに及ばん。たゞたとひ口だけなりとも、汚れず、曇なき一婦人を、傷け、亂し、淫し、侵し、侮り、辱むることを公然披瀝して憚らない癡漢は、天、人ともに容すべき奴ではないのだ。清く、貴く、美しい、女の操に、——こゝに操と言ふのは、處子、處女の意味ではない、一夫に對する一婦だ。それも、板倉一個人としての見解によれば、一夫に對する一婦の約束の續いてる中を意味する。……あの時分、お前と私は、其の約束を堅めて居た。……其の女の操に、酒反吐を浴せ、ふん尿を塗らす如きは、卑近な譬喩は、むかし、清冽玉の如き神田上水へ毒藥を流して、江戸中の人の命を奪ふより、より以上の罪惡なんだ。

……一つ其の、毒の無い、玉の如き上水を頂かう。」

板倉は、銚と杯を取つた。

神澄み、骨消えて、たゞ雪に牡丹の魂のみ、月に宿れる風情して、錦の袈裟も蕭條と、髮冷きまで聞入りながら、しかもお新は、銚子を擧げるに猶豫はなかつた、時を經つつも、酒は且つ冷さなかつた、さすが名取のそれしやである。

「恐多いが、法を司らるゝ御方の、然う云ふ奴を罰し給ふ處の規律は別にある。が、私は斬る、首刎ねる、磔にする、蹴殺す、敢て天地に恥ぢない。

彼奴が自ら死んだのより、私が殺したのを以て本懷とする。快しとし、潔とし、寧ろ名譽と

するのだ。

が、しかし、お新……」

板倉は思入つた色見えつつ、然も猪口を擧げた腕は、袖も柳條も自若として、

「唯、こゝに、自ら省みなければ成らない事は、馬鹿が、白癡が、汚し、傷け、辱めた以前に、其の婦人の操の、既に完たからず、清からず、汚れ垢ついて居る場合だ。

他の非をあばく事の、是非、可不可は、別問題として、事實は事實の前に承伏屈從をしなけりや成らない。

言憎いが、彼奴の所謂、海坊主、舊俳優、それが事實あつたこととすれば、最早何も言ふことはない。よし、それで無くつても、大川端で小齋田が、私に向つて、お前の操を蹂躙つた前、私の他に一人でも、ふとした事が有つたとすれば、彼奴を殺した私の行は間違つてる。確に間違つてる。勿論、今言つた通り、それが事實としても彼奴の私に向つてした事は不埒かも知れん、が、それは、人義人道の可否に留まる。私は人殺をして居るのだ。——道德なんぞで論じて居るやうな、なまぬるい場合でないのよ。」

三十六

光年は酒とともに一息した。

「……後の事は構はんよ——恁うして、二度目に私が近いた時は、お前は水神伯の寵妓だつた。——世に其の事は隱れもなし、私も承知の上だつた。——然も最う其の人は世を去つて、お前は單に江月園の經營者、女主人、或意味での未亡人だつたんだ、其は仔細ない。

唯、あの事……」

と、雁の影も透通らむ、あらぬ方なる天井の片隅を仰いだが、

「其の夜の以前を訊きたいんだ。」

更めて言つた。

「お新さん。」

お新が、わなゝくやうに、唯、氣構へて、膝を直して言はうとするのを、偶と慌しく遮つて、

「お待ち、念のために言ふがね、よしんば、どんな事があらうとも、お前に罪はないのだよ。そして私は決してお前を怨む事はないのだよ。唯自分を自分で處決するばかりなんだから、打明けて言つて貰ひたい。

いま、其を危むのではないけれども、既に今夜の綾瀨の毘沙門堂であつた事のやうなもので、何うして、何樣な事で、鷺の帶留を解かないとも限らない。……決して遠慮には及ばない。

もしか、事があつた處で。それは、お前の間違ひではない、藝者には當前だと分けて近頃は、染々然う思ふ。間違つてれば私の方だ。それだけに私自分で、身に處して決すべきことを決しようと思ふばかりだ。

あゝ、しかし、」

光年は差俯向き、

「考へて見れば、お前にも恥かしい。……今はじまつた事ではない。……又、此家へ恁うしてから、今日も聞かう、明日も尋ねようと思ひながら、一日の安を偷んで居た。私は卑怯だつた。可厭に職掌じみるがね、些と本官と成つてよ。」

と碎けて、猫板にぐい、と支肱して、

「私は自分で、自分の罪に情狀を酌量して、刑の執行を猶豫して居たんだ。しても可いと信じた。聊かも疾しくなかつた。

が、模樣によつて、其の猶豫を打切つて斷たうと思ふ——お新さん。」

「先生。」

お新は襟正しく言下に應じた。

「更めて伺ひます。あれは、……其の濱町河岸の夜中は——八月ツて事は覺えて居ます。……幾

日の夜だつたでせうねえ。」

「確に二十七日と覺えて居る……」

と、星をうかゞつて仰ぐが如く、彼が指をかゞなふ時、婦は、片手に襟を引いて、つまさき白く袈裟の錦の綾を數へた。

「七年に成りますね。——二十七日……」

「……確に、其の後で、然も思ひがけなく、伊豆からお前の手紙が來たんだ。……」

「其の前方、たしか十日ばかり、お目にかゝりませんでした。」

「十一日。」

「あゝ、十一日の間、然うでしたつけ、……忘れて濟みません。」と言ふ聲が震へて聞えた。

「先刻も一度言つた通り……それからと言ふものは。」

「もう……生命さへ絶えたやうに、兩方で、五年と云ふもの逢ひませんでした。一日逢はねば千日と唄にさへ言ふものを、……」

と、墨染の袖に、顏の、月の雫をほろ〳〵とうけて、

「五十年とも思ひます。板倉さん。」

お新は凛とした顏を上げて、

「其の間に、新は一度、死んで了つたと言ふ事を――あの、時、土肥の歸途に、眞鶴の沖で、汽船と汽船が衝突して、其の時海へ落ちて、世間の風説でも、新聞でも、死んだ數に入つた事を忘れないで下さいましよ。」

と熟と視つつ、

「それから何年ぶりだつたでせう、花川戸の雨の横町で、鬼火が逢つたやうに、宵やみでお目に掛つて、何とも口が利けないで、（私はお新……の妹でございますよ、）と言つたのは。……」

邂逅

三十七

それには恁うした事がある。

秋雨の晴間であつた。……宵月の無い點燈頃の、不思議に靜な、敷石の廣いのに寂しい銀杏の樹の影の映る淺草觀世音の境内で、番人は最う引取つたが、いま汲んで湛へたやうに、つら〳〵と水の滿ちつつ清い、あの石の大手水鉢に立つて手を清めて居た一人がある。

中折の黑の帽子を取つて口に銜へたまゝで、袂から新しい手巾を出して手を拭ひながら、斜に

正面を仰いだ時、薄霧の掛つた一座峰の如く早や扉の閉つた御堂の階、向つて右側を半ば下りかかる婀娜に品の可い姿があつた。

傘の柄を、しつとりと袖に壓へ、襟脚白く俯向いた、片手に褄を取るやうにした内端な褄捌きに、蹴出しのはづれも芙蓉の花を提げたやうに媚めいたが、華奢な撫肩の黑縮緬の紋着は、墨繪の松の濡れながら、霧をはら〳〵と溢れた風情で、下りると丁ど、一むら雨……さと地にもつかず掛るのを、トンと開いた蛇目傘でうけて、其の羽織の袖を柄に絞ると、片袖を胸に合せ、夕雨の艶に棟のたら〳〵と明く、地の暗く、裳の煙る黄昏を、眞新しい足駄の爪皮透通つて、御堂の縁に縋るが如く、やがて立離れて、スツと第二天門の方へ通る。

唯見て、うつかり口にした帽子の縁を落さうとしたのを、手で受けて、一寸、身を開いて御手洗の柱を楯に、うつくしいものの精の、其の朦朧とした後姿を見送つた。が、ついて出ようとして柱を廻つて、偶と心着いたか、其の柱に手を留めた。

直ぐに本堂に向つた男の、しかし階の上下は些と慌しかつた。

同一方向を、仲見世に外れて、矢張り第二天門の方へ、海の夕陽の餘波に似た、雲の下に流るるばかり、奥山の電飾の、紫の波を遙に見て、やゝあつて、門を出たのである。

日のとつぷりと暮れた時、同じ男は、奉公口に迷つたと云ふ形で、花川戸の唯ある横町の宵や

みの、灯も四つ五つ、三辻の處に、とぼんとして居た。
雨も小やんだので、袖を包まうともせず、あからさまに立ちながら、氣も心も姿も暗いものであつた。
ざぶり、と音して、びしやりと地へたゝきつけるやうな一幅の水が逆つて袖から裙へ、びつしより掛つた。
はつ、と思ふと、出窓がある、まだ夏のまゝらしい古簾の陰に、白い前垂を掛けた若い女が、癖直しの眞鍮の盥を持つて、鼻も突合せさうに立つたのが見える。縞、絣、緋のこぼれた裾、膝が並んで、鏡臺越の解毛、すき髪、壁の柱に立膝して新聞を讀むものもあり、髪結の家の前。
彼が身を引かうとする横顔を、パツと打つて、頭から肩へ浴びた。
「あ、」
と思はず云つた、鹽花である。
「何が何うしたと？」
のつそり椅子を離れて出て來た印半纏は下足番で、一方の其處は、色硝子の五色に燈を入れた湯屋であつた。
あゝ、惡い處へ立つた。

「鐵さん、其奴だよ。」と格子から、其の梳手が、まざ〳〵と盥を持つたまゝ聲を掛ける。
「何處から、のたり出した蛞蝓だい、陽氣は惡いや。」と下足番は、眞暗な雨天を見て、嘯いて臀を敲いた。
「何うした。」
「なんだ、何だ。」と二人續いて、職人らしい湯上りが、門へ出た。
「はゝあ、髯の生えた蛞蝓だな。」と角刈の其の一人が、顏を覗いて、くるりと素袷の尻を捲る。

三十八

「面を見せろ。」
二軒先の建具屋からわざ〳〵出て來て、前へ廻つて腕まくりをしたのがある。
凌辱されたる男は、中折帽を取つて、鹽を指で彈いて居た。……其のまゝ出ようとする端を建具屋に彈かれたのである。
「待て。」
向かはつて行かうとすると、下足番が立塞がる。
「手前のやうな汚れた奴をな、唯歩行かせて歸すもんか、箒で掃いて掃出すんだ。」

と職人の一人が言ふと、角刈が、
「おい、お正坊、箒はねえか。」
「あいよ。」
新聞を讀みさして覗いて居た、赤ら顔の銀杏返が、高箒をぬッと出す。
「火箸で挾め、火箸で挾め。」と怒鳴つたのは、髪結の隣家の、下駄の齒入屋の、中親仁。
で、顔を見られまいとして、犇と中折を握つたのを横顔に押當てたまゝ、前後左右を取卷かれて、籠目々々の鳥のやうに成つた時には、無慮十四五人、押被さつた狼藉もの。岡持を提げた天麩羅屋の若い衆に、宮戸庵の提灯で、蕎麥屋の擔夫さへ立停つて騒いだのである。
霞のやうに雨が掛つた。
「やあ、俺たちが濡れねえさきに、一杯浴びせて清めた上で突放せ。」
「おいしよ。」
と胸を敲いたのは米屋の丁稚。鑄掛屋のすばやい小僧が、バケツに水道の栓を捻つた。
「花川戸を。」
「やい。」
「知らねえか。」

「土百姓。」
口々で。娑婆氣な齒入屋の中親仁が、故と持つて出た鐵の火箸を尻下りに三尺へ挾んでかゝつて、バケツを取ると、串戲ではない、いきなり覺悟した人の身を棄てた狀なる肩の上へ、ト引傾けた時である、……其の手を丁と壓へた白魚の指がある。途端に角刈の振被つた箒尖を、雪なす手首、友染の袖口は、色ある木の葉、雨に散りつつ、幻に飜ると、小腕白く、開いた蛇目傘でさつと受けた。
「何だ。」
「阿魔！」
と云つた切、隅田のぬしが立姿、思ひも寄らない美しさに、一同が呆氣に取られた。
「御臺樣さ、伯爵の。」
しやんと取つて、眞直にさしながら、
「貴方。」
と言ふ聲の下に、男は人形の如くすつくと立つて、蛇目傘に合す袖と袖、婦の紋の雁金結びに、紺は夜の霧にして、雲脚靜に、ものをも言はず、雨にすらりと歩行出す。
「湯屋から出たのか。」

「違ふよ。」
「華族だとよ。」
「別荘のか。」
「いづれな。」などと毒氣を抜かれた、別に主親の敵ではない町内が、眞顏に、まじ〳〵と言交して、兩側の軒下へ、ばら〳〵と雨を避けたのである。
蕎麥屋の擔夫が、尻尾は無いか、と透かしたさうに、提灯赤く道を照して、少し離れて背後から、差着けながらのそ〳〵とついて行く。
辻を曲つて町を越した、が、二人は一言も口を利かなかつた。男の手が無言で傘の柄に掛つた時、渡した其の手で、婦は男の羽織の袖を取つたのである。
やがて婦が導いて、濡色の美しい、八百膳の飛石を傳はつたが、まだ口を利かなかつた。
「夢ぢやあるまい、——お新さん。」
其の板倉が、沈んだ、重い、掠れ聲で言つたのは、座が定まつた後であつた。
「まあ……先生。……私は新の妹でございますよ。」
雖然、姉でなければならない。威が添ひ位が備はつた——お新は其の時、既に新橋に抱妓を持つた姐さんで、兼て江月園の主婦であつた。——別れて居たのが丁ど五年、めぐり逢つて、いま

こゝに二年に成る。

……

鷺の帶留

三十九

「先生。」
お新は容を更めて、
「……よく分りました。永田町のお宅のお座敷の床の間に、軸物も、花も何にもお置きなさらないで、絶えず、お茶碗に水が一杯据ゑてございますのを、婆やも知らず——貴方にうかゞつても、少し仔細がある、とばかし仰有るのを、あゝ、罰の當つた、……もしかすると、私があの時、水で死なうとしたことを、お忘れなさらないで、何の飾にかへても、私の生命の助かつたのを喜んで下さいます、其の記念ぢやあるまいか、と思つて、蔭ながら私も——御覽なさいまし、お目に掛けます。」
立ちつつ板倉に背を寄せて、佛壇の扉を開く、と名香籠れり、馥郁として電燈に蘭の薫が通つ

た。

肩越に振向くのと、見交す顔を見合せながら、

「……私も兩親の位牌の前に、一日も缺かさないで、紅猪口に水を汲んで置きました。ですが、今夜伺つて、はじめて其の次第が分つたんです。雖然、思つて居た其とは違つても尙ほ嬉しい。貴方は私のために、操のために、生意氣ですが、此の新の名譽のために、儀一を殺して下すつたんです。――えゝ、お殺しなさいましとも。……私のために人を殺して下すつた事を存じた上で、恁う申します上からは、私も屹と考へた事があるんですから、憚らないで申します。小齋田が、機勢で落ちたのでなく、貴方が蹴込んで下すつた方が本望です。

取るにも足らない男ですから、あの時分、何にも貴方には言ひませんでしたけれど、失禮な、隨分手をかへ、品をかへて、陰ぢや私に、嫌な、いやらしいことを言ひました。……其のこだはりも有つたんでせう。――自分の事でないまでも、大切な女の膚を、人手を借りて、海坊主や、俳優の身體で汚したのは、口だけだつて、手込めにしたも同じ事です。

貴方が、私の操をお信じ下すつて、辱めるものをお殺し下すつたのは、自分の生命を助けられたより尙ほお嬉しい。おなじ思の世の中の婦人にも成かはつて、身にもかへ、生命にかけて、兩親の位牌の前で、更めてお禮を申します、難有う存じます。……先生。」

威儀を正して、お新は端正と手をついて頭を下げた。

「いや、何ういたして、……」と確と言つて、力ある手を思はず、其の肩に掛けた、が、袈裟に觸つた。……猶豫つて、其の手を引かうとしたのは言ふまでもない、唯、肩を辷らし、身を捻つて、袈裟を外して、佛壇に掛け狀に、引く手に連れつつ手を添へて、じりゝと寄つて、お新は板倉の膝に縋つた。

「先生、未練なやうですが、まだ懺悔は出來ません。……否、祕すのではありません。が、大切な、今のお言葉のお返事は。」

「返事は？」と肩を抱く。

「最う一度、……今度、もう一度、お目に掛ります時まで、何うぞお待ちなすつて下さいまし。」

「……」

「……あの時、……實は花川戸でお目に掛りました時も、其の人の居所が知れさうだつたので、淺草へお參りした上、あの邊を探して居たのでございます。――私には身にも生命にも代へなければなりません、恩人が、もう一人あるんです。……藝者です、姉さんです。……照吉と云ふ名を讓られた人なんです。――行方はまだ知れませんが、ふとした事で、つい近頃、其の姉さんのわすれがたみの娘御の所在が分つたんです。其の娘のために、少し見てあげたい事が出來て居ま

す。私は今生命が二つ欲しいんですよ。」と縋り付いた目をふせて、男の膝にはつと伏す。
「夫婦だ。……一つは此處にある、二つ欲しい、一つの生命は、此處にある。」
板倉も、戰いた。……
「祕さずに言つて可い、此の生命一つは、お前のために使つて遣るんだ。」
「否……否……」

四十

お新は、おくれ毛を拂ひながら、男の顏を瞻つて、
「まだ私は、私はまだ、何とも言ひはいたしません。——濱町河岸の、あの、其の時の前に、私の身に過失も不都合も有りさへしなければ、貴方が御自分で御自分の身をお責めなさいます事は無いのでせう、えゝ、先生。」
「私は憚らず、無論と言ひたい。」
「然うすりや、私に不都合さへ無ければ、二つ欲いほどの生命が一つだけでも足りるんですね。」
「だから、其の曇のありなしを、私のために、何の憂慮も、遠慮もなしに、無條件と云つた格で、明かに話して欲しいんだ。」

「さ、其のお返事です、が、もう少し、それを、猶豫して頂きたいのでございますわ。」
「今夜、待てか。」
「否、明日も、明後日も……」
「ぢやあ何時だ。」
「卑怯ではありません。私が、今申した、恩人のために爲なければ成らない事がございます、其の事の果てますまで……」
「然うすると、其は？」
「今度お目に掛ります時、潔く。」
潔く、と言ふ、略其の間の消息は以心傳心に默會された。
板倉は決心した色を見せて、
「ぢやあ、其の時、其の日はお前から、私に知らせるね。」
「えゝ、その折には、私がお知らせ申しますから、山なり、川なり、場處を擇ばないで、お逢ひなすつて下さいましよ。」
「船でも構はん、——誓つた。」と言つて、居ずまひを、きちんと直して、搔卷を拂つた。
「それまで、逢ふまい。……すぐに歸る。」

お新は膝を反らしながら、墨染の法衣の帶を解いた、パッと長襦袢にさす燈は、花野を照す殘月に、色は虹の如き其の搔卷を、胸に掛けて、熟と抱いて、

「でも、今夜は――」

「……」

「否、私もお歸し申さうと存じます。――貴方、お杯を下さいまし。」

やがて、簞笥を開けて、お新は衣を調へた。法衣を解いたのは此がためで、そして、しばらくの別れに、麹町永田町の三部谷まで、同じ車で、途中を送らうと云ふのである。

柱の呼鈴の釦をおすと、お勢が來た。白足袋の白さも褪せず、此の時刻に、江月園の女中は、しやんとして居た。

「玉が降りさうな良い夜だから、月見がてら。」

自動車を――

お勢があつらへに下りた間に、お新は佛壇の小抽斗から、別に、白紙に包んだ、帶留を出して、うつむいて、熟と視た。

「海へ沈んだ時、――髪はすら〳〵解けましたが、帶はメつて居て、私より、此の白鷺が水の中に輝いて見えたさうです。……其を目當てに助かつたんです。」

金具が緊る、と颯と姿に、顏を掠めて蒼味がさした、紐も藍より蒼かつた。

お勢は籠行燈を提げて、尾花の露の中を送つた、水に濡らしたやうである。

「御機嫌よう。」

ひらりと臺にのる助手の影は、空から鳥が下りたやうに見える。

隅田の水の絹漉に、玉を灌いだ萩の花、流るゝばかり月清し。

「品のいゝ奥樣、立派な旦那樣――まあ、夢のやうな。」

おつと胸を抱いて見送つた、お勢の姿も、薄い霧。土手を行くのが白々と橋のやうで、流につたふ、自動車の響も、音も、宛然銀河を漕ぐ、雁を蒔繪の船の、楫の聲か、と聞えたのである。

寶玉商

四十一

「玉や、玉屋……」

麹町永田町が、山王臺へ一度崖に成る、三部坂上の學習院女子部の煉瓦塀について右へ曲る、一二軒大溝の邸と、武者窓も昔のまゝの四五軒の長屋がある。人通りのない邸町の三時さがりの

良い天氣、小春日でほか〳〵する、が、最う片影の染みた日南を拾つて、はら〳〵と咲いたこぼれ種のコスモスと短い影を較べながらスイ〳〵飛んで羽の光る赤蜻蛉の眞赤なのが、眩しさうなしよぼ〳〵目、ごま鹽の眉が濃く、鼻の隆いのも氣恥かし、古手拭の頰被り、皺だらけの腹掛に洗ひざらした千筋の單衣、薄汚れた唐棧柄も繼々の半纏を引掛けて、冷飯草履でも可いものを、克明な草鞋穿、蚊脛の尻端折。挫げた鐵葉罐を襷からげに肩に掛けたが、大小の管の束、こればかりは、篳篥を斜に構へた形に取つて、體を極めつつ、太管一本喇叭銜へに、悵然として天を仰いだ。

「評判の玉屋あ。」

唐辛子の利いた、皺枯聲。七十に近かりなむ小造りにして、萎びた親仁。腰を捻つて一つ振つて、のそりと廻り狀にストンと片足づゝもつさりと運びながら、

「評判の玉屋ッ。」

日射は好いのに、虹を刻んだ千變萬化の球をば吹かない、小兒の寄りが影一つ無いからである。女子部の前の三部坂を、折から裙ばかり媚めかしい、大島の書生羽織で、堅氣づくりの藝者が下りると、向うの坂を、ダリヤ擬ひの二人連の女學生が上つて行く。が、松も杉も寂寞して、崖には烏瓜が遙に紅い。……また妙な處を商ふものがな。

「玉屋、玉屋、玉屋。」

あゝ、冬だ……ぱつと日をうけた黃色いのが、薄もみぢを誘つて、カラ〳〵と舞上ると、吹溜りの落葉が誘はれて、波を打つやうにパラ〳〵と駈廻る。

前途に鎖したまゝ、礎に蔦の搦んだ、森とした裏門の前で、それ、舞立つた木の葉が、からからから、はつと同じ處へ落留まつて忽ち、寂と成る。あれ、人間が來た、と言ひさうに。——一枚はずみ過ぎて中途の蜘蛛の巣に引掛つたのが、慌てた體で、のびたり、縮んだり、カサ〳〵と搖れて居る。

「玉屋、玉屋。」

唯、親仁の前を、二三間前へ立つて歩行いて居た一人が、木の葉に立留まつた足を踏留めて振返つた。——町を行くのは唯此の二人であつたが、——それは、上下質實な結城の揃に、白足袋で雪駄穿。おなじく小造りだが小肥りに肥つた、剃たての頤の青い、鼻のまるい、眦の下つた、莞爾やかな五十ばかりの年配、インバネスを肱に掛けた下に、黑の鞣皮角形の鞄を下げて居た。肉色霜降と云ふ鳥打形で、廂が顎の如く突出た帽子の下で、目皺を寄せると、玉屋の親仁の薄汚い顏を見て、

「やあ、」と云つて、いきなり唐突に高笑ひした。

「あはゝゝは。」
はてな、此では挨拶をせずば成るまい。親仁も、しよぼ〳〵目を細うして、
「えへゝゝへ、」
何の事だい、雙方知己でも何でもない。
「好いお日和だね。」
「へえい、申分のないお天氣でございますよ。」
「何うだね、景氣は。」
「否、もう、何うもはや。」
「……と云ふと？」
「恁やうな結構な、お天氣を頂きます、今日様に對しましては、不足がましう申すも如何でございますが、何分諸式高値でございますので、ひどいものでございますよ、旦那の前でございますがね。」
言ふ手で、腰の二つ提の煙草入を掴み〳〵、うつかり蘆の管を落ざしに持つて行つて、一服捻り込まうとして、心着いて、唯、傾いて、きよとんとするのと、兩人が顏を見合つた。
「えへゝゝへ。」

「あはゝゝはゝ。」

四十二

茶無地の男は、認印つき黄金延の指環を嵌めた手で頤を壓へて、笑を咽喉へ揉込みながら、
「はゝゝ、矢張り可笑い、はゝゝ、いや、串戲ぢやないよ、はゝゝはゝゝ。」と又笑ふ。
「えへゝ、えへゝゝゝ。」
今度は親仁が苦笑。
「はゝはゝは、馬鹿な、大人氣もない。――何、お爺さん……と云ふほど此方も若くはないが、……お前さんのお商賣がお商賣だから、對手は小兒だと思つて堪忍しておくれ。……さあ、最う構はず商ひをはじめて下さい、……飛だ何うも邪魔をして濟まなかつたよ。」と人柄に會釋する。
「何の、旦那様、變に陽氣がとろんとして居りましてね、日南で狸にでも魅まれさうな氣がするものでございますから、魔よけに心づいた賣聲を遣つて居ります。こんな處で、もし、商があらうとは思ひません、――惡く、ちよろ〳〵と小僧でも出て御覽じやし、溜池は近し、河童としき
あ思へませんでございますよ。」
「すると此方は、大柄だから狸の方だ。」

「御串戯を。」
「其處で二ツ玉だ。」
「玉や、玉やッ。」
「それだよ、爺さん。」
「へえい。」
「まあ、歩行きながら饒舌らう、實はね。」
「何か、道でもお迷ひなさいましたかね。」
「いや、直き其處の御殿へお目に掛ける品ものがあつて。——これから溜池へ抜けて一軒用たしをしようと言ふ、實は……私は銀座邊の寶玉商だよ、玉屋だよ。」
「やあ、あの名代の。まあ、へえい、」と腰を屈める。
「何も銀座邊の寶玉商と言へば、名代とも限らないがね、……それ、だらうぢやないか。——背後から、玉屋、玉屋。」
「はあ、」と、こけた頬邊を窪まして、
「これは〳〵、飛だ失禮をいたしました。」
「いや、それこそ飛でもない、詫は此方から言ふ事だが、……しかし不思議だつたよ。……目の

寄る處へ何とやらぢやあないけれども、まるで人通りのない折だらう。崖の下へ谺がしさうに、玉屋、玉屋、あのさ、すぽん〳〵とした奴が、ふは〳〵背後から打撞る工合が、首筋を卷いて臍へ當る、氣味合と言ふものは、何とも何うも堪へられない。返事がしたくつて〳〵、つい、おい、と出さうでね、其を堪へるうちが堪らなく尙ほ可笑い。」
「へゝゝ、否、可笑いで持つたものでございます、谺を返して、玉屋、玉屋。旦那が玉屋。三部谷の崖上と……此奴が不氣味だつた日には、それこそ此方が狸の化けたのでございますよ。」
「雙方、狸で和睦しよう。」
「玉屋、玉屋ッ。ほい、うつかり遣つた、御免なさりまし。」
「御禮を申すよ、可い廣告だ。」
「評判の玉屋引。」
唯、通りかゝりに、
「はゝあ、墨西哥公使館——」
「南米熱地のお代官樣でございますね。野原や、谷に、金剛石や、紅い玉、旦那のお商賣品が、晃々ところがつて居さうでございますねえ。」
「然ればさ。」

――遣過ごすと、蜘蛛の圍にかゝつて居た、木の葉が一枚スッと落ちた。下に散り敷く黄色なのが聲を掛ける。

「分つたか。狸か、狐か、何だ。あの、變な親仁は？」

「狸でない、あの、親仁はの。」

一枚、偖は怪我で引からまつたのではなかつた、高い所で斥候をしたので。

「あれはな、岡澤甚十郎と云うてな、深川の冬木町に居るところから、渾名を柊の爺さんと言ふ。……」

「あゝ、探偵だ。」

「探偵だ。」

ばら〳〵と八九枚、くる〳〵と舞ひながら、

「何をするやら、人間はをかしいぜ。」と、また、ぱらぱら〳〵。

石垣で、えんま蟋蟀が、グウと鳴くと、舞立つたのが、颯と敷いて、散しづまつて、寂寞した。

四十三

「やあ、鰌屋が居る……」

と、石鹸球の親仁は、言ふ其の、鰌を狙ふやうな、跳躍とした空脛をのつそり留めた。

「鰌屋か。」と寶玉商も前途を見て立留まつた。

「處が、もし、あれがね、たゞの鰌屋ぢやございませんよ。賭將棊が本業でございましてねえ。諸々方々、素人連の天狗の巣を搔廻して、飲代を稼ぐんでございますよ。御覽じまし。……彼處に天秤を踏跨いで、笊の上を睨んだ處は……何をして居ると思召します、……一人で稽古工夫をして居る。いやさ此だから叶はねえ、旦那、爺もね、番太郎仕込みぢやあございますが、大の横好きでございましてねえ。」

「おや、爺さん、妙だね、私も好さ。」

横手を打つて、踵を爪立て、腰を捻つて、

「奇妙々々！　一番からかつて遣りませうよ。あれ、此處に人聲のするも知らん顔で、釜底帽子を眞黑にして遣つて居ります。何うでございます、え、先度の暴風雨で、崖崩れに谷の底へ石を流したのに、白い雲で瀧のやうに見えます尖端に陣取つて、峰の仙人と云ふ形だ。森々として、山王の山聳え、空々たる青空に墨西哥の煙突の立つた工合は、唐の奥山でございますが。」

「然ればさ、彼がもし碁だつた日には、私たち斧の柄の朽ちる處だ。」

「斧の柄どころでございますかね、此方は七日分の稼高を棒に振つて驚きましたよ。――四谷の

谷町邊の經師屋の店頭に、界隈の天狗たち、中には鼻の赤い髯の白い大山伏なども交つて、羽團扇の鎬を削る、合戰場がございますがね。爺もよく此の蟹の横這に泡を立てて立見を遣ります。

一日も通りかゝりに寄つて軒下で覗きますと、前の大溝の板の上へ、天秤を掛流しにして、あの仙人どの、店頭に猿のお腰掛だ、草鞋をのめずらして、大胡坐で、おつと後王手、などと勝に乘つてさして居ります。お次は、お代りは、と云ふ掛聲。五六番ばた〳〵と撫斬に舐めました。こに洒落た奴は鮨でがした。坂町の坂なりに荷籠を引傾げて戰酣と成つたので、夢中と見えて氣が着きますめい。小によろ殿、ぴち〳〵と刎ねながら大溝へ、ばちやん〳〵。中にも人を食つたのは、笊の底から一度、枡の上へ、乘上つて、此奴を踏臺の、然やうなら。」

「はゝゝはゝ。」

「へゝゝへゝ、否、笑ひ事ではござりません。——其日は見ただけ、が腕が鳴ります。中七日ばかり措いて、不圖、芝の片門前を、のろつきますと、横町の床店の前に鮨屋の荷が見えます、臭で分る。」

と鼻を指し、

「はてな、と覗くと、姿見裏の薄暗い處へ、とつちりこと上り込んで、大胡坐で戰つて居るのが曲者でございますのさ。手並は知つたり、覺えあり、で、冷たい懷中とともに武者震に及びながら、親方御免なさいまして、のそ〳〵入込むと、好な道は格別で、お花見づきあひでございますよ。

此處は又山ばなれのした、鰤に沙魚にちん〳〵海津、手長蝦などと云ふ雜魚でも活の可い職人徒が、大分釣られて鰓鰭に痛手を負つて、あつぷ〳〵。

さあ來い、龍宮から鮹が出たぞ、和田新發意、これにありと向顱卷で名乘掛けましたがね、ふくみと云ふ槍の手一つに突崩されて、一度は敗軍。二度は入王、三度の勝負に討死の空財布。

今日は扨て、思懸けない、いゝ處で弔合戰、これでこそ炭團を嚙つて口惜がつた効があります、旦那、お好なら御見物なさいまし。」

「おもしろい。恁う言つちや、何だけれど、さしたる金高でもあるまいから、……飛んだ商の邪魔をして、一杯買はうと云ふ處を、私が兵粮を承らう。勝なら可し、敗けても氣丈夫に戰ひなせえ。」

「はて、祝着。」

と額を叩いて、

「德川家康兵粮入れのお味方だ、さあ、恁うなれば、あれに見えるは天目山で、勝賴影が薄うがす。名のり掛けて打取りませう。」

と蘆の管を筈高に、征矢の構で、づか〳〵と乗出しながら、
「やあ〳〵鮨屋。」
「おや、宗桂法印か、やあ、これは。」と手廂で、眉を擧げた一漢子、犀の目、豹の額なる、渠は猪村大八である。

四十四

「待つた、待つた、先づ待て、大將。」
矢合せやがて果てた時、石鹼の親仁は、古手拭を熊の皮の敷物めかいて、石垣崩の切石に、痩蟹の身構へで、千筋段々繼の鎧の絲に張肱なし、盤面をづらりと見て、氣競の聲を疊み掛けた。
……
「いや、一騎打に待つたなし、と其の待つたでは決してない。が、然りながら……待つた待つた蛇に成つた、いや、蛇にあらず龍なり、と恁う飛車が成つて見た處、此の一番、天王山は最早や、これ味方のものだて、……其處でだな。雜と此方が勝利として、尊公、時に何と、懷中は確でござらうかの。何々、人事ではない、みだりに其許を侮らぬ、と言ふものは、鮨屋と、しやぼん球だ。いづれも懷中は泡と來て居る。處を今日に限つて、此方には、此の旦那が兵粮方について居

て下さるわ。……權現樣味方と思へ、蝙蝠の五個や敷島の十個はおんでもない。が、其許は？……もう、やがて、それ走りが出る、いざ、と言ふ時、蜜柑では興に成らぬ、で、前以て申入れる。さ、櫓圍で籠城の御軍勢、返答は何と〳〵。」
「吐すな、土佐坊。」
と鮨屋は、反を打つて、呵々と仰いで笑ひ、
「判官に向ひ推參な。今此の飛車を成込ませたは、一度、起誓文を認めさせて、五條の旅館へ追返した處だ。忽ち横押の辨慶が角の大薙刀に掛けさせる。勝負は言ふがものはない。既に、勝つことに極つて居れば、手品ぢやなし、懷に種と仕掛は要るまい。」
親仁は、あつと口を開けて、
「それ、言はぬ事ではない。初手から卷藁なら其にもせい、金的を掛けて置いて、いまさら外されては砂に成る。……引絞つた、此の鷹の羽の矢に對しても恥かしい。勝負は、一先づ見合はせかい。あ、」と云つて嘆息する。
「しばらく。」
と寶玉商、銀座の旦那の綺運堂が、傍目も觸らず、呻つて視て居た顏を上げて、吻と息して、
「む、、成程、確にこりや將棋で身代を崩した人たちだ、いや、感心。雙方これは强兵です。……

…爺さんの今の飛車の成込みは、信玄が軍を分つて、先手を取つて押懸つた處だよ。然に謙信、西條山の頂に、床几にかゝり小手を翳し、遙に川中島の空に當つて、二條の煙の立騰るを視て、むふゝ、あはゝと片頬に笑み、——いや、時に其の二條の兵粮だ、失禮だが、鰌屋さん、何、輝虎どの、はゝゝゝゝ。君が負けても、矢張り其の兵粮方は、私が承らうではあるまいか、……心得たよ。賭つこと云ふより、雑とまあ懸賞のつもりでね。可いかね、一騎打の勝負をなせえ。」

「天下太平。」と親仁は再び額を敲いて悦に入る。

鰌屋は、ひしやげた帽を、兜に取つて、一揖して、

「旦那、此方等風情が、何もね、思召しが何うの、趣意が恁うの、とお言葉を返すんぢやありませんが、負惜みかも知れないけれど、負けても金主があるんぢや、何だか勝負の氣が抜けますよ。負けたら矢張り此の身の皮を剝がれねえんぢやあ……」

「潔い、一理あり。」

「これ、落武者でも鎧は有つた、……尊公は、戰の最中、兜も鍬も無いではないかい。」

「待ちなよ、爺さん、俺が勝と極まつてるから懐を洗つて見せたが、不安心なら、たしなみの鎧櫃をお目に掛けよう。蜀江の錦の陣羽織——それ、何うだ。」

と天秤の其の片荷、鰌の笊の一方に伏せた莫蓙の蓋を、掻拂へば、艶に、媚めかしい婦一人籠

つたやうな、小袖の窈窕、帶の端麗、羽織の婀娜、解けた扱帶も、見るからに得ならぬ人膚の薫して、留南奇が颯と朗な空に散つた。

龍女の寢衣

四十五

三保の松に掛けたと云ふ、それが天人の羽衣だと、鰌の笊に潜んだのは龍女の寢衣に相違あるまい。蔽へる莫蓙を拂つて視せた其の香、其の色、其の艶は、蒼穹に虹を呼んで、裙を曳いて、すらりと目前へ立ちさうで、親仁と、旦那は、驚いて、將棋を忘れて、煙突の、墨西哥の空を仰いだのである。

「何うだい、爺さん。」と鰌屋は頤を撫でて空嘯く。

親仁は膝の上に頬杖して、首を掉つて、フンと嗅いで、

「これ、尋常事でない！　正體は三卷半、其の色めいた、其の意氣で上品な帶の長いのが、羽織に小袖で、する〳〵と動出すかい、下の三部谷は立處に渦を卷いて淵に成らう。」

「當つた。出所は向島水神の片ほとり……此間、綾瀬の月夜に毘沙門堂で、思掛けない御利益で、

將棋のぶち資本に授つて來たんだがね、まだ一枚も曲げも殺しも拂きもしねえ。……と言ふのは、此の寶具を持つてからは、負けたら金子にする氣で勝負に懸ると、また不思議に勝つて、一度も取られねえ。……此の代物が其のまゝで、澤山でもねえが、足りるだけ、飲料の入る工合は、米黄金の湧いて出る、石の唐臼とか云ふ奴で、丁と龍宮のお土産だぜ。えゝ、爺さん、何うだい、些と眩しくねえか。」

「何か、水神で授かつたと——あゝ、案の定出所が可怪い。……うつかりすると、こりや係合を免かれまいが、可恐や。」と薄ら寒さうに骨つぽい襟を、ごそりと合はす。

「旦那も聞いておいでなさらあ、飛でもねえ。」

鰌屋は眞顏に成り、寶玉商と親仁に、雙方、ぎよろ〳〵と目を配つて、

「我ながらまた人相がよくねえからな、……此の風體ぢや、外の串戲と違つて搔浚つたか、追剝か、と洒落にもお思ひなさるめえものでもねえや。……他の事とは違ふ、事明白に言つて置かう。授かるべき仔細のあつて授かつた、御本尊は水神に、江月園と云ふ貸席の御新造だ。」

「鰌屋、鰌、鰌屋さん。」

寶玉商綺雲堂は、急込んだ口の利きやうで、

「……女將だね、江月園の。」

「えゝ、然やうで。」

「新、新橋で照吉と云つた姐さんだ。」

「よく御存じで。」

と言ひ掛けたが擽つたいやうに和笑として、

「違えねえ、繩張内でおいでなさらあ。……旦那、それこそ水神と、おかゝり合がお有んなさるんぢやございませんかい。……此方人等人間の塵芥だ。隅田にやいろんなものが流れますから、氣になすつちや、御新造さんが御迷惑をなさいますよ。」

「氣もないことさ、うむ、何うして。」

頭とともに手を振つて、

「お前さんが其の以前、照吉さんの旦那でも、今情夫でも、昨今の追剝でも、否さ、はゝはゝ、否さ、そんな事なんか何うでも可い。成程、江月園のなら、ものの拍子ぢや上下ぞろりと脱いだらう、脱ぎますとも、脱ぎかねません、脱ぎましたかい、脱ぎましたね。」と頻に頷く。

鰌屋も、うつかり釣込まれて頷いて、

「へい、へい、脱ぎましたよ。」

「はゝゝは、心意氣だ、堪らないね。何だか此方も脱ぎたく成つた。」

と話に浮かれて抜けた衣紋に、風が染む。平手で扱いて、襟許を合せながら、
「と言ふものは、私が、こゝで裏書をしようと云ふのだ、ねえ、爺さん。」
「はてね、裏書とおつしやりますと？」
「何さ、變に何うも恁う、私がぼかんとして、しやぼんの泡だか、珊瑚、眞珠、綠玉だか、紅玉だか、分がわからなく成つて、如何に何でも、玉屋と呼ばれて立窘んでひとりで可笑く成つたと言ふのも、實は、矢張り江月園のためなんだからね、何と、奇代ぢやあるまいか。」
「へい。」
「はてね。」
と親仁も共に小首を捻る。

四十六

「思掛けない、こんな處で、ものも有らうに、江月園の、……あゝ、色も面影も目に見える。此の小袖に出合ふと言ふのも、……其の又私が現に其の照吉さんに度膽を抜かれた、と言ふのも、——場所柄だ、何と此の三部谷が淵に變つて、帶がぬしに成る前兆ではあるまいか、何とも、不思議だ。」と獨で希有がる。

貴下が知つたら、尙ほ驚くだらう。見給へ、彼處に、茅葺ならなく、此の崖下の谷の底に一軒家めく平屋建。榎の大樹の木隱れに、二つ三つ、ちら〳〵と烏瓜の、幽に晝の燈火らしい。背戸は暗いまで落葉して、木槿垣を取廻した日南の緣に、それ、雀のひよい〳〵と飛ぶのが見える……破障子の寂寞した、柳の枯れた木戸造りの一構は、板倉光年の住居なのである。
「江月園に——」
「何でございますかね、度膽を、旦那が、」と親仁も、ともに聲を合せた。
「こりや、落着いては居られない。が、まあ、落着いて聞きなさい。」
時に三人とも煙草を吸つた、——赤坂村や永田の里では、落葉焚くとや思ふらむ。
「四五日前、あれは三時さがり、」
片手で、兩蓋の金側を、パチリと見て、綺雲堂が、
「然やう、丁ど此の時間さ。自動車でも手俥でもなしに、小さな藤色の袱紗を肱にのせて、細りとした黑縮緬、雁の三つ紋の羽織でね、手輕に涼傘を一寸持つて、背のすらりとした、襟脚の玉のやうな、美しく品の可い細面なのが、ふつくりと鬢の出た、其の癖惜い髮を引詰めの銀杏返、薄形の吾妻下駄で、無造作に私どもへ入つて來たが、水を打つた店頭に水際の立つた、內端な、しとやかな其の裾捌きの鮮麗さと云つちやあないのさ、——（入らつしやいまし——）

可いかね。唯、一層口許を美しく、珊瑚の花に眞珠の蕊と云ふ唇で莞爾笑つて、(あの、黑金剛石の一寸粒立つたのを見せて下さいませんか。)……あゝ、其を粉にして齒を染めたら嘸、と思つた。七か、八、それとも九、三十にはとに角一寸間が有りさうな申分の無い中年增、いや、失禮な——見た處、貴婦人さ。

資本が掛らないから言ふものの、これを鐵漿に溶いて流したら、隅田川は漆に成らう。黑金剛石と言ふものは、兩將軍の前だがね、就中貴重な寶石、價値は固より、第一、其の性の純なのは、恐らく東京中の貴金屬寶玉商を探した處で、三顆とはありますまい。自慢に私どもに一顆あつた。……粒立つたと言つた處で、駒鳥とも申すまい、かなりやの嘴へ入るんだが……

痩我慢にも見得は言はない……店あつてはじめてだ。手代を押分けて、帳場の前に脂下つて戸外の雜沓を、……打明けた話が、一呑みに……フゝンと鼻から煙を出して居た私が、煙管を投げて店頭へづッと出た。

私ども綺雲堂の當主人は、まだ二十歳代の若旦那、辛抱人でおとなしく帳場格子に控へて居る。……急に夏中、父親が亡く成つたために、後見をかねて、私が番頭。

おなじものを商ふけれども、私は少か細工の方の心得もあつて、主に鼈甲類を扱ふのだがね、故人とは從兄弟同士。それも兄弟同樣にして居たから、右の始末。で、實はまだ忌中なのだよ。

……其處で、山王樣お鳥居前は御遠慮申して、いまも恁うして、そッと拔裏と云つた、まあ、寸法で——はゝゝ、いや、餘計なやうだが、念を入れて言はないぢや、」

通りのいゝ、吸殼をづッと落いて、

「何だか夢のやうな話だからね。……處が實地正銘なんだから驚くだらう。

丈八罷出で、これは入らつしやいまし、と極ると、恁う、しつとりと、御存じの萌葱の椅子に貴婦人の腰が下りた。

(御覽に入れな。)

で、手代が恭しく捧げて出たてね。」

四十七

「何しろ、此だけの品ものだから、張側ぢやあるけれども小筐も黃金製。獅子の口に月桂樹を掛けた處が象嵌浮彫に成つて居る、大した寶石。但し何うも、手品、魔法ではないので、蓋を開いて、其の拍子に、颯と濃い紫の後光が射さないのがもの足りません。其の黑金剛石を撮んで視た、貴婦人の白い指が透通つて、掌が明るく成る。

(お幾干です。)——(御意で、えゝ、些と丁數が合ひ過ぎますやうで、如何ではございますが、

恁ほどのものでございますから、何のお駈引きも申しません。……片手……)」
「片手、」
と鸚鵡返しで、あぶく球の親仁は黄色い掌を獨で開けた。
旦那の瞳がおのづと光つて、親仁の其の掌を射いたのである。
「五千圓。」
「や、五千兩。」と宙へ、ぶらりと手を下げる。
「貴婦人がね。」
「はゝあ、」と鰌屋が眉を動かす。
「石を返すと、臺に置いた袱紗包みに指を一寸掛けながら、(お店の事ですから御信用申します、)
――恁う聞いたから、皆まで言はせず、(戰爭以前に、澳太利維也納府から直接取引の稀品でございますので、へい〳〵、大日本中何處へ參りましても此の他に黑金剛石と申すものはございません。)(否、品ものの念を推すのではないんです。これは頂戴しますから、)と例の袱紗から折目のつかない百圓紙幣が四十五枚と十圓紙幣が五十枚。――可しかね。
先方の人品が人品だから、此には、そんなに驚きはしなかつたが、此の寶石が餘所へ贈物だと知つた時には、思はず一膝退つたよ。

で、貴婦人の言ふのには、店は信用するが、これを贈られた方が、確に黑金剛石だと思ふか何うか覺束ない、たゞのしを書いて差置いて來るのと違つて、少々仔細がある。あるまじくさもしい事だけれど、おくり先の人たちに、五千圓と云ふ價値が知らせたし、……別に又、此の信用ある、誰も知つた銀座の綺雲堂の店員に、直接に鑑定をして、眞疑のほどを確めて貰ひたい黑金剛石の寶石と云ふのが、も一つ別に他に一顆ある。で、其の鑑定かた〴〵、店から一人確な人に出向いて欲しい。其の時、五千圓の請取と一所に、此の黑金剛石を、指揮の場所へ屆けるやうに、それまで寶石は店へ預けて歸る――と恁う云ふ……其の貴婦人の註文なのさね。」
「成程。」
「へえい、はてな。」
「何も煩かしい事はないが、生若い手代などぢやあ、何か、此の役目は荷が勝ちさう。卽座に、後見の私だ丈八自分に參上と腹を極めた。處で、其の伺ひますのは何日で、御場所は、と聞くとね、……二三日中、時間は午後すぎ、尙ほ悉くは電話で知らせる、場所は濱町三丁目、淸正公樣のすぐ近所の、(突羽根。)と云ふ鳥料理だと、恁う御意ある。」
「へえい、濱町の鳥料理、突羽根……」
と親仁が言つた。

引手茶屋

四十八

挿話として、此處へ此の突羽根の樣子を――傳へ聞いただけだが――記して置きたい。

京傳の總籬、清長の吉原八景などにも、繪も景色も見られる。仲之町に老鋪の引手茶屋があつた。今の女主人をお崎と云ひ、妙齡の娘が一人、お縫と言ふ美いのがあつて、繁昌をして居たのであるが、前年の大火に丸燒に成つた。――竹の手摺の假宅で當座暖簾を掛けて居たが、捉なり、お達しなり、營業を續けて行くには、新に家を建てねば成らぬ。……借金はあつても餘裕がない手元だつたので、然うするために、二三金主にも當つて見たが、今時の引手茶屋では、見込みがないとて、資本を下す相談に乘手がなかつた。

のみならず、今年十七に成る美人のお縫は、藁の上から廓育ちとは言ひながら、金子うらの私塾へ通つて、厚紙で皿屋敷のお化を切つて、机の蓋から、どろ〳〵と出したり、蓮池で慈姑を掘つたり、あてものに血道を上げて、どつこい屋に身上を注込むやうなのとは時代が違ふ。上野へ遊んでも椎は拾はず、文展を覗いた歸途に、音樂學校を立聽して、洋琴の曲名を横銜へに知つて

居ようと云ふ高等科の卒業生だから、豫て吉原の如き處に暮して居るのが可厭でならない。折もよし、此の機會に是非町住居がしたい、と言ふ。

主婦もさして異存は無かつた。が、お崎の考へでは、廓外へ移るとして、新橋には大分廓の藝者が出て居る、由緣もあり、便宜もある、……何處か其の變で待合でも、と云ふのだつたが、いやな、汚い商賣と、娘のお縫が殊勝にも肯ぜぬ。

お崎も五十餘、とる年で、たゞたよりにする娘の心にまかせる氣で、一寸した金主もつき、誰彼の發議もあり、お縫も先づは異議なしで、飛石、石燈籠と云ふ罪のない、綺麗事。鳥料理を濱町ではじめたのが、突羽根である。

で、些と堅いが創業の際と行かう。其の際、お帳場と稱へて、萌葱羅紗を張つた、簿記用の低い卓子を買つたのに、次のやうな奇談があつた。

吉原に居る時と違つて、同じ水稼業と言ふものの、御祝儀の泡が浮くのでないから、お崎が成りたけ儉約して、娘が出來るだけ經濟にして、つい近所には其の卓子の四圓五十錢と言ふのがあつたが、方々町通を搜して歩行いて、淺草橋邊の唯ある道具屋で、中古なのを見着けて、女房に値を聞くと三圓九十錢だと言つた。お崎が、十錢お負けなさい、と言つた。値切るのに十錢はをかしいが、町の賣値には掛がある、と聞囓りに心得て居たものの、引手茶屋の勘定は、取れない

までも値切られた覺えなし、また、値切られたら何うだらう、と自分に比較べて氣兼をしながら當つたのださうである。

道具屋の女房が、値の事は何にも言はずに、

「貴女、これがお持ちに成れますか。」と訊いた。

扨は値切つたのを癪に障らせた、と恁う取つた。勿論、値は負けた、が、先方が癪に障らせたら、此方も意地だ。……第一買つたものを持つて行かれないと云ふ法はない、トサ道理である。

「あゝ、持てますとも、お前さん。」

と仲之町一流の意地張で、お崎がいきなり机の脚を肩に挾んで引背負つた、背負ふのと、一つ機勢んで出るのと、轉瞬の隙もない、ひよろ〳〵、ひよろ〳〵ッ、一足歩行出すと、又ひよろひよろ。

弱つた……可恐しく重いんだ。が、道具屋の女房の見て居る負惜みに、落すのが口惜くつて、重量に壓されて、ひよろ〳〵ひよろ。

「何をするんだ。」

恁う怒鳴つた聲がある。本人は最う目が眩んで先方が見えない。道だか、川だか夢中だが、叱られたからには、誰かに打着つたに相違ない。

「御免なさいよ。御免なさいよ。」をがみ倒しに詫びながら、又ひよろ〳〵、ひよろ。

其の背後で、お縫のクックックックと笑ふのが、頻に耳に聞えるので、

「何だね、お前笑ひ事ぢやないやね。」と矢張ひよろ〳〵。

こゝで、娘が、教育があるだけに思慮がある。背負つたのでは、目も見えまいし、持悪し、恰好の惡さと言つたらない。前へ廻して、膝へ取つて胸で持直す事と心づけて、其處で背後から手傳つて、背中のを下へ下して、今度は其を胸へ上げて持ち直す。

直して抱く。さあ、今度は足が突張つて前へ出ない。……兩の膝へ重量が掛る。でも、いぢかり跨で、腰を張つて、正面を切つて、ギックギック一足、二足づゝは其でも出た。

今度は、さすがに目は眩まぬ、背後が見えるから振向いて、娘はと見ると、何うだらう、結綿の新姐が、かはり八丈の袖を敷いて、地の上へ坐らぬばかり、横腹を抱へて、うつむけに居すくまつて、込み上げ、咳上げ、

「ほゝゝ、ほゝゝ、止して頂戴よ、止して頂戴よ。私死了ふわよ。崎ちやあん。」

此が朝鮮、大連の出來事ではない。東京の眞中八方十字の電車通、淺草橋の大混雜。其處等の人は狂人と思つたらう。――大門内は花魁が扱帶で道中をするのである。

此の事を、お崎が後で話す時、

「ねえ、お前、交番の巡査さんがクックッと笑つて居たつけね。」
「えゝ、然うだわ、其の巡査さんはね、洋服の胸を仰向けに反くり返つて、洋刀を、ガチャ〳〵ガチャ〳〵揺ぶつて笑つて居てよ。」とお縫が附足す。——
聞くもの問うて曰く、
「それを、何かい、内まで持つて來たのかい。」
お崎が眞面目に眉を顰めて、
「串戯言つちや不可ません、あれをこゝまで持つて來ようもんなら、大川へ落こちて了つたんでさあね。」
無論安くない車代を拂つて、途中から車で運んだのである。
お崎は以前仲之町の藝者であつた。生れて以來はじめて町へ出たと言つても可からう。博覽會は煉瓦造りだと聞いて、議事堂を視て間違へた事さへある。——
雜司ヶ谷に參る音羽の通りを、儉約で歩行いて居て、太く草臥れた處へ、三越の印のついた自動車が飛ぶのを見ると、頓興な大聲で、呼留めて、其處等までお乘せと言つた。誰がこれを聞くものか。——「不人情だね、私だつてお前はん許で買物をするよ、滿更他人でもないぢやあないかねえ。」

お縫が又、五色鸚哥が飼ひたいとねだるかと思ふと、人形を抱へて頬摺りして居る。七面鳥のフライが喰べたい、と言ふかと思へば、骨が可恐くつて鯛の汁はいけないのである。
と、言つたのが、——君ちやんと唱へて——此の女は、此の話の頃は、最う居ない——此の引手茶屋で、もと内藝者で居たのが、手傳ひに來て居ると言ふ鳥料理。
それ、お手が鳴るよ——お二階で。
お縫が用を聞きに行くと、客が言ふやう、
「おい、鍋下を持つといで。」
「はい、」とばかりで引下つた。が分りません。
「崎ちやん、一寸、鍋下を持つて來いつて言ふんだが何だらう。」
「分らないね、君ちやんに聞いて御覽。」
「何だらう、鍋下つて？君ちやん知つてるかい。」
「知らないね。」
新參の女中や、料理番に聞くのも素人らしくて口惜いと、三人が額を集めた。
さすがに年の功である。お崎が分別して、
「あゝ、釜敷の事だらう。丁ど新しいのがあるから持つといでな。」

「釜敷かい、姉さん、釜敷を何にするだらうね。」と君ちやんが不審がつた。
こゝで、お崎の返事が可い。
「お客様が、何かのお禁呪になさるんだらうよ。」
で、お縫が恭しく塗盆にのせて、目八分に其の釜敷を持つて出る、と客は呆氣に取られたが、
やがて吃驚して噴出して、
「おい、火の事だよ、火の事だよ。」
お縫が眞赤に成つて駈下りた。
諸君は、五分と言ふものを御存じですか。——女中が註文を聞いて來て、「ほんごぶになま二イ」
と通すと、此を知るもの一人もなし。
女中が來て、(れいしゆ。)と通した事がある。又分らない、用が足りないから、「お早く願ひま
す。」と其の女中が言ふ。
お縫が、慌てて、「君ちやん、(れいしゆ)はあるかい、(れいしゆ)はあるかい。」
藝者だつた君ちやんが、小婢を呼んで、
「あ、早く、八百屋へ行つといで。」
小婢が聞いて不思議さうに、

「八百屋へ行つて何うなさるんです。」
「今時分何うだか知らないが、八百屋に(れいしゆ。)があるだらうよ。」
女中が驚いた。
「冷酒の事ですよ。」
冷酒と荔枝を間違へた。いや、家業と成れば煩かしい。
「けいらん、五——」と女中が通す。
さすがに教育のあるお縫に分つた。
「ね、君ちやん、鶏卵つて玉子の事だね。」
すると、君ちやん憮然として、
「そんなつてあるもんですか。」
「あら、だつて玉子屋の看板には何と書いてある?」
「矢張り玉子とかいてありませうよ。」
鍋下、紫、本五分に生二と來て、(しんこ。)と聞くと悚氣する。三葉なしで葱をと言ふのも(み
つなしの本五分。)は氣障だ。何うも其が癪に障る、おいしいお香子、と尋常に言ふ客があつたら、
奢らう、勘定は頂かない、と三人が徒黨を組む亂脈さ。

も一つ大事なことを忘れようとした。鳥屋の客が歸ると言ふのに、お縫が、

「今度、いつ入らつしやるの？」

お崎と君ちやんが、うつかり聲を揃へて、

「お近い中……」

あよれなのは、客の前で、お縫が鳥を煮させられると、加減のいゝ時、うつかり箸をつけたと言ふのである。

客が醉つて唄など歌ふと、「いゝ若いものが、絲なしで見つともない、出世前だらう、可哀相に、君ちやん彈いてお遣りよ。」——

其の君ちやんが忙しいと、お崎が自分で前垂がけで、三味線を持つて出た。客より居まはりの藝者、茶屋小屋が耳を澄ました。隅田に響く音じめであつた。

最も恐るべきは、引手茶屋の習慣、客の寢ることを茶とも思はぬ。……狼も狸もあるのに、醉つて倒れると、眠いのにして、搔卷を掛けた志。——

廓の意氣は嬉しいが、町の鳥屋は此の體では覺束ない。

——活計は日々に窮迫して、お崎は折から大病であつたと聞く。

獅子の小筐

四十九

「……旦那それから、」

と鰌屋が腕組をして乘つて出る。

寶玉商は一息して、

「まあ、お聞き。……唯話も此處へ來ると、何だか恁う、其の突羽根が長谷川の道具で一幕出さうで、引返しが、大川端のだんまりは世話過ぎる。……材料が澳太利維也納出の黑金剛石だけに、大薩摩の大沙漠で、亞剌比亞、波斯、印度に猶太に、伊太利の女優が搦んで、此の方駱駝の役ぢやないか、と偶と妙な氣がしないでも無かつたが、代すみの品ものを屆けて、前方の寶石の眞疑を分つ……だけのことだ。これは、目と腹に覺悟がある、私が出ます、ときつぱり言つた。貴婦人が、(では、賴みましたよ。)でスイと出る。まだ一束は殘つて居た、袱紗包を輕く片頰にあてたので、……あゝ惜い、伏目の長い優い眉毛、うつむき加減の横顏の、それも涼傘にかくれた。其の涼傘だが、目に見えぬものが宙で開いて、さつと翳したやうな工合で、あの人通りの片蔭時、

通魔でも見るやうに、美しく凄かつた。」

と寶玉商は片手を翳してふと雲を見たが、語り繼ぐ——

「今のは板新道に居た照吉さんだ。江月園の女將だよ、と若主人も手代も騷ぐ。……つい、新橋に出て居た頃は、店の矢張り花主だつたさうで、私は初めての見參だけれど、名だけは豫て知つて居る。……女の兒が三錢のお小遣で、南京玉を買ふやうに黑金剛石の無造作な買振は驚かないが、五千圓のおつかひものと云ふので舌を卷いたね。上方屋に尙だ有るだらう、出の姿の寫眞を探せ、島田を賴むよ、と小僧を駈出させた、用が遲いので焦だつて、二度めの使を追走らすと言ふ店中のざわつき加減。

で、中二日措いて、一昨日の三時頃に電話が掛つた。——あのものを持參で出向くやうに、場所はお約束の通りだ、とある。何事がはじまるだらう、と物好半分、氣掛り半分。魂を下腹へ落着けて、紙入と例の小筐だ。懷中を、うむと大くして、濱町へ出向いたが、直ぐに知れたよ。……廂へ軒看板を出して、灯入の處を羽子板の形に切組んだ誂へで、かなで、「つくばね」としてある、見るからに何うも女主の鳥屋らしい。(お電話のございました銀座から來ました。御婦人の方が、)と云ふと、女中さんが、(何うぞ、此方へ、)と案內に立つ。廊下を向うへ通る時、左の板敷の處を見ると、其處が板前で、皿、小鉢、丼の類を挖へた、臺の上に一人紺無地の鯉口を着た、頭

の大な、出額で、顱割の筋が縱に入つた、逆眉毛で、毛の薄い、肥滿つた、が色の蒼黃色い、大なへの字形のベソ口で、丸顏の、圓い頤に、一寸つまめさうな疣の振下つた、五十ぐらゐな男が居る。大胡坐を引搔いて前はだけに、土左衞門其のまゝな靑膨れのした、太股を溢ませて、丼に澤庵の厚切なのを裝つけて、ぐびり、と硝子盃は冷酒らしい。上が明取の、眞下に幅をしたので、一目見ても、よく分つた。此奴が通りすがりに私を見て、薄目を鼻柱へ寄せて、眉毛をびりつ、と顱割で、じろりと遣るのが睨むやうだ。

此奴の人相、はてな、あれだけの女客が出入りをしようと云ふ綺麗事の鳥料理に似合はない板前だ、可厭な奴だと思つたのさ。

一寸、植込に飛石が三つ四つ、石燈籠などをあしらつた、此は先づ可し。下座敷の六疊へ通したが、(一口めしあがつて、少々お待ち下さいまし、とおつしやつてでございます。はい、お客樣は前ほど二階に來て在らつしやいますが、一寸ほかに用事がおあんなさいますさうで。)(はあはあ。)成程、二階に人聲がする、若い男らしいのが、二三人、と思はれる。あは〳〵高笑などが交るけれども、家中、寂寞して、何故か、陰氣だ、はてな。

すぐに一銚子出た。用意があつたと見えて、三品ばかり。で、遠慮は不沙汰と、手酌で頂戴に及んで、やがて傾けた、と思ふ頃、廊下へする〳〵と衣摺れの雲上さに、驚破、と居直る處へ、

右の、貴婦人、いや、江月園のが、（お待たせ申しました。）としとやかに座について、此方の挨拶を丁寧に受けながら、（お酌をいたしませう。）と紅玉の指環の手が、丹頂の鶴の頸の如く銚子にかかつて、卓子臺に乘つた時は、思はず、杯を取つて額に當てたね。あゝ、恐多い。莞爾しながら、默つて酌をする時、私は下目で、黑繻子の帶の下に、藤色の扱帶をちらりと見た。

（まあ、お銚子のおかはりめ、では一寸何うぞ二階へおいで下すつて、）（はい〳〵。）

すつと立つて行くあとから、此の方、白足袋の摺足だてな。

二階へ上る時、階子傍の小部屋の障子の透間から、簞笥に並んで、壁に掛けた三味線を二挺見た。が、病人があるらしく、藥の匂が陰に籠る……

（よう〳〵。）（畜生め、）と座敷で、二人らしい聲がすると、婦人が入り掛けた襖際の肩越に私が見た、のだが、若い男の血氣盛りが三人居た、中の一人が、何と！」

と氣色ばむばかり氣競つて、兩手で笊の緣を、ひしと壓した時、膝に置いて蹲んで居た、其の提鞄が、する〳〵と地に辷る。

五十

「淡紅色の一粒鹿の子の手絡を掛けた、水の垂りさうな結綿の肩を絞りさうに、若い男が洋服の

腕を卷いて抱込んだ、拇指が、雪の上へ薄化粧の顏へ掛つて、釦の胸へ前髮を押着けられて居るんだから、襟脚が辷つて、何うだらう、緋の、あの肌襦袢の眞紅な襟の拔けたのが、颯と一條血を繁吹いて、何の事はない、首を引拔かれた無慙さと酷たらしさだ。

トサ見たつけ、其處へ、唯私たちが立つたので、其の洋服が、色白で髮の柔かな柄にも似ない、野卑な口許で、ニヤリと此方を見て、手を離した。

結綿の娘は、梟の爪から暖鳥の羽を落して、はツと成つて、筋の萎えたやうに疊に袖を支いて、此方を向いたが、ぼツと上氣した、目許、口許、容色と言つたら、いや何とも言ふに言はれない。

——やがて知れたが、お縫さんと言ふ此の突羽根の小町でね、以前は仲之町の引手茶屋の一人娘の衣通さ。——

狼が三頭居る。今の洋服が高襟仕立で。一人は擬らしいが、結城を着て、紺無地絲織と云ふ澁好み。もう一人は、上下縞お召の揃と言ふ御ぞろもので、いづれも三十前後だね、此の、お召のなぞは、顏へ白いものを塗つて居ます、が美男さね。

卓子臺を二つ繋いで、鍋が二ヶ所に、じわ〳〵と煮えて、料理が並んで、娘がお酌に出て居た寸法。

御免と、其處へ席に着くと、三人が思掛けない、と言つた顏して、一齊に私の顏つき、恰好を、

鼻で嗅ぐ、眉毛で覗く、頤で視る。此を機掛に、(旦那)――照吉さんが私を呼んで旦那と言ひまさ。……勢自から此の方の羽織の襟に位が着く。――(旦那)と言ふと、貴婦人が、いまの洋服とお召揃ひが、右と正面に座を取つた卓子臺の上に、……然やう、お銚子の袴を俯向けて、小さな臺にした上へ、萌葱天鵞絨の切に包んだ黒い珠のギラリ〳〵と光つて居る奴を取つて、瞳を膝に落すと、一寸頂くやうにしたつけ。も一度、私に向直つて、(旦那、此が眞個の黒金剛石ださうです。――此のお三方のお一人が、外交官を遊ばして、米國の大使館においでなすつた時、或有名な女優の世話を遊ばして、それが記念にお贈り申したものださうですが、今度求めました私の品も同じものなんでせうか知ら。)……とお出でなすつた。此の事を言つたのだ。鑑定は――(拜見を仕ります。)で、此方は、村正の切尖を睨む意氣組。掌に据ゑて下腹へ力を入れた。が、少時あつて我知らず、鼻の尖がフ、ンと鳴つた。」

「贋かね。」

「啖せものでございますかい。」と親仁も言つた。

「まづさ、其時私は、待ちなさいよ……煙草を捻つて、ぱッ〳〵と息を長く吸つた。婦人はよけの、三人をじろ〳〵と視て居たのは、言種を考へたんだ。炭團と言はうか、瓦と言はうか、それとも砂利と申さうか、砂と言ふより蒟蒻かとね。――仕掛、からくり魂膽は知らないが、村正を

鑑定する此方の意氣込に氣を壓されて、聲を詰めて寂寞して居る。――(成程、黒金剛石に相違ございませんゝ)……と可しかね。」

「眞個ものですかい。」

「えい、其は。」

「待つたり、」

と寶玉商は、兩手で兩人を壓へたつけ。

「……其處でだ。(が、しかし此は、劇場の小道具に使つたものでございませう、おでこ劇場の。)と可しかね。」

「遣りましたかね。」

「はあ〳〵、成程、むゝ、如何樣。」

「ね、可しかね、(女優の贈ものだと承りますれば。性は硝子! 黒いのはビイル罎、丁度、あの質でございます、たゞ珍らしいことは、天下一品。)と恭しく臺へ乘せた。(おい、こらゝ)(默れゝ)(何だ、貴樣。)などと一齊に、膝立直す、腕を揮る、帶をぐいと、〆直す。

眞中へ、廣告がはりの大い名刺をヌウと出した。(東洋隨一、)とぽんと懷中を敲いたて。(銀座の綺雲堂、責任を負つて、硝子玉と鑑定しました。正銘の黒金剛石と申すのは、此の御婦人に一

昨日、手前ども店に於て御買上げを蒙りました、卽ち此の品でございます。)と御催促なしに、ずばりと出す、と黄金の小筐が赫燿として露拂ひで、先づ輝く。」

五十一

「金毛の獅子が躍つて、月桂樹の枝を拂ふと、晃々として宛然其の獅子王の黑い瞳、我ながら天晴寶石。……(百兩を解けば人を退らせる。)と諺にも言ふものを、軍鷄鍋の湯氣が鎭まつて、狼は堅く成つた。其處へ、五千圓の領收證、俗だが一つ、證券印紙の割印を、平手で、ポン、で飜然と出す。

(お縫ちやん。)江月園の御新造が、娘さんを呼んだね。……(其の眞個の金剛石を進げますわ。細螺彈きになさいまし。)(えゝ、)と目を睜つた。あゝ、魂の入つて動く、此の水晶も美しい。(指環の玉になすつては、其の細い綺麗な指に、大き過ぎて、見つともなくはありませんか。)(まあ。)と震へながら、手に取つて、お縫さん、恍惚と成る處を、御新造の手がちらりと白く、引攫つたと見るが否や。」

寶玉商は、からびた咳、續けさまに二つして、

「金の小筐を引寄せて、(お縫さん、何です、こんな石の缺片一つのために、淸い、尊い、女の操

を汚されようとしたんですか。)と言ふより早く、小函を臺に、鍋おさへを鐵鎚に、丁と打つと、寶石の精だと思ふ紫の濃影が颯と拳に映つたが、獅子を一挫ぎの氣の勢に、黑金剛石は微塵に碎けて、稻妻のやうに、燦爛と散る。

私はたゞ、眞晝間、美しい星が目前へ天降つた、……と思つて呼吸を詰めて、目が眩んだ。

三人の男には落雷の思がしたらう。

ふと心着いて見ると、其のお縫さんは、嬉しいか、悲しいか、恐怖しいか、口惜いか、たゞ結綿を眞俯伏せに、御新造の膝に縋つて居た。

袖の下へ、袖を潛らし、袖を重ねて、兩手で確乎背を抱いて、御新造は三人の男の方を屹と視た。(御覽なさいまし、お三方、金剛石の眞僞は格別、それを下さらうと言ふ貴方がたへは行かないで、お縫さんは、來て、石を碎いた私の膝に抱かれました。最うおあきらめなさいまし。)と莞爾しながら、情が迫つて、はら〳〵と落涙した、龍女の玉が散るやうだ。

奴等はね、白けて顏を見合せたつけ、(他樣を當らうよ。)(然うだ〳〵、見立がへだ。)(あばよ、おいらん。)とへらず口を叩いて、どた〳〵、ぞろり、つん、と立たうとする、と、(お待ちなさい。)と御新造が留めて、お縫さんを抱いたなりで、手を敲いて、女中を呼んで、(勘定を持つておいで姐さん——貴方がた勘定をしておいでなさい。)と、づツきり言ふ。(御馳走ぢやあないか。)

（今日は此家の内から招待をされたんだ。）と急いて言つた。（え、、今日のは私が然う言つて御招待申したんです。けれども前々のがございます。女中さん、すつかりお頂き。）

連中、遁げるにも遁げられず。……扨て其の總〆高八十幾圓、いや、貸したてな、借りました な。

三人、墓口、紙入を出合つた、が、合せて二圓と纏まらない。……女中が力み出した。……喧嘩腰に成らうとする時、お縫さんが、うつとりした顔を上げて、

（可いわ、お次手で。立派な方たちも、お金子には詰るものよ。）と優しく言つた、可憐さには、私も思はずほろりとした。

洋服の背高が、帽子をあみだで、一人下りかけた階子口から、のこ〳〵と引返して、（堪るものか、端金の借りに、黒金剛石を忘れて行つちやあ。）で、硝子玉のを引摑んで、どしん、どん〳〵と蹴立てて歸る。

此が帝大の醫學士、何某内科に通勤の修學中と言ふ觸込。……外交官の洋行がへりの、故と氣をかへた、と言ふ縞お召のが明法大學出身の法學士。結城が早稻田の文科出で、何とか演藝雜誌記者、兼劇評家、合せて通人、長唄なんど嚙つたさうだ。が、まだ罪は淺い方。皆質もの。

怪しからぬのは醫學士で、現に此の突羽根の女主婦、お縫の母親が大病で寢て居るのに、何處

で工面をして來たか聽診器を當てたと言ふ。皆くはせもの、にせものの、炭團、石炭、ビイル罎、蒟蒻玉の藪玉だ。

此が、三人とも、初手から一座した朋友ではなかつたさうで、――いづれも仲之町の引手茶屋が、引越して、母一人娘一人で、綺麗事の鳥料理と見て、内福と睨んだ上に、何方へ轉んでも損はすまい、と目的をつけた、所謂色魔の類が、各自我一と毎日のやうに張込むうち、襖で打つかり、廊下で逢ひして、いつか知己に成つた、と言ふ事……」

處女

五十二

却説、其の三人の色惡どもが、暴露話に高笑を交へて、

――結局、黒金剛石一顆あれば、突羽根のお縫が身を任せる、――と言ふことを、道を違へて、張つたり、口説いたりの間に、つゞまる處を突留めた。が、勿論、硝子玉で落すにして、三人のうち誰の手に入札する。――

「此の相談を、何と向島の奥の八百松の裏へ出て、水神の祠のあたりを貸廣袖で、ぶら〳〵歩行をしながら、あたりは川なり、水田なり、鐘ケ淵の煙突なり、誰憚らず饒舌つたさうだ。

其の黑金剛石を餌にして、娘を釣る相談に夢中で居て、辨天山の鐘の音も、其の鐘ケ淵の汽笛の聲も氣にせぬ徒が、尾花がくれの花鋏の幽な響に、心着かう筈はない。

江月園の裏木戸は、水神と地續きで、畦道の高いほどな草の土手が境に成つて、春は藤、秋は葛の葉が自然の籬を結ぶ。庭には花畠、桔梗にも女郎花にも事は缺かぬが、投込みの取合せに、むらがる莖の房りした嫁菜の花が欲しかつた。江月園の御新造は、小褄を取つた庭下駄で、地境の右の土手へ、其の嫁菜を尋ねて來て、さて花鋏を入れて居た耳へ、毒矢を射られたやうに三人の話が聞える。——

土手づたひに、庭の池へ大川のそゝぎ口、水門の木戸から、薄がくれに、さし覗いて、チツクに、香油白粉の、三人の顏を確と見た。

奴等は相談を鬮にした、鬮取だ、鬮取だ、長いのがお縫ちやんの初番を取れ、と宛然雲助の講三昧。三味線草を引抜いて、乾坤亨利、あびらうんけん、アーメン、とはしやいだのを、色の、就中生白いのが引當てる、と、(や、お誂へだ、洋行歸りだけに黑金剛石は尙ほ利めが可い、其の

かはり昨夜からの此處の勘定を持て。)と言ふ。八百松へは泊り込みか、其處へ、づんぐりと肥つたの、瘦せて面疱のあるの、廣大な廂髪、すべて三人、いづれも川風に、不見轉の旗印を翩翻と、事も眞赤に飜して、鐘ケ淵の煙突の煙の濛々と靡く下を練つて來て、一所になると、乾坤亨利、あびらうんけん、アーメンと云ふが早いか、揃つて首を抱へて一人づゝ。

——江月園の御新造は、深い仔細があつて、此の時、屹と思決めたと言ふ次第だね。——

……と云ふのは突羽根のお縫と云ふのは、御新造のためには大恩人の一人娘で、然もそれが、はじめて此の頃、其の當座に分つたんださうだ。

が、勿論、まだ一度もお縫に逢つた事もなし、突羽根の樣子を見た事もない。處で、心組みをした支度の上で、濱町へ出向いて、一度、二度、三度まで、樣子も見れば、お縫に逢つて、口うらも引き、氣質も搜ると、……記者も、醫學士も、外交官も、娘は信じ切つて居て疑はない。無理はない、何にも知らない十七八が、分けて根生えの廓育ち。浮世も、義理も、人情も、耳で覺えた世間見ず、黑金剛石の外交官の磨いた指が、觸ると落ちる撫子の、……あはれな露、と見て取つた。

が、女同士の、すぐ打解けて、何時、幾日に、其の寶石を持つて來る約束だとまで聞いたので、(私も最眞、突羽根の御定連に成りませう。其のお三方を招待して、私が御馳走をしますから、

紹介せて、お知己にして下さい。)――で、御新造が跋を合せたのが、即ち――當日。一打に黒金剛石を粉微塵に碎いた、其の前に銀座へ來て、私の店で、五千圓は先刻から、話した通りさ。

處で、水神の土手の事、嫁菜の花だ、葛だ、春は藤の由緣の事、三味線草の鬪取の事なんどは、しかしながら、其場で聞いた次第ではない。

其の日は一旦、私も夢心地で歸宅したが、此の三十年以來、夜中睡られなかつたのは其の晩切でね。あくる日更めて客に成つて、突羽根へ出向いて、御新造に聞いたんだ。――江月園のは、すぐに其の日から……いま、突羽根に女中をして居る……」

「女中を。」

と、あの逞いのが、不意に一驚を喫した體で、鰌屋は肩を寄せて腕を張つた。此の片手に、色ある小袖の袖を通して、片身はお新の姿で居た。黒金剛石を一擊と聞いた時から、恁うして、時時、ふと其の小袖の拳を擧げて、丁と空を打つ眞似したのを誰も知るまい。

「それにもさ、次第があるんだよ。」と、寶玉商は、きちんと疊んだ手拭で、話に熱した額の汗を拭いたのである。

五十三

「談話はあとへ戻るがね――其の日、濱町の突羽根の二階を、三個の色魔が、斷崖から落ちたやうに下りッ了ふと、縋つて寄りかゝるやうにして居た娘を、雛を抱くやうに、兩手で上座へ据直して、一膝退つた。

(お縫ちやん。)……江月園の御新造が、兩手をちやんと疊に支いて、(此間から御樣子を見ました、貴女が御存じないのでしたら怪我にもお話しすることではありませんが、此の頃では、此の突羽根には御養女で、――眞個の母樣は、新橋の前代の萩島家の照吉姉さん……今はお行方が分りません、もと仲之町の藝者衆で、貴女は藁の上から、此家の主婦さんにお育てられなすつた事を御承知ですから、明けてお話しを申上げます。……

お縫ちやん――貴女の母樣には似もつかない、お恥かしい私ですが、二代目の此の照吉は、母樣に大恩をうけて居ります。藝は佳し、御容色は、それこそ貴女に瓜二つ、それでお察しなさいまし。其の頃も千人近い新橋の藝者のうちに、五本の指も紅さしで、月夜に櫻を見るやうな、派手な、婀娜な、意氣な姉さんでござんした。

名をあやかつて抱ぬしが、つけたと言ふのもお恥かしい、私は其の頃萩島家に小照と言つて丸がゝへ。晃々とした月の光に、螢ほどの影も無い、暗夜の葉末の露の身でした。――一時築地の

或待合へ、京阪地の大盡客が參りましてね、一座の中へ、豫て其の土地、九州筋へも名の響いた照吉さんを是非呼んで、と云ふ飲まない前の註文です。大抵な無理は通して、座敷だけの勤なら、どんな藝者にも顔出しはさせます、歴乎とした待合ではありましたが、我儘で、無理も勝手な照吉さんには、然うした壓が利かないで、待つても、居ても見えない處へ、大分酒亂な客なんですから、初手病氣とも斷らず、熱海、箱根へ遠出でもない婦人に、五分間の逢狀も利かないとは東京の茶屋は不自由だ、それとも百姓にはをがまれない、國主大名のお姫樣かと、こだはられて、其のお茶屋でも困り拔いて、――自分が言つては變ですが――何處か容子が肖たと云ふので、私をかけて、座敷へ出して、照吉が參りました、と貴女の母樣の贋首にしたものです。

虎の目には、それでも無事に通りました。が、人間の若い婦を見て、虎は目だけでは通しません。爪も齒も掛りました。……もう、やがて七八年、其の頃私はうまれてから、はじめて思合つた人にも逢へず、……いろ〳〵口惜い、情ない事があつて、眞鶴の海で一度死んで、いきかへりました當座ですから、自棄も半分、京阪の其の客を、酒で裝潰しはしましたけれども、其の夜、小座敷へは入つたんです。

さあ、それからと言ふものは、髮結さんのゆきかへり、お湯屋の流場、お稽古がよひの電車の中でも、目ひき袖ひき、お酌たちまで、私の事を、照る月をば曇らした、月蝕だ、月蝕だ、螢だ、

螢だと噂をする。……幾度死なうと思つたでせう。――私は覺悟を極めました。……

最うこれまでと思つた時、お座敷がへりを密と忍んで、――お縫ちやん、貴女の母樣にお目に掛りに行つたんです。身分も、身上も、天と地ほど違ひますから、お交際なんぞ思ひも寄らず、お宅まで參つたのは、其の晩がはじめてで、梅雨の晴間の暗夜でしたが、奥床しい磨硝子の御神燈なんですけれども、照吉さんのお名前が眩いばかり氣を打たれて、表からは入り兼ます、折から、お内に聞えます、爪彈の意氣な音〳〵も、四邊を拂ふお腕の冴え。瑩音さへ遠慮して、金春新道の裏露地をお臺所へ廻りますとね、女中さんが使ひにでも出たあとらしく、腰障子が細目に開いてて、其處からお姿が見えました。

誰も居ないで、お一人切、緣起棚を横に、茶の間と中の間の中仕切の、丸窓の壁の柱に、くの字形に凭懸つて、風邪でも召したか、檢番には、二日ばかり、用事がついて居た處。洗髮の横櫛で、お寢卷らしい、八反の襟附に浴衣をかさねて、瀧縞の藍つぽい寢々子を肩辷りに、引掛けなすつて、前に蝶足のお膳が出て、お雛樣の道具のやうな、三つ組だの、皿小鉢、そして一銚子乘つて居ます。女中は一寸、甘いもの屋へ何か誂へにでも出たらしい。)――

と恁うまあ言つた、其の寸法らしいんだ。」

五十四

「新御造がお縫さんに其時の事を、尙ほ言ふのには。――

（そして貴女の母様は、爪彈をして在らつしやる。

「田舍づくりの籠花活に、

づッぷり濡れし水の色、

撫子を活けし樂みは――

日頃の憂さも何處へやら。」

其の婀娜なこと、意氣な事、御氣象が姿に出て、藝が位の品の佳さ。障子も襖も開いて居るのに、私の目には奥深う玉の簾で隔つたやうで、うつかり聲も掛けられず、忍び泣きに泣きました。……照吉さんのお膝にね、お手紙の可なり長いのが解いてすらりと掛つて居る、……好きだと豫て聞きました、艶の好い、細りした、嘴の尖つた眞黑な小犬が、丸窓の蔭から、一寸々々、ちよつかいを出して、其の手紙にじやれて居るのを、三味線に氣を取られて、御存じがなかつたらしい。ひよいと銜へて、すら〳〵と引きながら、今度はお勤めの戸を守る、私を威すつもりと見えて、臺所口へ駈けて出て、ワンと吠えると、離した玉章の片端を私が持つ。「黑、いたづらをおし

でない。」と氣がついて、照吉さんが、お引摺りで立つて小走りに來なすつて、一寸片端を取つてお立ちなさる。其の片端を離さずに、「もし、萩島屋の小照です、姉さん、何うぞ逢つて下さいまし。」と思迫つて涙聲で言つたんです。……莞爾お笑ひなさりながら、「北海道の情人から來た大事な玉章を拾つて下すつて難有う。」と頂いて卷き納めて、「さあ、お上んなさいまし、」とすぐにお引返しなさりながら、「何の、同じ土地の朋輩同志が、御免も今晩はも要るものですか、默つてスッと入つて來て、背後から目隱し爲て驚かしてくれりや可いものを。」と勿體ない最初ッから、巡禮藝者を親類のお扱ひ。

思遣のいゝ姉さんが、私の顏色を見て取つて、さあ、賴みがあるなら言つて御覽、とおつしやるやうなお仕向けでせう。――「姉さん。」と突然袖に摑まつた。肩を辷つて、するりと落ちる寢々子に、振拂はれては一大事と、其のまゝ膝に縋りついて、「姉さん、私に貴女のお名を頂かして下さいまし。」と圖々しさも通越した、尤も私は死ぬ覺悟で、次第をしか〴〵とお話しして、もし肯かれなけりや生きては居まいと、「後生です。」ッてワッと泣くと、其の時照吉姉さんが、――お縫ちやん貴女の母様ですよ）――

……御新造がね、夢見たやうな顏で居た、お縫さんに、じり〳〵と寄つて、肩を抱いて、」